

322  
199

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5

始





井上  
博士

新編中學修身書備考

全



322-199

# 新編 中學修身書備考

## 卷一

### 第一課 修學の門出

目的 新に入學したる初學生に對して學問の目的及び入學の目的の奈邊に存するかを示し、堅き決心を以て修學の途に上るべき所以を諭し、且修學上古人の嘗めたる艱苦を示し、尙文明人の陥り易き弊害を戒め、以て將來を警告するを主眼とす。

#### 要項

- 一、學問の要は身を立て、道を行ひ、以て社會國家に貢獻する如き有爲の人物となるにあることを知らしむ。
- 二、中學校は國家の中堅たる人物を造成するを以て目的とせる所なれば、苟も中學の課程を履まんことを志したる者は、勤勉力行、以て修學の目的を果さざる

新編中學修身書備考

一

大正  
7. 5. 28  
内交



可からざる旨を説く。

- 三、古人の修學が如何に困難なりしかを説き、勝海舟の例によりて古人の嘗めたる辛苦の一端を示し、以て勞苦を厭はざる氣風を鼓吹せんとす。
- 四、修學の施設完備せる聖代の恩澤を説き、併せて文明の弊は動もすれば心身の柔弱を來す所以を示し、以て心身鍛鍊の覺悟を促さんとす。

參考

- 一、孔子曰、古之學者爲己、今之學者爲人。(論語、憲問)
- 二、孔子曰、篤信好學。(論語、泰伯)
- 三、孔子曰、生而知之者上也、學而知之者次也、困而學之又其次也、困而不學、民斯爲下。(論語、季氏)
- 四、古語に曰く、多見者博、多聞者知。(鹽鐵論)
- 五、中庸に曰く、好學近乎知、力行近乎仁、知恥近乎勇。
- 六、古語に曰く、學不在多、要在精之也。(孔叢子答問)
- 七、説苑に曰く、學問不倦、所以治己也、教誨不厭、所以治人也。

八、孔子曰、不曰如之何、如之何者、吾未如之何也已矣。(論語、衛靈公)

九、孔子曰、知之者、不知好之者、好之者、不如樂之者。(論語、雍也)

十、説苑に曰く、不知則問、不能則學。

十一、徒然草に曰く、人に優らんことを思はば、たゞ學問して、其の智を人にまざらんと思ふべし。道を學ぶとならば、善に伐らずとも、かからに争ふべからずと云ふことを知るべきなり。大いなる職をも辭し、利をもすつるは、只學問の力なり。

十二、西諺に曰く、艱難は最良の教師なり。

Difficulties are our best instructors.

十三、語に曰く、艱難汝を玉にす。

十四、西諺に曰く、生れは大切なれど、育ちは更に大切なり。邦諺に曰く、氏より育ち。

Birth is much, but breeding is more.

十五、維新前の教育。維新前には教育の道未だ開けず、子弟の學に就かんとする



や、或は特に師を招き、或は其の私塾に入りて或る専門の事を學ぶに過ぎず。而も是れ上流子弟の爲す所にして、一般の子弟に至りては、殆んど無學文盲の有様なりき。當時藩校及び寺小屋なるものありしが、此の中藩校は藩の子弟のみ與り、一般庶民は通學するを得ざりき。寺子屋に於て一般の子弟は教育に與るの端緒を開かれしと雖も、普通教育としては尙不完全なるを免れざりき。そもく寺子屋なるものは僧侶、神官、浪人等の開きし兒童教授所にして稀には婦人にして之に従事せる者さへありき。寺子屋は必ずしも寺院に於て經營せしにはあらざりしが、之に従事せる者は寺僧最も其の多數を占めたりき。寺子屋にて教へたるは、先づ第一に習字なり。されどこは單に書法を授けたるに止まらず、その手本の文句によりて修身、地理、作文等をも教へたるなり。即ち當時の手習は讀み方、書き方、綴り方を包含せし外、尙修身、地理等の事柄をも教へたるなり。尤も其の内容の貧弱にして、方法の拙劣なりしことは言を竣たず。其の外讀書、算術、或は裁縫、生花、茶の湯等を授けたるが、是等は生徒の希望に應じて課したるものにして、所謂隨意科なりき。かくの如く課

目と云ひ、教授法と云ひ極めて不完全、不條理なりしにも拘らず、師弟の關係に至りては秩序整然たる間に親愛の情掬すべきものありき。子弟の師匠を尊敬したるは云ふ迄もなく、師匠も亦子弟を愛護し、單に學藝を教ふるに止まらず、禮儀作法を教へ、又時々修身上の講話を爲したり。かくして子弟は此を出で、後も我が師匠を訪問して舊恩を忘れず、師匠も亦子弟の成業を祈念し、指導忠言を吝まざるの風ありき、其の敦厚の風習は今日より見て頗る欣慕すべきものありしなり。

注意 本課教授の際は中學校令を參照せらるべし。

## 第一課 修身の道

目的 學問の本は身を修むるにあり、されば道徳を修むることを目的とせる修身科は實に教育の眼目たることを明かにして、修身科の重要なる所以を悟らしめ、次に修身科の性質を述べて之に對する心得を示し、以て修徳の途に上らしむることを目的とす。



要項

- 一、身を修むることが學問の基本なることを明にす。
- 二、道徳は人の須臾も離るべからざる道なるが故に、之を修むる所の修身科はその關係する所廣大なれば之を完全に修得することの容易ならざること説く。
- 三、修身は實行を主眼とし、善惡を知るは其れに従つて行爲を律せんが爲なることを述べ。
- 四、併し乍ら實行せんが爲には先づ知らざるべからず。然も其の知は實行せざるを得ざる程徹底せるものならざるべからざること説く。
- 五、故に修身科に於ては一方に善惡の知を磨き、他方に實行の精神を修養するを以て目的となす。
- 六、他日中等以上の社會に立ちて國民を教導すべき重大なる責任を負へる今日の中學生は特に修身の道に勵精せざるべからざること諭す。

参考

- 一、大學に曰く、自天子以至庶人、壹是皆以修身爲本。是れ中江藤樹をして發憤以て聖人たらんとする大志を立たしめたる語なり。
- 二、禮記に曰く、教也者、長善而救其失者也。(學記)
- 三、禮記に曰く、雖有嘉肴、弗食、不知其旨也。雖有至道、弗學、不知其善也。(學記)
- 四、法言に曰く、學者所以求爲君子也。
- 五、易に曰く、君子進徳修業、忠信所以進徳也、修辞立其誠、所以居業也。(文言)
- 六、語に曰く、教訓者以道義爲本。(潜夫論)
- 七、法言に曰く、大人之學爲道也、小人之學爲利也。
- 八、禮記に曰く、玉不琢、不成器、人不學、不知道。
- 九、史記に曰く、恃徳者昌、恃力者亡。
- 十、中庸に曰く、天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教、道也者、不可須臾離、可離、非道也。

(第一章)

注意 近時生存競争の激甚を加ふるに従つて學問を以て功利の業となし、道徳を無視し、或は道徳を以て功利の方便たらしめんとするの風なしとせず。故にこ



の間に立ちて青年子弟をして内心より呼應する如き眞の道徳を修養せしめんが爲には始めより確乎たる信念の養成に努めざるべからず。即ち學問は完全圓滿なる人物の造成を以て理想とし、完全圓滿なる人物の養成は實に修徳を以て基本となすの理を力説鼓吹するを緊要なりとす。教授者は特にこの點に留意せられんことを希望す。

### 第三課 師の恩

目的 學生修徳の第一歩は師恩を知るにあるが故に此の心を鼓舞し、以て師に對する道を教へ、斯くて能く其の命令を奉じて智徳の修養に専心ならしむることを主眼とす。

#### 要項

- 一、師は父母に代りて子弟教養の任に當るものなれば、其の恩の洪大なることを説く。
- 二、師の喜憂が専ら生徒の身の上に懸れることを示して師の心事を明かにす。

- 三、伊能忠敬の例を以て師に對する道が敬愛の誠を表すにあることを示し。
- 四、尙師に對しては能く胸襟を開きて萬事其の指導を仰ぎ如何なる場合と雖も怒り怨むべからざることを説く。

#### 参考

一、伊能忠敬は上總國武射郡小堤村神保貞恒の第三子にして、十八歳の時出でて、下總國佐原村の伊能家の養子となる。時に伊能家の家産頗る傾きけるが、忠敬よく儉素を守り、日夕怠なかりしかば、家運漸くにして復舊す。寛政六年忠敬産を子に委ね、江戸に出で、高橋東岡の門に入り、かねて志す所の曆學を學べり。時に忠敬は五十歳にして師の東岡は三十二歳なりき。是れより忠敬は一意専心研鑽に従事したる爲め、忽ちにして嶄然頭角を露はし、推歩測量の事に至りては門中肩を比ぶる者なきに至れり。寛政十二年幕府の命を受け、蝦夷の地を測量したるを始めとし、日本全國の海岸を測量し、精密なる地圖を作製せり。其の間實に十有八年の日子を費せり。文政四年四月七十四歳にして没す。明治十六年朝廷忠敬の功を追賞して正四位を贈らる有志の士



相謀りて其の記功碑を東京芝公園内に建つ。

二、古來君父師を三尊と云ふ。

三、孔子家語に曰く良藥苦於口而利於病、忠言逆於耳而利於行。

四、木下順庵は京都の人なり。松永昌三を師として學を勤め行を勵みけるに天性穎敏にして學大に進み、其名遠近に聞えたり。加賀侯幣を厚くして之を招かれしに、順庵固辭して吾師松永先生の子未だ仕途に就かずして家計豊かならず、先づ之を召したまへと請ふ。侯之を聞きて曰く、今の世には骨肉を分ちたる同胞も刎頸の交を結べる親友も名利の爲には一朝にして仇讎の思をなす、然るに順庵は己を後にして其師を先にす、義に篤きものと云ふべしと併せて二人を聘せられぬ。其後順庵幕府の儒官となり、其門より新井白石、室鳩巢、兩森芳洲、祇園南海等の名家を出せり。

#### 第四課 服従

目的 服従の美德なる所以を述べ、殊に現代に於てそが益々必要を加ふることを

示して服従の精神を鼓吹し、且其の心得を説きて是れが實行を期せしむるを以て主眼とす。

#### 要項

- 一、服従の意義を説く。
- 二、服従は卑屈にあらずして却つて忠孝の道もこゝに始まり、實に修徳の出發點なることを示す。
- 三、社會はその統一を維持する爲に各種の規律を要し、従つて服従の缺くべからざることを及び其の美德なる所以を明かにす。
- 四、服従の際守るべき心得の一般を示す。其の中主要なるものは快く爲すこと速に實行すること、陰日向なきこと是なり。

#### 参考

- 一、西哲曰く服従は幸福の母なり。 *Obedience is the mother of Happiness.*
- 二、伴蒿蹊の歌に曰く、末つひに海となるべき山水もしばし木の葉の下くぐるなり。



三、メーゾン曰く、實に服従は兒童の有らゆる義務を包括す。この故に其他有らゆる義務は其兩親に對して服従の義務を全うする一手段として履行せらるゝなり。而して獨り是れのみならず、良心に對する服従、法律に對する服従、神の命令に對する服従の如き服従の美德は人類の總ての義務を包括するものなり。(家庭教育論)

四、社會と服従。社會は如何なる方面を觀るも、如何なる人に就て云ふも服従を必要とせざるはなし。國家に法律あり、官衙、學校、會社、何れも規則の守るべきものあり、市町村には市町村の規約あり。之を人に就て云へば、長くも先帝陛下は皇祖皇宗の御遺訓を遵守せらるゝ旨仰せられ、今上天皇陛下は先考の御遺業を紹述せられ給ふ旨詔らせ給ふ。下は官吏、軍人、會社員、其の他いやくしくも社會の一員として團體的生活を營むものは、皆その所屬團體の規則、上官、上役の命令に服従せざるべからず。されば服従は社會的生活と離るべからざる美德なりと謂ふべし。

注意 年少者は動もすれば放縱を自由となし、服従を以て卑屈と誤解することなきにあらざり。故に少年時代よりその美德なる所以を確實に理解せしむることを要す。

### 第五課 勉強

目的 勉強が學生第一の要務なる所以を説き、其の方法を示し、以て其の實行を指導し、斯くて學生をして勉強を樂むの境涯に到達せしむることを主眼とす。

#### 要項

- 一、勉強が學生第一の要務なる所以を明かにす。
- 二、勉強の基本は課業にあり、故に課業に専心なることが修學の要道なることを示す。
- 三、課業をして充分有効ならしめんが爲に豫習の必要なること、又豫習が應用の力を養ふ好機會なること及び其の際には力の及ぶ限り努力すべきことを説く。
- 四、復習は記憶を確實にし、理解を明瞭ならしむるに効果大なるものなれば豫習



と併せて日々勵行すべき旨を述べ、

五、勉強を勵むときは興味次第に加はり遂に之を樂しむに至り、斯くて之を樂むことは學業の進歩を促進する効果大なるものなれば、始め多少の苦痛を忍びて能くその習慣を養ふべきことを説きて學生の覺悟を促す。

参考

一、諺に曰く、稼ぐに追ひつく貧乏なし。

二、西哲曰く、勉強は幸運の母なり。 Dilligence is the mother of good fortune.

三、西哲曰く、怠惰は有らゆる罪惡の根源なり。 Idleness is the root of all evils.

四、語に曰く、點滴石を穿つ。 The drop hollows the stone.

五、中庸に曰く、人一能之己百之、人十能之己千之、果能此道矣、雖愚必明、雖柔必強。

六、荻生徂徠(江戸儒者、柳澤侯に仕ふ、享保十三年没、六十三)書を看て暮に向へば則ち出て、簷の際に就

く簷の際亦字を辨ず可からざれば則ち入つて齋中の燈火に對す、故に且より深夜に及ぶも手卷を釋くの時なし。其の平生分陰を惜しむこと率ね此の類

なり。南郭(服部南郭、京都の人、徂徠の門人、詩をよくす)某歲元日徂徠を訪ふ。徂徠方に几に寄りて孫子を閱き面垢つけども洗はず、髮亂るれども梳らず、新年を知らざるもの如し。乃ち亶々兵を談じて置かず、南郭竟に新禧を祝するを得ざりき。

(先哲叢語)

七、怠らず行かば千里の外も見む云々は徳川家康の歌。

八、堀保己一は武藏國兒玉郡保木村の人なり、幼き時病みて目を失ひしかば、十五歳にて江戸に出て、雨富某の家に寄りて絃歌、劍術を學べども成らず、獨り古書を好み、時として飲食を忘るゝことあり、其一書を得る時は人に請ひて之を讀ましめ、聽きたる事を能く暗記して遂に文字にも通じたり。後に萩原、川島、山岡の諸氏に従ひて、和漢の學を修め、二十四歳にして加茂真淵の門に入り、益々皇朝の學を勉め、國史、律令、歌書、物語を始めとして、あらゆる書を涉獵して殆んど記憶せざるはなく、遂に和學講習所を設けて數多の子弟に教授せり。其の編次する群書類従は四十五年を閱して、一千二百七十部、六百七十卷を刻せしに、又一千八百部の續編を成功せり。



九、英國十九世紀の文豪マコーレーは幼時より非常なる勉強家にして又精確なる讀書家なりき。書を讀むや先づ一頁を讀み了ればその一頁の事實を確實に心中に記憶したるや否やを自ら確め、尙不確實なる所あれば其處を幾度となく繰返して讀み而して一頁につき四回乃至五回は必ず通讀し、常に此の習慣を行ひしかば、彼は數百頁の書籍にても、始より終りまで殆んど暗記せざる所はなしと云ふ。かくて彼は暗記したる所を全く我が知識となし之を後年文筆に携る際に自由自在に活用して一代の文豪と謂はるゝに至りしなり。

### 第六課 勉強家ナポレオン

目的 修學時代に於けるナポレオンの勤勉力行の跡を示して學生の奮發心を喚起するを以て主眼とす。

注意 ナポレオンの生涯特に其の品性に就ては非難すべき點少すとせず。然りと雖も其の意志の鞏固にして勤勉倦むことなく世人の毀譽をよそにして一意専心學業に勵精したることは以て學生の範とすべきなり。都會の華かなる生

活に接するも些も心を動かすことなく、或は學友に輕蔑せらるゝも毫も意に介せずして却て其の境遇を利用して勉強せしことは力説するを要す。

### 第七課 正直

目的 正直は修徳の基本なるが故に、其の美德なる所以を説き以て心言行のよく一致せる透徹せる性格を養成せしむることを目的とす。

要項

- 一、正直の意義を述べ、それが修身の根本なることを説く。
- 二、正直ならんが爲には先づ虚言を断たざるべからざること並に虚言の原因及び其の害惡を述べ。
- 三、虚言の増長して衆惡の根源となることを示す。
- 四、不正直の行爲を例解し。
- 五、一般に言行の不直は不正直の心より發するものなれば、眞に正直ならんが爲には先づ心より改めざるべからず、心正しければ言行亦従つて正しかるべき



ことを説きて正直修養の道を示す。

参考

- 一、諺に曰く、正直の頭に神宿る。
- 二、西哲曰く、正直は最良の策略なり。 Honesty is the best policy.
- 三、貝原益軒曰く、あやまちをはびていつはりかざるべからず。是心をあざむき人をあざむくものなり。既にわが過あらんはすべきやうなし。あやまらば直に言ひあらはすべし。かくしていつはりかざるべからず。あやまりて又人をあざむくはあやまりをかざるなり。いよ／＼罪深くなる(大和俗訓)。
- 四、大學に曰く、所謂誠其意者、毋自欺也。
- 五、中庸に曰く、至誠無息、不息即久、久則徵、徵則悠遠、悠遠則博厚、博厚則高明。
- 六、孟子曰、萬物皆備於我矣、反身而誠、樂莫大焉。(盡心上)
- 七、スマイルズ曰く、言語の信實、行爲の信實は人の品行に於て身體の脊骨なるが如く、これなければ立つこと能はず、又曰く、誠實なる人の勢力はその品行をして尊からしむ。(西國立志編)

- 八、カポット曰く、偽者は常に己の虚偽を成功せしめんが爲に頼めるものを己の虚偽によりて覆へすものなり。虚偽はモルヒネ飲用の習慣の如く自殺の鈍き一手段なり。モルヒネ常用者は習慣となるに従ひて其の藥劑の分量を増加せざる可からざる如く、虚偽も又反復するに従ひて其の強さを増さゞれば効果を奏せざるに至るべし。偽者仲間にありては虚偽も差したる効果あるを得ざるものなり。(日常倫理學、二四七頁)
- 九、カポット曰く、虚言は實に謀殺に異らず、誠に信任の生活は肉體上の生存よりも遙かに高貴なるものなり。此の世に於て全く他の信任を缺けるものは到底人間に相應しき生活を營むを得ず。他の信任を有せずして成功せるものは古來未だ嘗て一人もあることなかるべし。信任を有せざるものは尊むべき眞實を無視して惡むべき虚偽の言行を敢てするに由る。人は虚偽の言行を利用して一時的の成功を遂ぐることも斯る成功は浮雲の如く消散すべく、夢幻の如く果敢かるべし。(日常倫理學、二五〇頁)
- 十、パウルゼン曰く、カントは眞實を自己に對する本務中に數へ、虚偽を自家の品



位を滅却するものとして自殺と併べ、自殺が肉體的生活を亡ぼす如く、虚偽は道徳的生活を亡ぼすものとせり。

**注意** 世に虚言程己を毒し人を害するものなく、又虚言程改め難きことも少かるべし。されど如何に至難の業なりとも、品性の修養をして完からしめんが爲には、必ずこれが根絶を期せざるべからず。これが根絶の法は第一に如何なる場合にも虚偽を排せんと決心とこれを遂行せしむる忍耐力とを要す。第二によく習慣の力を利用して努めて日々虚偽を用ひざる習慣を養ひて止まざるにあり。尙本邦人は一般に不正直、不誠實なりとは是迄屢々外人より批評せられ、非難せられし所なり。思ふに我國にても、武士道隆盛の時代には正直を旨とし、或は然諾を重んずるの美風ありしかど、生存競争劇甚を加ふるに伴ひ、浅慮なる者は動もすれば、不正直を以て成功の徑路と解するに至る。されど此の如きは獨り個人の成功を不可能ならしむるのみならず、延いては國家の品位を汚し、累を一般の國民に及すに至るや必せり。故に正直の習慣を養成するは、之を個人よりするも、將た國家よりするも、特に肝要なるを覺ゆ。さればこれが教授に際

してはその必要なる所以を充分力説するを要す。

## 第八課 順序

**目的** 物に順序あることを教へ、着實の精神を以て學問修徳に勵み、かくて一歩一歩向上の途に上らしめんことを主眼とす。

### 要項

- 一、順序を履みて進むことが智徳の修養上肝要なる所以を例解す。
- 二、成功を急ぐことの不可なるを説き、日々の課業を着實に勉強せば、成功は期して埃つべきものなることを述べ。
- 三、道徳の實踐に於ても小善を積み、卑近なる行爲より漸次に高尚なる域に進むことが大善に達する所以なることを例解す。
- 四、今日の社會の實狀に徴するも、順序を無視して成功するを許さず。故に之を顧みざらんとする無謀の徒は必ず失敗することを示し、以て向上進歩の確實なる道を教ふ。



参考

- 一、西諺に曰く、一事を怠る者は萬事を怠る。 A dawdle in one thing is a dawdle in all.
- 二、物、本末あり云々。大學、經第一章。
- 三、フランクリンの功過表及び十三徳の事はその自叙傳に出づ。(第三卷第六課備考参照)

- 十三徳とは一、攝生。二、沈黙。三、秩序。四、決斷。五、儉約。六、勉勵。七、誠實。
- 八、公正。九、中庸。十、清潔。十一、平靜。十二、仁愛。十三、謙遜。

四、諺に曰く、千里の行程も一歩より始まる。  
五、黒田如水或る日秀吉に成功の秘訣を問ふ。秀吉答へて曰く、予が今日ある所以のもの、何の奇術無し。唯今日は今日の事を一心不亂に勤めたるに在るのみ。明日を思はず、昨日を考へず、又固より他事を思はずと。

六、中江藤樹のことは第二卷第一課、二宮尊徳のことは第三卷第十二課備考参照。  
**注意** 社會の秩序未だ定まらずして、爲すべき事あれども人材なき状態にある時は順路を辿らず又修養も積まざる者にして往々特殊の地位、顯要の職に登るこ

となしとせず。然るに今日の如き文明の社會にありては萬事整然たる秩序の下に組織せらるるを以て、茲に處するの道は只正當なる順序を逐ふの一法あるのみ。教授の際に特にこの點を力説せざるべからず。

### 第九課 健康

**目的** 健康の貴重なる所以を説き、保健の道を示し、以て其の維持増進を促すを以て主眼とす。

**要項**

- 一、健康は人生一切の幸福の基礎なることを説く。
- 二、健康従て人の壽命は攝生の如何に由ること大なるを以て、青年時代に不攝生を戒めざる可からざることを教ふ。
- 三、教育は智徳體の三方面に亘り、何れも尊重すべきものにして、體操科は體育の爲なるを以て、その時間には全力を用ひてこれに従ふべきことを説く。
- 四、攝生上飲食に注意することの必要なる所以を述べ、特に間食の有害なること



を示す。

- 五、運動の効果を述べ、且之に關する心得を與ふ。
- 六、身體、衣服、住居の清潔が攝生上肝要なる所以を説き、且之に關する注意を授く。
- 七、ジユムランの例話に由つて清潔、節制、運動の三者が保健上肝要の道なることを述べ。

参考

- 一、ジユムランの話は土屋鳳洲の「大醫作無蘭」にあり。
- 二、西諺に曰く、健全なる精神は健全なる身體に宿る。 *A sound mind in a sound body.*
- 三、佐藤一齊曰、養心志養之最也。養體軀養之中也。養口腹養之下也(言志叢錄)。
- 四、貝原益軒曰、身者父母之遺體也。不敢敬乎。不能謹疾而至傷生者不孝之甚也。且自暴其天物也。須常以攝生爲心。不可忽初之(初學知要)。
- 五、エックレジアステス曰く、健全なる身體より優れる富は無く、内心の喜より優れる喜はなし。(マーデン立志論) *Ecclesiastes: There is no riches above a sound body and no joy above the joy of the heart. (Marden, Rising in the World)*

六、キリアム・デュキット・ハイド曰く、吾人の體力は之を使用する爲に賦與せられたるものなれば、若し之を使用することなければ、吾人の體力は次第に消滅するに至るべし。而して世に運動の廢絶ほど確實に吾人の體力を絶滅し去るもの無し(實踐倫理學) *William Dewitt Hyde: Our powers are given as to be used; and unless they are used they waste away. Nothing destroys powers so surely and completely.*

(Practical Ethics)

七、ブラック曰く、常人の人生觀は常に其の體質如何によりて定まる。即ち大概の樂天觀はよき消化に基因し、厭世觀の多くは胃弱よりして起る。(自修論)

*Hugo Black: The common man's philosophy is usually the fruit of his physical temperament, most optimism can be traced to a good digestion, and most pessimisms to dyspepsia. (The Practice of Self-Culture)*

注意

- 一、清潔に就ては之を尊重するは我が國民の特性なる所以を説き、益々之を發揮せんことを勸奨するを要す。



二、身體の注意を怠り、病弱に陥りて後醫療するか如きは最も拙劣なる道なるを以て、平素節制、運動清潔を努め、或は冷水浴、深呼吸等によりて鍛鍊する積極的方法に由つて健康の増進を計ること肝要なれば、教授の際にはこの點に留意せざるべからず。

### 第十課 言語動作

目的 言語動作に關する一般の心得を教へ、以て學生たる品格を維持せしむることを目的とす。

#### 要項

- 一、學生たる品格を維持する爲に言語動作に注意するこの必要なる所以を述べ。
- 二、言語動作は禮儀に適ふを要し、従つて學生の言語動作は簡朴の中に自ら禮容の備はれるものならざるべからざる所以を説く。
- 四、動作も亦活潑なるを要し、粗暴と因循との避くべき所以を説く。
- 五、野卑なる言語、粗暴なる動作は傳染し易きものなれば、自ら慎むは勿論、他にこ

れありと雖も決して模倣すべからざることを諭す。

- 六、言語動作の卑しきは品格を傷け、他人には無禮となり、延いて爭論の端となる故深く之を慎むべき旨を教ふ。

#### 参考

- 一、暴を以て暴にかふ、史記列傳第一。
- 二、貝原益軒曰く、言は心の聲なりと古人云へり。人の心の内に在る事言によりて外に出づ。一言濫りに發すれば駟馬も追ひがたし。よき事も悪しき事も皆口より出づ。口をつゝしめばあやまちすくなく、耻辱なく、わざはひなし。

(大和俗訓)

- 三、新井白石曰く、言葉花咲くものは心かならず實なし。(聖學自在)

- 四、佐藤一齋曰、慎言處、即慎行處。(言志錄)

- 五、一齋又曰、我言語、我耳可自聽、我舉動、我目可自視、視聽既不愧於心、則人亦必服。

(言志晚錄)

- 六、ソロモン曰く、言多ければ罪なき事能はず、唇を治むる者は智慧あるなり。(箴)



言) In the multitude of words there wanteth not sin : but he that refrainth his lips is wise.

七、西哲曰く、大言壯語する者は實行すること少し Great talkers are little doers.

八、語に曰く、辭多ければ品少し(源氏河海抄)。

九、孔子曰、君子欲訥於言而敏於行(論語里仁篇)。

十、朱子曰、禍從口出病從口入。

### 注意

一、一方にては無用の饒舌を避けて沈黙の徳を學ぶと同時に、他方にては思ふ所を有りのまゝに語る正直淡泊の徳を養ふこと肝要なり。本邦にては古來饒舌の戒めは多けれども包み隠さず語ることを教ふること少きを覺ゆ。教授の際はこゝに留意せられんことを希望す。

二、こゝにて談話に關する一般の禮儀作法を示されたり。

## 第十一課 質素

目的 質素は身を修め家を齋へ、國家を維持する爲に缺くべからざる要道なれば、

個人の爲將た國家の爲勤儉質朴の美風を養成せしむることを主眼とす。

### 要項

- 一、質素の意義を解き、古人の範例を示し、尙時代の推移と共に質素の必要彌々加はることを述べ。
- 二、奢侈は徳を損じ身を滅す基なれば、學生たるものは特に質素を旨とし、以て己を善くし他を益するの道を講ぜざるべからざることを説く。
- 三、華美贅澤は虚榮心と私慾とより起る故に、質素の徳を養はんが爲には虚榮を戒め私慾を制することの肝要なるを教へ、以て質素の風を養成せしめんとす。

### 参考

- 一、孔子曰、士志於道、而恥惡衣惡食者、未足與議也。(論語里仁)
- 二、家康曰く、不自由を常と思へば不足なし。(修徳園叢書)
- 三、尊徳曰く、飯と汁木綿着物を身を助く其餘は我を責むるのみなり。  
(二宮翁夜話)
- 四、スマイルス曰く、貯蓄せられたる最初の一ペニイは人世の第一歩なり、而して



此一ペニーが貯蓄せられたるの事實は克己先見深慮智慧の存することを示すものなり。(儉約論)Smiles: The first penny saved is a step in the world. The fact of its being saved and laid by indicates self denial, fore thought, prudence, wisdom. (Thrift)

五、光圀平居儉素を尙び楮紙を愛惜す。退老後簡斷封囊を藏して長短となく必ず接聯して之を用ふ。歌詩稿を起すには必ず反古紙を用ひ、水を席に灑せば必ず之を拭ふに布を以てし、紙を以てせず、仕女を戒めて多く紙を用ゐるなからしむれども従ふ能はず、一日公之に云つて曰く、製紙を見るは甚だ樂し。盍んぞ一度目を寓せざると、皆喜んで行かんと欲す。乃ち仕女數十を松草村に遣りて之を見せしむ、棚を川原に架し、蒔席を布き四方に障壁なし。時に嚴冬寒氣骨を刺す、紙を製する者皆赤脚にして水に入り操作甚だ苦しむ。仕女大に驚き、又寒痒に堪へず、久しく見る能はず。既にかへり狀を申す。公曰く、紙を製する勞則ち爾り、吾汝曹を戒しむる所以也と。是に従つて敢て濫費せず。

(名賢言行錄)

六、井伊家(井伊掃部頭)の傳岡本半助は世上に名高き男なり。半助後に政治を預

りて江戸勤番に出でける時、半助と知音なる人半助が方へ尋ね來るに、我居間ことごとく板の間にして只坐する所疊一枚を敷けり、夜は小さき蒲團一つさりにして、道具、家財、挾箱一つにて仕舞、尋ね來し人暫く物語に時移り晝時分にもなりしかば、飯をたべてゆけよと頓て膳を出だしける、さも黒き飯に青葉のはしらかしたる汁に向には小さき赤鯛一尾を焼きて付けたる計り也、亭主久しぶりにて汁と魚物をくひたり、かへ給へとしひけり、扱中酒を出だすに胡麻を摺り込みたる味噌を肴にして、客も亭主もよき程飲みて酒を入れにけり、其上にて亭主半助申しけるは、今日は御珍客故に過分の馳走をいたし、我等も御蔭にてよき相伴を仕り候とあり、客も興さめて扱は今日のもてなしを亭主にはよきほど御氣をはらせられしにや、我らは平日もかやうなる品はたべ申さずといひければ、半助重ねて嗚呼の事をば宣ふ人也、此上の馳走何かあるべき、若此上の饗應あるとも、それはもてなしと云ふべからず、奢といふもの也、我等二十五萬石のしめくゝり致す役柄なれば今日の行心跡入大切也、あたら金銀をいかに口あたりがよければとて腹の中へ入れて糞にして仕舞と云ふは勿



體なき事也。是より上の食事をまゐる事全くの奢の至也。向後止め給ふべし。我等は半春の飯に香の物より外喰はず。以來を慎み給へと意見しけるとなり。

(兩窓閑話)

**注意** 近時學生の生活を見るに漸く華奢の風増長せんとす。華奢の害たるや單に物質上の利害にのみ止らず、個人之精神國民之風教より見るも質素の風を養ひて質實の精神を養成し併せて富強の基を培はんが爲には特に青年學生の儉素に竣つこと大なりとす。故に年少の時よりこの美風を養はしむること肝要なり。

## 第十二課 規則正しき習慣

**目的** 文明の進歩に伴ひて社會萬般の事益々規律的ならんとするに方り學生をして日常生活の間にこの習慣を養成せしむるを以て主眼とす。

**要項**

一、諺に「善く働き善く遊べ」と云ふは、何事も規則正しくせよとの意味を包含し、其

の他何事を爲すにもこの習慣の必要なることを説き、其の利益として。

二、第一にこの習慣は時間の經濟となる事を教へ。

三、次に健康上裨益すること多きを示し。

四、品行にも關係することを説き。

五、尙一般にこの習慣あるものは成功し、然らざるものは失敗することを示して其の重んずべき所以を述べ。

六、大哲カントの例を示して、これが實踐に資す。

**参考**

一、大學に曰く、小人間居爲不善。大學傳第六章

二、一齊曰、送昨日、迎今日、送今日、迎今日、人生百年、不過如此、故宜慎、一日、一日、不慎、遺醜於身後、可恨。(言志晚錄)

三、スマイルズ曰く、秩序は富なり、秩序を守らぬ人の富めるが稀なると共に、秩序を守る人の貧しきは極めて少し。(儉約論)

Smiles : Order is wealth ;..... Disorderly persons are rarely rich, and orderly persons are rarely



poor. (Thrift)

四、ハイド曰く、規律あり又秩序ある人の千百の事務を處理するは之を缺く人が僅か數種の事務を處理するよりも更に容易に且巧妙なり。是れ蓋し其人に敢て人間以上の怪力存するが爲に非ず、只夫れ執務の上に規律あり秩序あるが爲めなり。此に於てか他人が遅々として一事を爲す間に早くも數百倍の事業を成し遂ぐるに至るなり。而して是れ又實に一國の大事を料理する政治家、何百萬の取引を爲す豪商が竟に普通凡庸の人と頗る其の選を異にする點なりとす。(實踐倫理)

五、バウルゼン曰く、規律を重んずる徳は之を固執(固執とは一個の目的を達する爲めに避くべからざる困難努力を認容し、長く之に堪ふる意志力なり)の一面と見るを得べし。こは精確に事物を處理する習慣の謂にして、生活上自由と平和とを得るに甚だ切要なる徳なり。不規律の結果は困難と混雜とにして併せて恐怖と不幸とを伴ふ。是れ殊に遅延の傾向を有する人に見る所なり。人其從事せる事業にして成らんか精神の平和を得べし。之に反して懶惰な

れば心常に平かならず。遂に時期を察せず、倉皇之を成さざるべからざるに至る。十五分後れて途に上る者は終日苦痛を感ずべし。(倫理學大系)

六、ブーフラン(一七〇七年九月佛國モンントバルドに至り)は四十年の間晝課は九時より二時に至るまでを限りとし、夜課は五時より九時に至るまでを以て限りと爲す、其の精心動力常に習慣となれり、その傳を作るもの曰く、課業はブーフランの必用の具なり、學習は其の畢生樂迷(ウカシ)の事なり、其の功を成就しける後に至れども常に我はなほ數年この學に身を委ねんことを望むと云へり。

(西國立志編)

注意 規則正しき習慣を養成することは時間の利用と密接なる關係を有するが故に第二卷第十課寸陰を惜めを參照せられたし。

### 第十三課 思慮

目的 過失を避け失敗を免れんが爲には思慮なかるべからず。故にこゝにその習慣の養成を説き以て修養に資せんとす。



要項

- 一、過失、失敗が主として思慮分別の足らざるより起ることを示す。
- 二、平時にも、又事變の際にも思慮の必要なる所以を述べ。
- 三、賤ヶ岳合戦の例に依りて思慮ある者は成功し、之を缺く者が失敗することを解せしむ。
- 四、思慮は決斷を伴はざるべからず、然らずんば優柔不斷に陥り、事を成す能はず、故に兩者相伴ふべく、尙重大事件に際會せば師長に謀るべきことを教へ、以て事を處し、行を爲すに愆なからしめんことを期す。

参考

- 一、孔子曰、人無遠慮、必有近憂。(論語衛靈公第十五)
- 二、孔子曰、不曰如之何、如之何者、吾未如之何也、已矣。(同上)
- 三、貝原益軒曰、智なければ心に善あれども行ふべき道を知らずして、みだりに行へばあやまりてひがごとのみ多し。父母によくつかへんと思へど孝の道知らざれば不孝に歸す。すべて智なくして道を行ふこと能はず。人の惡

をなすは不知より出づ。(五常訓智)

四、益軒曰く、思慮して善惡をよく明らめられたれば、必決斷して猶豫なく行ふべし。思慮して理明らかになりても、決斷強からざれば行はれず。悠々としてむなしく時を過すはあし。所謂、見義而不爲、無勇也。思慮と決斷との二そはなりてよし。思慮なくしてみだりに早く決斷すればあやまる。是不智なり。思慮して道理は分りぬれど悠々として、時を失ふはをこたりなり。

(大和俗訓、躬行下)

五、ゲーテ曰く、世に思慮なき活動程恐るべきはなし。 There is nothing so terrible as activity without in sight. — Goethe

六、西哲曰く、思惟を須ひざる人は賢者となるを得ず。 He that never thinks never can be wise.

第十四課 反省と改過

目的 行爲前の思慮が過失、失敗を免るゝ要道なる如く、行爲後の反省は其の行爲の是非善惡を批判して、正善を助成せしむると共に邪惡の改善を可能ならし



ひる上に缺くべからざる道なり。故にこゝに反省と改過の道を説きて遷善の實を挙げしめんとす。

要目

- 一、反省の意義を解く。
- 二、他人の短所を見るに敏にして己が非は之を蔽はんとする一般の人情を棄て己を責むるに嚴なるを要することを述べ。
- 三、過失は常人の免れ難き所ならんも、其の際に必ず反省し悔悟して之を再びせざらんことを要す。是れ修徳の要道なり。
- 四、過は其の小なるに當りて改めずんば遂に改め難き大過失を醸して惡人と伍するに至るものなれば、小過失と雖も必ず之を改めて憚ることあるべからず。
- 五、過あらば假令他人は知らずとも、我が良心は必ず之を苛責して赦すことなし。良心を満足せしめ、其の咎を受けざることに努むるは修徳上最も肝要とする所、又過失を遠かる根本の道なることを説く。

参考

- 一、孔子曰、過則勿憚改。(論語、學而第一、並に子罕第九)
- 二、子夏曰、小人之過也必文。(論語子張第十九)
- 三、曾子曰、吾日三省吾身、爲人謀而不忠乎、與朋友交而不信乎、傳不習乎。
- 四、過は必ず氣質の偏より起る云々、貝原益軒、大和俗訓、躬行上。
- 五、王陽明曰、夫過者、自大賢所不免、然不害其卒爲大賢、爲其能改也、故不貴於無過、而貴於能改過。(救條示、龍場諸生)
- 六、諺に曰く、人の振見て我が振直せ。
- 七、慈鎮の歌に曰く、何故に捨てける身ぞと折々はすがたに恥ぢよ黒染の袖。
- 八、益軒曰、人非聖人、誰無過、雖有過、知之而能改、則歸無過、故人有過、非所以爲恥、苟私意蔽固、則雖有過、而不能知之、雖知之、又不能改、所以爲可恥也、方其有過時、不可以爲非過、而遮護掩藏、須直爲己之過、顯揚而速改之、然則於其心術也、無所分毫損闕、何恥之有、子貢所謂君子之過也、如日月之食焉、過也人皆見之、更也人皆仰之者、此之謂也、苟恥過、遂非、以爲非吾過、而僞飾掩藏、則其爲過也益大、而罅漏百出、所以甚爲可醜也、子夏曰、小人之過也、必文者、此之謂也。(慎思錄、卷之一)



九、カーライル曰く、人間は到底常に真直に歩むことは能はず、要するに總ての行為に於て懺悔改過こそ人間にとりて最も貴けれ。(英雄崇拜論) Carlyle: It is not in man that walketh to direct his step. Of all acts, is not, for a man, repentance the most divine? (Hero-Worship)

十、西哲曰く、過つこそ人間なれ。To err is human.

十一、西哲曰く、矢絃を放れし後、氣を付けよと叫ぶも事既に遅し。  
It is too late to cry, "holdhard" when the arrow has left bow.

十二、佐久間象山(信州松代藩の人、通稱啓之助、後修理と改む、文學に長じ又兵學に名あり、に於て肥後の浪士に要撃せらるゝ常、鏡を懐にす、蓋し以て自省するなり、若し人ありて浮誇實なき言を爲さば、輒ちかの鏡を出し示して曰く、汝の面を見よと、佐々木氏著延世明哲遺訓)。

十三、瀧鶴台の妻は醜女なり、人娶らんとする者なし、父母因て之を娶る者あらば卑賤を擇まざらんとす、而して女獨り自ら高く居り、人に語つて曰く、妾は鶴台先生(長門藩の侍醫、名は長燈、彌八と稱す、山縣周南に從て學ぶ、周南没後、明倫の如き館の寮酒となり、藩の公に傳説を兼ね、安永二年正月卒す、年六十五)の如き

人に非ざれば嫁せずと、人其非望を嗤ふ、鶴台聞きて之を奇とし、以て家を治めしむべしとなし、之を娶る、果して内助の功あり、一日其袖より赤絲絛を落す、鶴台訝て之を問ふ、妻答へて曰く、妾常に二絲絛を持ち、心に善意を生じ、美譽をなす時は白絲を結びて絛に巻き、又惡意惡行あれば、赤絲を續いて絛く、漸く收めて白絛の大さ、赤絛の大さに若くに至りしと雖も、未だ白絛の赤絛に勝るに至らざるを恥づと、鶴台大に其篤志を賞せりと云ふ。(名女傳)

十四、安部川の磧(カハツ)に一大釜あり、何人の造る所なるかを知らず、蓋し古湯鑊の刑に供へしものならん、照公(家康)命じて之を濱松に致さしむ、役人數十人運搬するに許邪(木遣の聲をかけること)して行く、本多作左(本多重次)これに途に遇ふ、問ふ、是れ何物ぞと、役人曰く、人を煮るの釜なりと、作左怒り、就ち命じて其釜を推破せしむ、頃刻にして盡く碎く、因りて其宰に謂て曰く、疾く往きて主公に告げよ、天下に志ある者刑措を是れ望む焉、此不仁の器を用ひん、臣重次謹んで之れを碎けりと、公之を聞き、慚ぢ、悔いて曰く、吾が過なりと、作左を召して之れを陳謝す。

(近古史談)



### 第十五課 智徳の進歩

目的 人間進歩の意義及び方法を説き、以て將來の向上發展を圖らしむることを主眼とす。

#### 要項

- 一、進歩の意義及び必要を述べよ。
- 二、人間の進歩は智徳の發達を以て基礎となすことを説く。
- 三、進歩の方法を示し、先づ智の進歩を圖らんとせば、日々勉強して、其の得る所の知識を蓄積すると同時に、よく之を應用して活ける智識を養ふべきことを説く。
- 四、徳の進歩も善行を學びて常によく之を實行し、又一度實行したることは之を反復して良習となし、以て徳を積むべきことを諭す。
- 五、小成に安んじ、小善に満足することは進歩の敵なれば、努めて之を避け、以て將來の大成を期圖すべきことを教へ、併せて智徳の進歩に際限なきことを述べよ。

て奮發心を喚起せしめんとす。

#### 参考

- 一、中庸に曰く、君子之道辟如行遠必自邇、辟如登高必自卑。(第十五章)
- 二、老子曰、合抱之木、生於毫末、九層之臺、起於累土、千里之行、始於足下。
- 三、諺に曰く、棒程願つて針程叶ふ。
- 四、曾子曰、慎終追遠、民德歸厚矣。(論語、學而)
- 五、列子に曰く、勝非其難者也、持之其難者也。(說符)
- 六、荀子曰、不聞不若聞之、聞之不若見之、見之不若知之、知之不若行之。(儒効)
- 七、說苑に曰く、不強不遠、不勞無功。(雜言)
- 八、中庸に曰く、君子之道闇然日章、小人之徳、的然日亡。
- 九、左傳に曰く、君子有遠慮、小人從邇。
- 十、孔子曰、君子憂道不憂貧。(論語、衛靈)
- 十一、孔子曰、君子病無能焉、不病人之不已知。(全上)
- 十二、西諺に曰く、始惡ければ終惡し。



A bad beginning makes a bad ending.

十三、諺に曰く、千丈の堤も蟻の穴より潰ゆ。

十四、西諺に曰く、何時でも出来ると思ふことは竟に出来ず。

Any time is no time.

十五、西諺に曰く、始めたるは半ば得たるなり。

Begonnen ist halb bewonnen.

十六、西諺に曰く、経験は最良の教師なり。

Erfahrung ist die beste Lehrmeister.

十七、徳川家康曰く、入の一生は重荷を負うて遠き道を往くが如し、急ぐべからず。

十八、西諺に曰く、緩りとそして確りと。 Langsam und gut

### 第十六課 吉田松陰の修養

目的 松陰の人物並に其の修養の跡を示して學生の智徳練磨に資せしむることを主眼とす。

### 要項

- 一、松陰の人物は忠君愛國の結晶にして日本國民の典型たる所以を述べ。
- 二、彼が修學に専心なりしことを示す。
- 三、彼が讀書と交友とに由りて修養せしことを述べ。
- 四、彼の誠心と力行との跡を示す。
- 五、彼の生活の質素なりしことを述べ。
- 六、彼が忠孝の念極めて厚かりことを示す。

### 注意

- 一、松陰に就ては、其の孝悌の心の篤き、忠君愛國の情の盛なる、勤勉力行、素朴篤實にして又心胸正大にしてよく天下の善士を我が師友として尙び以て自己の人格を修養せし所、實に日本青年の師表なり。明治維新の大業の背後には彼の人格の力ありて大なる影響を與へたるなり。
- 二、松陰に關する重要な参考書次の如し。

吉田松陰(徳富猪一郎)



松陰先生遺著(吉田庫三)

吉田松陰傳(野口勝一、富岡政信)

國民道德叢書(有馬祐政、黒川真道)

日本陽明學派の哲學(井上哲次郎)

武士道叢書(有馬祐政、井上哲次郎)

### 第十七課 朋友

目的 朋友の選擇及び交友の道を説き、以て一面には邪路に陥ることを防止し、他方に於ては人格の修養を裨補し併せて學生生活の幸福を計らしむることを主眼とす。

#### 要目

- 一、朋友は交るに先ちて選擇すべきものなることを述ぶ。
- 二、選擇上の心得として交る前に人物の善惡を辨別すべきことを説く。
- 三、交友の道として第一に信義を説く。

- 四、交友は正道の上に立たざるべからざる所以を述ぶ。
- 五、智徳の修養に努力する所の勉強家、誠ある者にあらずんば眞の朋友と云ふべからず、故にかゝる眞友を得んと努むると同時に自らも人の眞友たるべく智治の修養に勵精すべきことを説く。

#### 参考

- 一、凡そ人と交るに云々、貝原益軒大和俗訓應接。
- 二、孔子曰、益者三友、損者三友、友直、友諒、友多聞、益、友便辟、友善柔、友便佞、損、(論語季子第十六)
- 三、藤森大雅曰、水深而魚聚、樹茂而鳥來、君子求友之道亦在修徳、於己耳、徳修於己、則良友自至。

- 四、松陰曰、成徳達材、師恩友益、居多焉、故君子慎交遊、(五規七則の一)
- 五、富貴貧賤の變化ある終始一の如く信義を失はざるは朋友の道なり、(玉川道話)
- 六、諺に曰く、朱に交はれば赤くなる。
- 七、諺に曰く、水は方圓の器に隨ひ、人は善惡の友による。



八、西哲曰く、若し狼と共に生活せば、汝は唯吼ゆることを知るに至るべし。

*Live with wolves, and you will learn to howl.*

九、西哲曰く、善良なる友と交れば、汝も亦其の數に入るべし。

*Keep good company and you shall be of the number.*

十、ソロモン曰く、智者と共に歩めば智慧を得、愚者の友となれば身を滅すべし。

ソロモン箴言) *He that walketh with wisemen shall be wise : but a companion of fools shall be destroyed.*

十一、スマイルズ曰く、善良にして發達しつゝある性質の者と交れば吾人は常に最良の滋養物を其處に獲得するを得べきも、若し不良なる人と交ることあれば其の結果は唯害悪を受けんのみ。(品性論) *Smiles : In companionship with the good, growing natures will always find their best nourishment ; with companionship with the bad will only be fruitful in mischief (Character).*

十二、齊の管仲少時常に鮑叔と遊ぶ。鮑叔其賢なることを知れり。管仲貧困にして鮑叔終に善く之を遇す。既にして鮑叔は齊の公子小白に事へ、管仲は公子

糾に事ふ。小白立て公子糾死し、管仲囚はる。鮑叔管仲を桓公に薦む。桓公は小白なり。管公既に用ひられ、桓公以て覇たり。諸侯を九合し、天下を一匡せしは管仲の謀なり。管仲曰く、吾れ始め困せし時嘗て鮑叔と賈し、財利を分ちて多く自ら與ふ。鮑叔我を以て貪れりとせず。我が貧しき事を知ればなり。吾れ嘗て鮑叔が爲に事を謀りて更に窮困せり。鮑叔我を以て愚なりとせず。時に利不利ある事を知ればなり。吾れ嘗て三たび事へて三たび追はる。鮑叔我を以て不肖なりとせず。我が時に遇はざる事を知ればなり。吾れ嘗て三たび戦ふて三たび破れたり。鮑叔我を以て怯しとせず、我れに老母ある事を知ればなり。公子糾破れて召急之れに死す。吾れ幽囚せられて辱を受けたり。鮑叔我を以て恥無しとせず。我が小節に恥ぢずして功名の天下に顯れざることを恥づるを知ればなり。我を生む者は父母、我を知る者は鮑子なり。鮑叔既に管仲を薦め、身を以て之に下る。子孫世々齊に祿せられて封邑を有つ者十餘世、常に名大夫と爲る。天下管仲の賢を多とせずして鮑叔の能く人を知る事を多とす。(幼學綱要)



### 第十八課 親の恩

目的 親の恩の洪大なることを感得せしめ以て孝心を喚起するを主眼とす。

要項

- 一、學生の今日ある所以は主として親の恩によることを述べ。
- 二、子を思ふ親の慈悲の洪大無邊なることを説く。
- 三、家庭の幸福を享受し得るは偏に親の情けに由ることを示す。
- 四、子を思ふ心には休みなく、かくて親は身の老を忘るゝことを述べ。
- 五、知恩は修徳の始なれば、學生たる者は先づ親恩の洪大なるを知りて之に報ゆる道を講ずべきことを諭す。

参考

一、釋迦曰く、世間出世間の恩に四種あり、一には父母の恩、二には衆生の恩、三には國王の恩、四には三寶(佛法僧)の恩なり。是の四恩は一切衆生平等に荷負へり。

(心地觀經)

二、益軒曰く、人に四恩あり。天地の恩、父母の恩、主君の恩、聖人の恩、此の四恩忘るべからず。(大和俗訓、躬行上)。

三、益軒曰く、父母の親極りなきこと天地にひとし。父母なくんば何ぞ我あらん其の恩海よりもふかく、山より高し。海山は限あり、父母のめぐみはかぎりなし。いかにしてか其の恩を報いんや。たゞ孝を行ひて、其の恩の萬一を報ずべし。父母につかへて其の力をつくしてをしむべからず。(前同上)

四、孔子曰、父母唯其疾之憂。(論語、爲政)

五、紀貫之の歌に曰く、世の中に恩あれども子をこふる思にまさる恩なきかな。

注意 本課に於ては孝を説くよりも寧ろ親の恩を切實に感得せしめ、之に報ゆるを得ざらしむることを眼目とせるを以て、幼年時代、學修時代に於て父母かその子の爲に心身を勞することの大なることを實例を挙げ、心情に訴へて教授するを要す。

### 第十九課 大御心



目的 先帝陛下が教育の勅語を下し賜ひ、又 今上陛下が先帝の御遺業を紹ぎ給ひ以て國民の開發に努めさせ給へる大御心の忝き所以を示し、奮發勉勵以て聖旨に副ひ奉らんとする覺悟を喚起せしむることを主眼とす。

要項

- 一、教育が個人の賢愚、國家の盛衰の由つて分るゝ根本の原因なることを述べ。
- 二、維新前には教育は國民の一部にのみ限られたることを示す。
- 三、明治天皇夙に文教に大御心を注がせ給ひ、こゝに初めて教育の普及を見るに至りしことを述べ。
- 四、明治天皇は尙勅語を下して國民教育の大本を示し給ひ、皇祖皇宗の遺訓を臣民と俱に服膺すべき旨仰せ給ひしことを述べ。
- 五、今上天皇陛下も亦先帝の御遺徳に則らん事に努めさせ給ひ、聖恩極りなし故に臣民たるものは能く智徳を磨きて聖旨に副ひ奉らんことを期せざるべからざることを諭す。

参考

一、五箇條の御誓文

- 一、廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ。
- 一、上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ。
- 一、官武一途庶民ニ至ルマテ各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメン事ヲ要ス。
- 一、舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ。
- 一、知識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ。
- 二、學制、明治五年の學制は全編通じて百九章とす。全國を八大學區に分ち、每區に大學校一箇所を設け、一大學區を二十三中學區に分ち、區毎に中學校一箇所を設け、其數二百五十六校とし、又一學區を二百十小區に分ち、每區に小學校一箇所を設け、其數六千七百二十校とす。即ち全國を通じて五萬三千七百六十校にして、人口約六百に對し小學校一校の割合なりとす。小學校の種類は之を分ちて尋常小學、女兒小學、村落小學、貧人小學、又仁惠學校といふ、小學私塾及び幼稚小學の六種とし、又受業學校、通辯學校、農業學校、諸民學校、夜學校、及癡人學



校等を中學校の種類と定め、別に師範學校は小學教師を養成する所とせり。我國に於ける普通教育の基礎は之に依りて定まりしなり。

三、教育勅語。教育に關する勅語は萬古不磨の大典にして、國民道德の根本たり。此の勅語は全體を三段として其の御趣意をうかひ奉るを得べし。先づ第一段には教育の大本を御示し遊ばされたり。世界の國皆其の國體ありて各國の教育は皆其の國體に基かざるはなし。我國は萬世一系の皇室を戴き、臣民忠孝の念に厚し。是れ世界に比類なき國體にして此の國體は即ち我が教育の大本なり。第二段は教育の淵源より分れ出でたる國民の實行すべき修身の要道を示し給へり。我等日常百般の行爲は皆此の大本より生ずること譬へば生物が其の恩恵を日光に仰ぐが如し。第三段は國體の精華に基ける修身の要道が神聖なる皇祖皇宗の御遺訓にして陛下の御子孫も我等臣民も共に之を守らんことを望ませ給ひ、最後に陛下御自らも之を守らんと仰せられ以て此の勅語を結び給へるなり。

注意

- 一、本課を説きたる後勅語に就て一般の説明を興へられんことを希望す。
- 二、維新前の教育に就ては本卷第一課參照。

第二十課 國旗

目的 我が國旗が我が國體國風を表徴せることを説き以て國體の尊嚴なる所以を覺らしめ、此の國旗を仰ぐ我等國民は能く國體を擁護して國威を宣揚せざるべからざることを諭すを以て主眼とす。

要項

- 一、日章旗の由來を説きて其の偶然にあらざる所以を示す。
- 二、日章が我が國體の象徴なることを述ぶ。
- 三、日章旗が列聖の明德を象れることを説く。
- 四、日章旗が國威の隆盛を表示せることを述ぶ。
- 五、國旗は國家の徽章として尊嚴なることを示し併せて國旗掲揚の心得を與ふ。
- 六、乃木大將の例話に依り國旗の尊嚴なる所以を悟らしめ、併せて愛國の精神を



鼓舞せんとす。

七、日章旗の下に生を享くる國民の幸福と其の覺悟とを示す。

参考

一、國旗の由來。我が國にては國號肇國の天祖、皇統等何れも天日に關係ある語に依つて表示せらる。其故に古來皇室に於かせられては勿論、武家の間にありても旗指物等に日章を用ひし例枚舉に違あらず。而して日章旗が國旗として制定せられし年月は不明なれど、幕末に外國との交渉起りたる頃より明治初年に至る間なり。或は安政年間島津齋彬の建策に基くといひ、或は萬延元年亞米利加に遣はされし使節が日章旗を携帯せるに始まるいひ、或は明治三年正月二十二日大政官布告第五十七號に由るといひ、或は明治十年十月三日同第六百五十一號に由るといひ、或は明治五年三月二十八日大政官達を以て開港場縣廳には常に國旗を掲げしめたるに由ると云ひ、或は同年十一月二十八日の大政官指令に由ると云ふ。

二、國旗と國權。國旗は國權を代表するものなるを以て、海外にありて國家を代

表せる大公使館、領事館にては常に之を掲揚し、又軍艦及び船舶は之を掲げて國籍を表示す。斯くて大公使館、領事館の構内及び軍艦々側の水雷防禦網以内は、何れの國、何れの海面にありともその國家の領土、領海と見なし、如何なる權利を以てするも之を侵すを得ず。而して之を侵すは則ち國權の侵害たり。故に國旗の凌辱は國權の侵害となるものなれば、世界各國互に戒むる所なりとす。故に吾人は我が國旗の尊嚴を維持すると共に他の國旗を尊重せざるべからず。

三、國旗掲揚の心得。大祭祝日並に大禮、大喪及び國葬等の際には臣民として祝意、或は哀悼の意を表する爲に之を軒頭に掲揚し、一家の私事に當りて濫りに使用すべからず。

注意 本課を講ずるに當りては國體の維持及び國威の宣揚に就て特に力説するを要す。



第一課 立志

目的 確乎たる決心を以て學問修養に勵精せんが爲には其の志す所を明かにせざるべからず。故に茲に立志の必要及び其の意義を説き以て學生の決心を固め深く覺悟する所あらしめんとす。

要項

- 一、立志は成業の半ばなる所以を述べ、其の必要を説く。
- 二、上は聖賢より下は匹夫に至るまで皆志あり、故に學生たるものは確乎たる志望なかるべからず、志望が奮發心を喚起する力大なるものあることを説きて其の効果を明にす。
- 三、立志の意義を述べ、學生たる者は業務に關する志望の外に眞の人間たらんとする志なかるべからざる所以を説く。
- 四、苟も學に志したる者は先づ仁義忠孝の道に志し、之に副ふるに業務の志望を

以てすべき旨を教ふ。

参考

- 一、孔子曰、吾十有五而志于學、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲、不踰矩。(論語爲政)
- 二、語に曰く、大人之學爲道也、小人之學爲利也。(法官學行)
- 三、語に曰く、有志者事竟成。(後漢書)
- 四、孟子曰、君子之志於道也、不成章不達。(孟子盡心上)
- 五、語に曰く、志者學之師也、才者學之徒也。(中論治學)
- 六、孔子曰、少而不學、長無能也。(家語三恕)
- 七、語に曰く、性雖善、待教而成。(中鑑雜言)
- 八、白隱曰く、大丈夫學ばずんば則ち已む、若し一日も學ぶとならば、高を窮め深を探つて、誓つて大道の源底を徹し、人欲の私を盡し、人に過ぎたるの智見を具して、よく人を教へ、衆に超えたる識量ありて、よく衆を導くべし。
- 九、吉田松陰曰く、凡生爲人、宜知人所以異於禽獸、蓋人有五倫、而君子父子爲最大、故人



之所以爲人忠孝爲本。(士規七則)

十、佐藤一齊曰、諸友學問に心掛られ候趣意は、第一倫理を辨へ、君子に成べきためにて候、こゝに志なき輩は、假令萬卷の書を讀破候ても、學問心掛候とは、申がたく候、曲藝小枝に至るまで、志なくして成就する事あたはず候、況て倫理大學問ウカト出來候義、決て無之候、此志さへ立候へば、書籍讀み候事も、此志の内にこれあり候。誠に入學第一の義にて、かりそめに思はれ間敷候事。

十一、本居宣長は伊勢松阪の人なり、少より京都に往きて漢學醫術を學びけるに、明敏強記なりければ、常に衆人の見る所と異りけり。或日同學の友と會せし時、宣長これに誓ひけるは、我學を以て天下に冠たらずば、再び諸君と相じとて郷に歸り、醫を營む、傍漢學を修め、その間に歌書を讀み、加茂眞淵の著はせる冠詞考を讀みけるに、初の裡は疑はしき節多かりしが、反復するに従ひ、漸く疑念氷解し、學問の正宗こゝにありとなし、深く感じて國學を講究せんとの志を起し、其より眞淵の門人となり、伊勢より江戸なる眞淵の許に絶えず使を派して質疑し、教を乞ひ、日夜怠なく、萬葉集を始め、その他有らゆる古書を讀みて、深く

我邦の古學に通じ、殊に難解なる古事記を研究して、古事記傳五十卷を著はし、先人未發の見解を立て、その他種々の書を著はし、和歌文章に於ても遙に群を抜く所あり、我が國學に裨益する所頗る大なりとす。

十二、中江藤樹字は惟命、通稱與右衛門、藤樹は其の號なり。慶長十三年近江國小川村に生る。祖父吉長は米子の加藤侯に仕へ、父吉次は小川村に農を營めり。藤樹幼にして穎敏なりしかば、祖父請ひて己が嗣となさんとし、伯耆に伴ひて學を授く。幾くもなく加藤侯伊豫大洲に轉封し、祖父は風早郡の宰となる。藤樹從ひて先づ大洲に往き、次いで風早郡にいたり、初て師に就いて學ぶ。十一歳の時大學を讀み、自天子以至於庶人、壹是皆以修身爲本と云ふに至りて歎じて曰く、幸哉此經之存、聖人豈不可學而至焉乎と。茲に發憤して勇猛の心を起し、人と生れて聖人たらずんば、生きて世に益なく、時に功なしと悟り、この時より聖人たらんとの大志を立てたり。又一日食する時、熟く思へらく、此是誰所賜也、一則父母、二則祖父、三則君、三者之恩、不可以須臾忘と。十三歳の時、祖父に從ひて大洲に還り、後一年を経て祖母を失ひ、二年を経て祖父を失へり。寛



永元年、藤樹十七歳の時、京都の僧大洲に來り、論語を講ぜしも、時世未だ學問を尙ばず、聽聞するもの殆んどなかりしに、藤樹獨り日夕其の講筵に侍して熱心に聽けり。彼が聖學の大綱を識得せしは實に此の時にありき。斯くて聖人を希ふの志は益々固きを加へぬ。然るに僧は居ること月餘にして去りしが、なんとかして經書の全體を窺ひ知らんと志益々堅く、乃ち苦心して四書大全を求めたり。されど深く物議を恐れ、晝は諸士と武を講び、夜竊に書を読み須臾も怠ることなく、深く道德の眞源に心を潜め、其の志す所に向つて邁進せり。然るに翌年正月父吉次を失ふ。時に藤樹十八歳。父の訃を得て慟哭すること甚しく、歸りて之を葬らんとせしが、故ありて果さず。爾後二十七歳に至るまで大洲に留り、益々學業を勵み、彌々徳行を修めたり。即ち聖人の遺經を讀んで聖人の行を知り、知りては必ず之を行ふ。知る所は直に之を行ひ、行ひ能はざるあらば、更に近思して其の故を究め、其の故を知らば亦信じて之を行へり。斯くて一を知れば一を行ひ、二を知て二を行ひ、十を知り百を知らば十を行ひ、百を行ひ、かくて聖人の大意を悟得せしは既に二十歳前後の事なり

き。其の間母を江西に省ること二回、孝養を盡さんとする念強ければ母を伴ひて大洲に還らんとすれども母はこれを肯ぜず、然るに母益々老いて獨り江西に住し、左右に侍する子孫なし。孝心深き藤樹は之を忍ぶ能はず、偶々癸酉元旦、臯魚傳を讀み、樹欲靜而風不止、子欲養而親不待といふに至り、母を思ひて止まらず一詩を賦して曰く、羈旅逢春遠耐哀、緡蠻黃鳥止斯梅、樹欲靜兮風不止、來者可追歸去來と。屢々致仕を請ひたれども許されず、蓋し侯藤樹の人と爲りを重んじ、且他藩に聘せられんことを慮りてなり、遂に書を執政に上りて苦請し、誓ふに二君に仕へざるを以てす、報ぜられずして三月書を上り、官を棄て、小川村に歸り去る時、其の年の俸米を倉に藏めて封鎖し、以て是歳の俸給をかへす。時に寛永十一年、二十七歳。母に事へて孝養を盡し、且力を學業に致せり。商を以て生計をなし、旁子弟を集めて學を講ず。遠近より來り學ぶ者日々多し。深く孝經を尊信し、毎朝之を拜誦し、翁問答を著してその感想を録せり。三十三歳の時、王龍溪語録を得て初めて陽明學を窺ひ、三十七歳、王陽明全書を購求して之を讀み、釋然として悟る所あり。されど彼の未だ陽明を知ら



ざりし頃より夙に知行合一の理を信じ、二十一歳の時著せる「大學啓蒙」には既に陽明と同一の見識を立て、知行合一、良知良能の理を自得せるなり。今陽明を知るやその全く自家の見と符合するを悟り、茲に陽明の學を祖述するに至りぬ。斯くて學益々進み、遂に聖人の心を以て心とし、聖人の行を行とし、知行合一して其の間毫末の間隙なきを得たり、屢々諸侯の招聘にあふも悉く病を以て之を辭し、專心一意教育と著述とに従事せり。其の至孝篤實、遠く薰化を及ぼし、風俗彌々醇厚となる。慶安元年八月十五日享年四十一にして歿す。其の卒するや、隣里卿黨皆涕泣して柩を送り、其の狀親を喪するが如し。後村民其の家を修めて祠堂となし、徳本堂と云へり、現に高島郡青柳村字上小川なる所謂藤樹書院にして今に至るも祭祀を絶たず。

### 第一課 勇猛心

目的 前課を受けて、身を立て道を行ひ以て、眞個の人たらんとするの志を貫かんとせば必ずや大勇猛心なかるべからず。故に茲に勇猛心の必要及び其の養成

を説きて志望の到達を期せしめんとす。

#### 要項

- 一、今日の社會の進歩と競争とは志望の到達を益々困難ならしむることを述べ、
- 二、故に如何なる難苦をも意とせざる大勇猛心なくんば志を貫くこと能はず、古來偉人傑士は何れもこの心を以て自己を鞭撻して志す所に邁進せることを述べ、
- 三、頼山陽少時の決心に依りて勇猛心を例解す、
- 四、志高遠なれば艱苦亦大なることを説く、
- 五、斯くの如く勇猛心は目的を達する原動力なり。故にこれが養成に努めざるべからず。之を養成するには第一に、一度決心せしことは必ず遂行する習慣を養ふべし。第二に身體を鍛鍊して元氣を養ふべし。第三に偉人傑士の心を學ぶべし。第四に眞個の男兒たらずんば止まざる決心を固め且之に背かざることを誓ふべし。

#### 参考



一、管子曰、思之、思之、不得、鬼神教之、非鬼神之力也、其精氣之極也。(心術下)

二、朱子曰、陽氣發處、金石亦透、精神一到、何事不成。

三、諺に曰く、彼も人なり、我も人なり。

四、西諺に曰く、アレキサンダーも一度は啼く兒なりき。

Alexander himself was once a crying babe.

五、西諺に曰く、賢者は運命に支配せらるゝことなし。

A wise man is out of the reach of fortune.

六、西諺に曰く、生あらん限りは學べ。 Live and learn.

七、アレキサンダー曰く、勇者を破るものなく、剛者を沮むものなし。 Nothing is in

vincible to the brave nor impregnable to the bold.

八、小野道風は醍醐、朱雀村上の三朝に歴事し、官正四位下内藏權頭に昇り、又書を能くし、藤原佐理、藤原行成と並びて三蹟と稱せられたり。かく道風が能書家として名聲を後世までも遺すに至りしは、決して天才の然らしむる所にあらずして、努力の結果なり。或る年春雨の日所用ありて外出して歸るさ、池畔に

さしかゝりしに、一疋の蛙が水面を離るゝ、三尺の柳の枝に飛び附かんとして幾度か失敗し、然も届するともなく、落ちては又飛び附かんとするを見て、道風始めの程は、さても心なきものよと嘲笑しけるが、尙も眺むる間に、驚くべし、やがて蛙は遂に柳枝の一端に飛びつきてその目的を達したり。之を見て道風膝を打ち無心の蛙すらかくの如く、努力の結果その志を達し得たり。まして人間たるもの精神一たび到らば何事か成らざらんと、これより一意専心、書道に勉勵し遂にその道の達人たるを得たり。然もこの時彼は四十二歳に及びたりと云ふ。

九、渡邊華山は三河の國田原の藩士定通の子なり。幼より召されて江戸藩邸に於て主侯に仕へしが、祿少きが上に父定通二十年來の痼疾にて困窮云はん方なし。華山十一歳の折所用ありて日本橋通を通行せしに、過ちて備前侯の先供に衝き當り、從者の爲に打たれ、忍ぶべからざる屈辱を被りぬ。此の時備前侯を見るに己れと同年と覺しき幼君なりき。華山發奮し、同じく人と生れながら侯の權勢に比して我が今受けたる屈辱を如何せん。かくて感慨の情止



み難く遂に意を決して儒者たらんとし、役目と看病の傍ら、母を助けて竈の下に火を焼きながら、その明りに書を読みたりき。然るに貧苦益々甚しく、弟妹離散し、具に辛酸を嘗むるにつけ、華山の志操益々堅く、彌々學業に勵みぬ。然るに彼幼より繪を能くし、天稟の妙は大人も舌を捲く程なりき。されば繪を以て立つべしと切り、忠告する者ありしかば、兎に角家計を助けん術にもとて、畫家白川其山の門に入りぬ。時に文化五年、華山十六歳の折なりき。然るに貧にして、束修饒かならざりかば、其山辭を設けて、教授を謝絶せしかば、華山は落膽して殆んど食を絶つばかりなりしが、漸くにして金子金陵の門に入るを得たり。其間に谷文晁の許を訪れて、屢々指導を仰げり。かくて其の技頓に上達したり。尙畫は學に依て之を助けずんば成る所の畫は死畫のみと感じ、二十二歳にして佐藤一齋の門に入り、研究する所あり。かくの如く艱苦究厄の中に切磋琢磨些も倦み怠ることなかりしかば、畫に於ても學に於てもその進境の著しき到底他の企て及ぶ所にあらざりき。

安政二年初めて洋畫を見て大に發明する所あり、その畫風に一變化を見るに

至れり。遂に畫名一代に高く、延いて遠く後世に誦はるゝに至りしなり。加之忠孝の心篤く、博愛の精神深かりしかば、藩中の民彼を畏敬すること神の如くなりき。然るに彼が我が國文化の爲め心を海外に馳するや、遂に幕府の忌む所となり、累を藩侯親族に及ぼさんことを憂ひ、自ら責を負うて自害す。時に天保十二年十月一日、享年四十九歳。明治二十四年朝廷その志を認め給ひ正四位を贈らる。

九、頼山陽名は襄字は子成、通稱は久太郎、山陽はその號なり。又三十六峯外史と號す。父は頼春水と云ひ、安永元年大阪に生る。天明元年春水が藩主淺野侯の招に應じて藩學の教授となる。山陽また之に従うて廣島に赴き、勉學こゝに年あり。寛政九年江戸に赴き、尾藤二州の門に入り、又昌平黌に學ぶ。十年廣島に歸る。十二年意平かならざることあり、家を脱して京都に走れり。父大に怒り之を召歸して幽し、次いで廢嫡す。享和二年幽室にありて日本外史の稿を起す。三年五月幽居を許さる。文化六年菅茶山の請に應じて、備後神邊に赴き、其の家塾を督したりしが、八年閏二月塾を辭して京都に上り、家塾を



立て、業を授く。門に入る者漸く多し。文政九年日本外史の刪修成り明年之を松平樂翁に献ず。十二年樂翁爲に題言を賜ふ。天保元年日本政記の稿を起し、未だ脱せずして疾に罹り、三年九月二十三日歿す。年五十三。東郡栗山長樂寺に葬る。明治二十四年正四位を贈らる。著書の主なるものは日本外史、日本政記、通議、山陽文集、山陽詩鈔、日本樂府等あり。彼の忍耐勤勉にして精力絶倫なりしことは日本外史の著述に二十年の苦心を須ひし一事によるも明かなり。

### 第三課 心中の賊

目的 正善の志を遂げんが爲には先づ邪惡の心を絶たざるべからず。實に邪惡なる心は志を挫き身を滅す基なれば、こゝに其の恐るべき所以を説き、之を却くる道を教へ以つて正善の途に就かしむるを目的とす。

#### 要項

一、人間の情慾には正善に導くものと邪惡に陥らしむるものあり、後者を心中の

賊と云ふ。

- 二、心中の賊たる邪惡の心を例解し、尙人を正善に導く心さへその方向を誤らば等しく心中の賊となることを示す。
- 三、邪惡なる情慾の増長の速かなることを説き、その恐るべき所以を示す。
- 四、心中の賊の破り難きことを教へ。
- 五、その平定法として、小惡の戒しむべきことを述べ、決斷と忍耐とを以てよく克己自制して之を防止すべきことを説く。
- 六、人の心は善魂の宿る所なれば、よく之を喚起し、偉大なる決斷と忍耐とを以てこれが平定に向はゞ、根絶難きあらざることを説きて學生の決心を促す。

#### 参考

- 一、王陽明曰、破山中賊易、破心中賊難。(傳習錄)
- 二、孔子曰、克己復禮爲仁。(論語顔淵)
- 三、古語に曰く、知己曰明、自勝曰強。
- 四、中庸に曰く、君子戒慎乎其所不睹、恐懼乎其所不聞。



- 五、孔子曰、見賢思齊焉、見不賢而內自省也。(論語、里仁)
- 六、唯南子に曰く、事之成敗、必由小生。
- 七、西諺に曰く、忍耐は運命を左右す。 To bear is to conquer our fate.
- 八、西諺に曰く、最大の敵は我が内にあり。 We carry our greatest enemies within us.
- 九、西諺に曰く、強者ならんと欲せば先づ己に克つ。 Would you be strong, conquer you rself.
- 十、ブラトロン曰く、己に克つを以て最大の勝利となす。 Self-conquest is the greatest of victories.
- 十一、御光明天皇の御賢明なる、よく親らを戒め給ふ、御性嘗て雷鳴を恐れたまひしも、論語を読み、克己復禮の章に至り、御感甚だ深く、一日雷雨轟然たるの日玉座を簷下に設け危座し、雷鳴やむまで内に入らせたまはず、是より後全く雷鳴を忌ませ給ふ事なかりき。(高橋龍雄著、歷朝聖訓)

### 第四課 節制

目的 動もすれば極端に走らんとするは年少者の通弊なり。故にこゝに節制中庸の道を教へ、萬事に程を守ることの大切なる所以を悟らしめ、以て修養に資せしめんとす。

#### 要項

- 一、江村專齋の例によりて節制即ち慾を程よく制することの効果を悟らしむ。
- 二、節制と健康との關係を説く。
- 三、極端と中庸との比較によりて中庸即ち節制の意義を明かにす。
- 四、節制中庸は健康のみならず、萬事に亘りて必要な所以を例解し、運動、勉強、品行、その他何事につけてもよく程を守りて、その目的を達するに遺憾なからしめんことを期す。

#### 参考

- 一、江村專齋名は宗具、京都の儒者にして、肥後守加藤清正に仕ふ、寛文四年九月没す、時に年一百歳。少壯よりよく節制を守り、老ゆるも視聽衰はず、壯年の如くなりと云ふ。



二、アイザック・ニュートンは一六四二年に生れ一七二七年没す。英國著名の理學者にして今日の物理、天文學は彼に負く所甚大なり。體軀常體にして少しく肥潤、眼光炯々として其活潑の氣、寛裕の風自ら面貌に溢る、高齢に及びても眼眸猶瞻ま、鶴髮雪の如し、平生夙に起き、時間を定めて研究に従事し、加ふるに飲食の度を節せり、故に瞬時と雖も閑過することなく、研鑽に努めしかど老年に及びても精神衰耗せず、體格亦堅剛なるを得たりと云ふ。

三、フランクリンのことは第三卷第六課の參考欄に掲ぐ。

四、子程子曰、不偏之謂中、不易之謂庸、中者天下之正道、庸者天下之定理。

(中庸、朱子章句本)

五、孔子曰、中庸之爲德也、其至矣乎、民鮮久矣。(論語、雍也)

六、パウエルゼ子曰く、節制即ち感覺的快樂の誘惑に抵抗する能力は、徳に入る第一歩なり、爾餘の動物の本質は盲目なる衝動にして、之が充足は生活の内容をなす。人類も亦動物的本質を享けて斯世に出づ。而かも此本質は動物的なるに止らずして、高尚なる精神的生活の素地たるものなり。此素地の準備は自

然的衝動の修練に成る。不節制に至つては事全く顛倒し、爲めに吾人は單に動物の状態に退歩するに止らずして、高等なる賦性能力が感覺的顯望に屈從するに至るものなり。(倫理學大系六〇六頁)

七、パウエルゼン曰く、節制は他の徳の如く、修練に由りて養はるゝものにして之が基礎は善良なる教育に由りて据えらる。過度の欲望の發生を防ぐ良法は適度に自然的需要を充足するにあり。(倫理學大系六〇七頁)

注意 儒教にては孔子先づ中庸の至徳なることを説き、子思は之を以て根本思想となせり。ギリシア時代には節制を以て四大徳の一に數へ、特にアリストテレスは之を力説し、中庸を以て徳の根本義となし、正善の道は中庸を得たる所にあることを教へたり。教授の際は、この道が古今東西の聖賢の齊しく訓へたる所なることを説明せられんことを望む。

## 第五課 心身の鍛鍊

目的 節制中庸は心身の健全を圖る要道なり。されど眞に強健なる身體と剛健



なる精神とを養成せんが爲には鍛鍊を必要とす。故にこゝに心身鍛鍊の意義を明かにし、其の方法を授けてこれが修練を積ましむるを以て目的とす。

要項

- 一、如何なる艱苦と闘ふともよく之に打克らて己が志を貫かんが爲には心身の鍛鍊を積まざるべからざることを説き鍛鍊の必要を明かにす。
- 二、鍛鍊とは心身の力を利用して内外の障害と闘うて之に打克つ修養なることを示して鍛鍊の意義を明かにす。
- 三、古は鍛鍊の機會多かりしかば、古人はよくこれを利用してその功を積みたることを述べ。
- 四、その一例として江川垣庵の鍛鍊法を示す。
- 五、然るに現時にありては文明の利便に慣れて動もすれば鍛鍊の道を閑却せんとす。されど激甚なる現代社會の競争に打克ちて目的を達せんが爲には大に鍛鍊を積まざるべからず。又之を積まんとする志だにあらば、今日と雖もその機會隨處にあることを示し、平素よく機會を捉へてこれが修養を圖るべ

き旨を論ず。

参考

- 一、孟子曰、生於憂患、死於安樂、憂患は汨路を教へ、安樂は身を滅すの意。(告子下)
- 二、書經に曰く、必有忍、其乃有濟。(成王)
- 三、後漢書に曰く、窮當益堅、志當益壯。(馬援傳)
- 四、孔子曰、不強不達、不勞無功。(說苑)
- 五、諺に曰く、艱難汝を玉にす。
- 六、熊澤蕃山の歌に曰く、憂きことのなほこの上に積もれかし、限りある身の力ためさん。
- 七、西諺に曰鍵曰く「用ひざれば鑄を生ず」。If I rest, I rust, says the key
- 八、西諺に曰く、困難は最良の教師なり。Difficulties are our best instructors. 不運は良き教師なり。Misfortune is a good teacher. 艱難にまされる教育なし。There is no education like adversity.
- 九、孟子曰、天將降大任是人也、必先苦其心志、勞其筋骨、餓其體膚、空乏其身。



十、スマイルズ曰く、忍苦は人間最高の性を訓練し且發達せしむる天與の方法なり。 Suffering is the appointed means by which the highest nature of man to be disciplined and developed.

## 第六課 自重

目的 品性の向上を圖らんとせば、邪惡に遠ざかることを肝要とす。而して邪惡に遠ざからんが爲には自重せざるべからず。故にこゝに自重が修徳の要道なる所以を教へて學生の自重心を喚起せんとす。

### 要項

- 一、自重とは自己の價値を認識尊重して、よく其の品位を維持するにあることを説く。
- 二、人はその道に努むるが故に貴きにて社會上の貴賤貧富は直ちに人間價値の高下を意味するものにあらざることを説明す。
- 三、故に人は自ら輕んじ或は自己の地位、職業を卑しむべからず。加之自重は又

他より重ぜらるゝ原因となることを説く。

- 四、自重心ある者は世人の毀譽褒貶に由て動かざるゝ事なくして、よく自己を守る。然るに自重心なき者は之に反す。
- 五、眞の自重は義の上に立たざるべからず。義に適せざることを固持するは剛情なり。故に自重は反省、改過を伴はざるべからず。
- 六、要するに人は外物に累はされ、誘惑に乗ぜらるゝことなきを要す。然らずんば己が目的を貫徹すること能はざることを諭す。

### 参考

- 一、韓退之曰、子之特立獨行適於義而已、不顧人之是非。(伯夷頌)
- 二、孟子曰、夫人必自侮、然後人侮之。(離婁上)
- 三、薛敬軒曰、己未善、人譽之、不足喜、己有善、人毀之、不足怒。(西村茂樹輯、儒門精言)
- 四、佐藤一齋曰、石重故不動、根深故不拔、人當知自重。(言志晚錄)
- 五、エマーソン曰く、品性の具はれる人は己が過失を聞かんことを好む。 Men of character like to hear of their faults.



- 六、西諺に曰く、惡業は自身の刑罰なり。 Vice is its own punishment.
- 七、西諺に曰く、自敬せよ、然らずんば人汝を敬せず。 Respect yourself, or no one else will.
- 八、太宰春臺善く笛を吹く、日光王音律を好み、之を聞かんと欲し、人をして之を招かしむ。春臺辭して曰く、臣は道を講ずる者なり。薄伎を奏し、宴樂に供するは、能はざるなり。如心、我を復するものあれば、吾其れ笛を破つて終身亦音を操せずと。

### 第七課 剛毅と剛情

目的 内外の誘惑に抵抗して正善の志を貫からんが爲には剛毅ならざるべからず。故に剛毅は學生に取りて最も肝要なる道の一なり。されど剛毅は一度其の方向を誤れば似而非なる剛情に陥るべし。故にこゝに剛毅の修養を教へ、併せて剛情に陥らざらしめとす。

#### 要項

- 一、剛毅は恐れず、屈せず、萬難を排して志を遂ぐることにて、勇氣と忍耐とを合せ

たる徳にして、男子の本領を發揮する道のこゝに存することを説く。

- 二、剛毅の徳は正邪善惡の別を辨へて初めて現はるゝものなることを示す。
- 三、之に反して正邪善惡の別明かならずして徒に我意を張るは剛情なり。剛毅の人は正善を主眼となすが故に己が道の誤れることを悟らば改過するを得れども、剛情なる者は改悛する能はず。
- 四、青年時代には外觀を飾る情強き故に、剛情の爲に身を誤ること多きものなれば特に之を訓戒す。
- 五、剛毅の心ありて初めて改過し得ることをワシントンの例に由て示し、よくこの心を養ひ以てよく邪惡を斥けて正善の道に就かしめんとす。

#### 参考

- 一、孔子曰、自反而縮、雖千萬人吾往矣。(孟子公孫丑章句上)
- 二、孟子曰、富貴不能淫、貧賤不能移、威武不能屈、此之謂大丈夫。(滕文公章下)
- 三、曾子曰、士不可以不弘毅、任重而道遠、仁以爲己任、不亦重乎、死而後已、不亦遠乎。

(論語泰伯)



四、孔子曰、剛毅木訥、近仁。(論語、子路)

五、孔子曰、過則勿憚改。(論語、學而)

六、子夏曰、小人之過也必文。カヤル(論語、子張)

七、子貢曰、君子之過也、如日月之食焉、過也人皆見之、改也人皆仰之。(論語、子張)

八、西哲曰、剛毅は他の諸徳の護衛にして又支柱なり。

Fortitude is the guard and support of the other virtues.

九、西哲曰、真正の智慧は斷乎たる決心なり。The truest wisdom is a resolute determination.

十、ジョージ・ワシントンは一七三二年米國ヴァージニア州に生る。十九歳の時軍隊に入り、その誠實なる精神と卓越せる才幹とは他の齊しく推服する所となり、累進して將官となり、功多かりしが、遂にバーノン山に歸耕せり。後民衆に推されて議員となり、後獨立戦争の起るや、殖民軍に將として英軍と戦ひ、遂に米國の獨立を遂げ、一七八九年に、共和國初代の大統領に選ばれ、同九三年再選せられ、九七年任期を了へて退き、一七九九年没す。その正義仁愛の徳は遠

く現代までも教化を及ぼせり。

本章に擧げたる事件はヴァージニア州のアレキサンサンドリアにて起りしことなり。

十一、伊藤坦庵は京都の人なり、幼にして學を好み、日夜刻苦して業を勵みければ、長ずるに及び才識漸く進みて、伊藤仁齋等と共に名を齊しくし、京都にて屈指の大家となれり。越前侯松平光通その名を聞き、召して儒官に擧げ、祿八百石を賜はりしに、坦庵は能く禮法を守りて、言笑を慎み、剛直にして上に諂はず、勢に屈せず、知りて言はざるなく、思ひて行はざる所なかりければ、之を妬むものあり、事を構へて坦庵を讒言したり。侯大に怒り、之を一室に幽せしめしに、坦庵は我身に罪過あるにあらねば、仰て天に愧ぢず、俯して人に恥ぢずとて、少しも憂ふる色なく、優游自適して、書を読み文を作るに怠ることなかりしに、三年の後、その罪の無實なること明かになりて、讒したるものは放逐せられ、坦庵は赦されて青天白日の身となれり。然るに坦庵は三年一室中に在りて、世事を省みず、讀書に心を專にするを得たりしは、君恩の然らしむる所にして、謝すべき



の至なりとて、少しむ怨む色なかりきといふ。

十二、維新の元勳岩倉具視は剛毅の人なりき。征韓論盛んに行はれし當時、武勇の聞え高き陸軍の一將校、公の私宅を訪ひ、征韓の必要を論し、公之を反駁して互に激論を闘はせしが、遂にその絶頂に達し、將校は憤怒の眼を輝かして長劔に手をかけつゝ、若し我が意を容れなかつたなら、貴下の生命は無いぞと叫びながら膝と膝とを接するまでに詰め寄せたり。公の家人は隣室より此の唯ならぬ光景を窺ひて、顔色蒼白となり胸ををどらせてゐたりしに、公は更に驚く様子もなく、平然としてその座を守りしと云ふ。

### 第八課 淡泊

目的 剛情の心を矯正して、改過遷善の實を挙げしめ、公明正大にして然もよく人と和せしめんが爲に、こゝに淡泊の徳を説きて其の修養を圖らしめんとす。

#### 要項

一、心朗らかにして小事に拘泥せず、よく諦め、よく忍び、心に蟠りなくして公明正

大なることが淡泊なることを説く。

二、それ故に淡泊の人は度量自ら廣く、よく人を容れて人と和樂の生活を送ることを得、之に反して心執拗なる人は怒を宿め、恨を含むが故に争論を避くる能はず。

三、又淡泊なる人は過を飾り、非を蔽ふが如きことなきを以て、よく人の忠言を容れて反省改過の實を擧ぐることを得て高尚なる品性を養ふに至るべし、然るに淡泊ならざる者は剛情を張り或は虚榮虚飾に陥り、遂に進歩を妨げ、身を滅すに至るべき旨を述べ。

四、豊臣秀吉の例に由りて淡泊の一端を會得せしむ。

五、淡泊は我が武士道の美點なることを説きて益々これを體得せしめんとす。

#### 参考

一、秀吉の話は日本外史に出づ。

二、黄魯直が周濂溪の人物を評したる語に「春陵周茂叔人品甚高、胸中洒落如光風霽月」とあり。



- 三、孔子曰、不遷怒、不貳過。(論語公冶長、孔子が顔淵を稱讚したる語)
- 四、申鑒に曰く、有一言而可常行者、恕也、有一行而可常履者、正也。(政體)
- 五、書經に曰く、有容、德乃大。(君陳)
- 六、左傳に曰く、修己而不責人、則免於難矣。(閔公二年)
- 七、淮南子に曰く、知己者不怨人、知命者不怨天。(繆稱訓)
- 八、榮根譚に曰く、風來疎竹、風過而竹不留聲、雁度寒潭、雁去而潭不留影、故君子事來而心始現、事去而心隨空。
- 九、立花宗茂は秀吉の臣、朝鮮征伐に従ひて功あり、筑後柳川に封ぜらる。曾て細川忠興を我が屋敷に招きて、宗茂自ら恩賜の茶を煎じて馳走しけり。この時忠興は宗茂に向ひ、貴殿は國を治めらるゝに何の苦慮もなしとの事なるが、拙者は苦慮の爲に夜も碌々眠られぬ有様なりと云へり。宗茂答へて曰く、如何にも貴殿の申さるゝ通り、拙者は國を治むるに苦慮したる事なし。そは畢竟拙者には唯一とことだに他人に隠さんとする心なし。妻に語ることも、譜代の者に語ることも、又外様の者に語ることも、更に隠す所なし。而して惡事は

何者に對しても之を斥けしめ、善事は何者に對しても之を賞してかりそめにも黑白の隔てを附けず。爲めに拙者の惡む所は臣下亦之を惡み、拙者の好む所は臣下亦之を好む。かくして一國を一家の如くに辨へて事を計る故に拙者の國に對して亦毫も心を痛むることなしと語りぬ。忠興之を聞きて宗茂の公明に感じたり。されば宗茂の領内治績大に舉り民皆其の徳に服せり。

十、京都所司代板倉周防守重宗公明の聞え高し。或時京の在家を通過せしに、道に遊べる童子之を見て、あれ周防が通るぞと云ひしを、重宗聞きて、我をかく押し下して呼ぶは我に恨みある家の子ならん、子細あるべしとて、その家主を召し寄せて問試みしに、先年の訴訟に、其身理はありながら、相手方の證人の申口を立てられて、負になりぬと云ふ、委しく尋ね調べしに、すこしも偽なかりしかば、重宗自己の過を陳謝し、餘程以前のことなれば、訴訟を改むること能はじとて、自己の金銀を出して之を償ひしといふ。

十一、アムラハムリンカーン (Abraham Lincoln, 1809-1865) は北米合衆國ケンタツキ州に生る。小學校に通學すること僅か九ヶ月にして、父に従ひてインディア



ナ州に移住して開拓に従事し、十歳の時母を失ひ、後よく繼母に仕ふ。この間に自ら所持せる三冊の書籍を反復熟讀し、また人よりワシントン傳を借覽して大に悟る所あり。十七歳の頃合衆國の歴史を讀む。後オツファルトと呼ぶ商人に雇はれ、誠實勤勉を以て大に信用せられ、遂に支店長となれり。後義勇兵隊長、測量師、郵便掛等を経て辯護士となり、遂に國家議員に擧げられ、奴隸使用の人道に反することを論じてその廢止を主張し、一八六〇年選ばれて大統領となるに及び、遂にその廢止を斷行し、こゝに南部諸州の強烈なる反對を受け、遂に南北戦争となりしが、勝利はリンカーンの手に歸しぬ。然るに南方に屬する暴漢リンカーンを劇場に射撃して殺害す、時に一八六五年四月十四日。彼十六歳の時知人よりワシントン傳を借りて仕事の暇に之を愛讀せり。或る夜板圍ひの繼ぎ目の所に置きたるまゝ、寝ねしに夜降雨の爲め、雨繼目より漏れ、件の書を濡せり。リンカーンは償はんにも餘財なく、途方に呉れしが、貸主を訪れて正直にありし様子を包まず語り、深く己れの粗忽を謝し、尙勞力を以て之を償はんことを乞ひたりと云ふ。

### 第九課 眞の恥

目的、廉恥は道を知るの始めにして、又我が武士道の精神なり。されど何を恥づべきかを知りて初めてこの心を養ふことを得べし。故にこゝに廉恥心の貴き所以を説くと共に學生たるものの恥づべきことを教へて、この心を涵養せしめんとす。

#### 要項

- 一、恥を知るを廉恥と云ひ我が武士道に於ては特にこれを重んじたることを述べ。
- 二、恥を知るは道を知るの始めなれば、何人もこの心なかるべからず。
- 三、然らば眞に恥づべきは何ぞ。世には貧困を恥づる者あれども、懶惰にして自ら招けるにあらずんば貧困の恥づるに足らざることを説く。
- 四、容貌の醜き或は體格の小なるも恥づるに足らず。精神だに美しくば他は意とするを要せざる旨を述べ。



五、學問技藝の未熟は怠惰にして自ら招けるにあらずして、年齢少きがために未だ會得せざる所あるは當然にして恥とすべきにあらず、之を蔽ひ隠して修養を怠るこそ恥づべきなり。

六、學生としては學生の本分を忘れて學生らしからざるを以て最大の恥となす。即ち修養努力を怠りながら、虚榮虚飾、執拗、剛情、或は不作法、不規律にして自ら得たりとなし、卑賤の志に甘んずるが如きこそ眞の恥となることを説く。

参考

- 一、佐藤一齋曰、人不可無恥、又不可無悔、知悔則無恥、知恥則無恥。(言志晩録)
- 二、孟子曰、無羞惡心、非人也……羞惡之心、義之端也。(公孫丑上)
- 三、孔子曰、憂道不憂貧。(論語衛靈公)
- 四、孔子曰、不患人之不知己、患其不能。(論語憲問)
- 五、孟子曰、不恥不若人、何若人有。(盡心上)
- 六、鹽鐵論に曰く、卑而言高、能言而不能行、君子恥之焉。(能言)
- 七、室鳩巢の歌に曰く、人知れぬ心に恥ぢよ恥ぢてこそ遂に恥なき身ともなるら

め。

八、西哲曰く、錦繡を纏ひて地獄に墮ちんよりは、寧ろ檻樓を纏うて天國に行け。

Better go to heaven in rags than to hell in embroidery.

九、西諺に曰く、赤面は徳の色なり。Blushing is virtue's colour.

十、伊藤東涯は江戸の人、仁齊の長子にして、一代の碩儒なり、元文元年六十七歳を以て没す。東涯曾て一小囊の路に落ちたるに逢ふ。見て以て藥物となし、從者をして之を舉げしめ、囊を解きて視れば、内に十餘金あり。東涯忽ち鑿感して曰く、此れ當に落したる者を尋ねて之を還すべしと。即ち其地に立ちて以て待つこと良々久し。日將に昏黒ならんとするに、遅々として去り、歸りて之を閣上に置き、伊勢の巫視至るに及んで付して以て大神宮に納む。又嘗て夜更けて歸ることあり、途中誤て防火水桶に洩す。去ること里餘にして始めて貯水たることを覺り、則ち還て戸を叩き謝すること再三、明日又人を遣して之を洗滌せしめたりと云ふ(先哲叢談)。

十、漢の楊震字は伯起、將に東萊に守たらんとし、道に昌邑を經、故の擧ぐる所の茂



林(秀才の事)王密昌邑の令となり居れるか、夜金十斤を懐にして以て献ず、震曰く、故人震自身を云ふ、君を知れり、君則ち故人を知らざるは何ぞや、密曰く、眞夜知るものなし、震曰く、天知り、地知り、子知り、我知る、何ぞ知るなしと云ふか、密愧ぢて而して去る(純正蒙求)。

十一、貧困の生立の恥づべからざることは、古來偉人傑士にして貧困の中より身を起したる者頗る多きに徴しても知るべし。故に孔子も、子志於道而恥惡衣惡食者未足與論(論語、里仁)と戒めたり。寧ろ貧にありても奮發心を起さざるを恥づべきなり。

十二、容貌、體格に就ても、古來秀吉の如く、瑯檢校の如く、或は醜貌、或は不具にして偉人傑士たるものあるより見るも恥づべきことにあらず。況んやこれ天の爲す所にして己が所業にあらざるに於てをや。寧ろ外貌を飾るを恥とすべし。外貌を粧はんことに努めて、内心の修養を怠るは、最も恥づべきなり。

十三、未熟は若年の者には恥づる要なし。グリーンは學生時代には鈍才なりしが、勤學勵精して遂に大學教授となり、世界に名高き倫理學者となり、スコット

は世人より鈍物と嘲られしことあれど遂に大詩人、大小説家となれり。されば恥づべきは未熟にあらずして、未熟なるにも拘らず奮勵努力せず、或は之を蔽ひ隠して修養せざること是れなり。

注意 青年時代には羞恥の心は強きを常とす。故によくこれを善導して方向を誤らざらしめんこと肝要なり。教授者は特にこの點に注意せられんことを希望す。

### 第十課 寸陰を惜め

目的 時間の貴重なる所以、特に學修時代に於ては寸陰を惜みて修養に努めざるべからざることを説き以て其の善用を圖らしむることを主眼とす。

#### 要項

- 一、人間の生涯を觀察して、眞に活動する時間の短きことより、眞に人生の貴重なる所以を解する者は又時間の貴重なることを知らざるべからざる旨を説く。
- 二、時間の貴重なるは、單に吾人の有する時間の短きが爲のみにあらず、一度過ぎ



去りたる時間が再び還らざるが故にして、實に其日々は新らしき經驗なることを示す。

三、時間は何人にも貴重なれども、學修時代に於ては特に之を尊重せざるべからず。何となれば學修時代は活動の準備期にして、善美なる活動を營まんが爲には完全なる準備を整へざるべからず、而して準備の完全を期せんと欲せば寸陰をも善用して心身の修養を積まざるべからざるを以てなり。故に學生たる者は零碎なる時間をも空費することを堅く戒めて、その利用を圖らざるべからざることを諭す。

四、されど運動、休息、睡眠等は精力を養ふ限り時間の空費にあらず。併し乍ら是等は決して過度に亘るべからず。

五、時間の利用法は日課を定めて、萬事規則正しく爲すにあり、又日課にて定めたることは猶豫なく行ふべし。

六、要するに不斷に有益なる活動を營むは、一面には時間の利用となり、他面には惡を遠かる所以なることを説く。

一、フランクリンの語、"Do you love life? Then do not squander time, for time is the stuff which life is made of."

二、朱子の詩に曰く、少年易老學難成、一寸光陰不可輕、未覺池塘春草夢、階前梧葉已秋聲。

三、英國の諺に曰く、Procrastination is the thief of time.

四、大學に曰く、小人間居爲不善、無所不至。

五、史記に曰く、時者難得而易失、時哉時不再來。(准陰侯傳)

六、陶淵明の傳に曰く、盛年不重來、一日難再晨、及時當勉勵、歲月不待人。

七、西諺に曰く、時は金なり。Time is money.

八、シェイクスピア曰く、余の時間を失ふことは余自身を失ふことなり。Hillo se my hour, I lose myself.

九、ジョンソン曰く、過ぎ去りし時間は再び還ることなく、失はれし一瞬時は永久に失はれたるなり。Time past never returns, a moment lost, lost forever.

十、橘守部の歌にあすか川あすといひては流しやる月日にかくる柵ぞなき。



十、一エリフ、バリーット(Ellin Baritt)は一八一〇年ニューヨークのコンネクチカットに生れ、一八七九年死す。鍛冶屋となりて生計を營める傍、語學を研究し、十八ヶ國の語に通じ、二十二の歐羅巴の方言を學び得たりと云ふ。然も彼自身の告白によれば、かゝる成功は決して彼が語學の天才を有したりしに由るにあらずして、零細なる時間を利用して自修を怠らざりしが爲なり。

十二、フランス著名の司法官ダゲッソ(Dagnessean)は一六六八年に生れ、一七五一年死す。食時の際、料理の來るを待つ間を利用して筆を執り、遂に大冊子の著述を爲したりと云ふ。

十三、エロスマス・ダーウイン(Erosmus Darwin)は醫師にして一七三一年生れ、一八〇二年歿す。進化論者として有名なるチャールズ・ダーウインの祖父に當る。彼は單に醫師として名聲を博したるのみならず、詩人として知られたり。而して彼の詩は多くは病家を巡訪する際常に車中に小紙を携へ、感想を録し置きたるものより成りしと云ふ。(かゝる例はスマイルズ自動論第五章二十三節にあり)

## 第十一課 機會

目的 前章の意を受け、時々刻々に來る機會を捉へて心身の修養を勵み、以て將來國家並に自己の運命を決定するが如き大機會に乘じ、以て志を遂げしめんことを主眼とす。

### 要項

- 一時は機會を乗せて去來し、之を捉ふると否とによりて成敗の分るゝことを説く。
- 二、機會に大小あり。國家の運命、個人の浮沈を決定するが如きは、その大なるものなることを例解す。
- 三、かゝる大機會は萬人に解放せられ、之を捉ふると否とは、その人の自由なることを例解す。
- 四、現代は列國の競争益々激甚を加へ、互に雌雄を決せんとする機運に際するが故に、國家の爲果た個人の爲奮闘して、大志を伸ぶるの機會は何人も之を發見



するを得べきことを述べ。

五、學生時代は將來の爲に準備する時期にして、從て他日の成否は今日修養の厚薄に由つて分るゝことを述べ。

六、而して今日最大の修養を積まんと欲する者は、時々刻々の機會を捉へて修養に資せざるべからず。寸陰と雖も悉く修養の機會たらざるはなし。我が耳目に觸るゝものは皆我が師なりと心得、以て總ての機會を善用して修養に努め、他日大機會を捉へて成業することを期せざるべからざる旨を説く。

## 参考

一、ネルソンとトラファルガーの海戦。一七九九年ナポレオンは新たに憲法を制定して三人の統領を置き、自らその第一統領となりて國政の實權を掌握したり。故に名は共和政治にして實は帝政なり。茲に於てイギリス及びオーストリアはフランスの新憲法を否認し、ナポレオンを目して共和政治の破壊者、王位の篡奪者となせり。ナポレオンは兩國の態度を憤り、先づオーストリアを征服し、然る後イギリスを討伐せんとしたり。併し乍ら當時フランスの

海軍力は甚だ微弱にして到底イギリス艦隊の敵にあらざりしを以て、ナポレオンも直に軍を發すること能はざりき。然るにこの時イギリスに政變起り首相ピット辭職し、外交政策亦變じて遂に一八〇二年アミアン條約に由て英佛の和議を見るに至れり。されどイギリスにてはこの條約にて決定せるフランス植民地の還附を履行する誠意なきが如かりし上に、ピット再び首相となり、英佛の關係は再び險惡となりしを以て、ナポレオンは密かに大軍を北方プロシアに集中し、直ちに海を超えてロンドンを衝かんとせり。然るにイギリス艦隊の警備嚴にし、渡海上陸の事不可能に見えしかば、ナポレオンはイギリス艦隊を西インド諸島方面へ牽制してその間にイギリスに上陸せんとし、艦隊司令官ビルヌーブに命じてイギリス艦隊を牽制せしめんとせり。茲に於てビルヌーブはマルチニック諸島に向つて航海したるが英艦隊が容易にその計略に應ぜざるを見て、ナポレオンはビルヌーブに英艦隊の準備整はざる間に之と會戦することを命じぬ。然るにビルヌーブ逡巡して容易にその途に上らず、ナポレオンの嚴命に逢ひ、漸く歸航の途に就けば、途中早くもイギ



リスの別艦隊と衝突し更にブレスト港内に碇泊せるフランスの一艦隊はイギリスの別艦隊に封鎖せられて本艦隊と合することを得ず、かくて計畫全く齟齬して逡巡せるに乘じ、ネルソンの率ふるイギリス艦隊は一八〇五年十月二十一日之とトラファルガー岬附近に於て衝突したり。この時ネルソンは旗艦ビクトリア號に坐乘し、開戦に當つて全員に向つて「英國は各員が其の義務を果さんことを期待す」(England expects that every man will do his duty.)と傳へて之を激勵し奮闘の結果遂に敵艦十九隻を撃破或は捕獲して大捷を得たり。然るに身は敵の流弾を受け、左肩より脊髓を貫通せられ、三時間の後名譽の戦死を遂げたり。没するに臨み莞爾として曰く、有難し、余は余の義務を果したり」(Thank God! I have done my duty) 云々。

二、日本海々戦と東郷司令長官の事は尋常小學讀本卷十二に出づ。

三、諺に曰く、時と潮は人を待つことなし。Time and tide wait for no man.

四、西諺に曰く、鐵は熱せる間に鍛へたるべからず。You must strike the iron while it is hot.

五、アーサー・ヘルプス曰く、善を行ふ機會は見易く、又數多きにも拘らず、必ずしも直ちに着手し得べきものにあらざるが故に、吾等は平素より自ら準備し、おき好機を失はざらんことを要す。

六、ウォルター・スコットは何事を爲すにも自ら進修するが爲めの機會を看出し、又能く偶然の事を仔細に算計する人なり。スコット嘗て一著書家の徒弟となりしが、期限盡きてその家を辭し去る時に始めてスコットランドを巡遊し、兵亂の後生残りし英雄を尋訪し、これと朋好を結び、遂に後來著述の基礎を立てたり。その後輕騎兵の衣糧官たりし時馬に蹴られて歩行すること能はず家に臥してありけるが、スコットは懶惰を惡むこと讐敵の如くなれば、これを時として著書に従事せりと云ふ。(本卷十八章參照)

## 第十二課 禮儀

目的 禮儀は人たる道を盡して以て己が品位を維持する要道なれば、能くその道を教へて實踐に心掛けしむるを以て主眼とす。



要項

- 一、禮儀の意義を説き、相手と場合との異なるに随ひ宜しきに適ひたる言語、動作を以て敬愛の心を發表することが禮儀なることを述べ。
- 二、敬愛の精神と之を外面に現したる形式とが禮儀の二要素なることを述べ、内に敬愛の誠あれば自らその態度に顯れて禮儀となることを説く。
- 三、禮儀は相互の關係を和げ、社會の秩序を正しうし、且自己の品位を保つものなることを説き、以て禮儀の重んずべき所以を示す。
- 四、禮儀は文明の表徴なることを説く。
- 五、現代の我が社會に於ては古來の禮法廢れて新なるもの未だ起らず、善美なる禮儀の振興を計るは現代の急務なることを述べ。
- 六、それ故に他日國家の中堅に立たんとする學生は平素思をこゝに致し、よくこの道を修養して自己の品位を保つと共にその美風の普及を圖るべきことを論ず。
- 七、社會に出で、交際する場合の注意を述べ。

八、虚禮を戒む。

参考

- 一、孔子曰、禮與其奢也寧儉。(論語八修)
- 二、有子曰、禮之用和爲貴。(論語學而)
- 三、周、内史通曰、禮、國之幹也、敬、禮之興也、不敬則禮不行、禮不行則上下昏。(左傳昭公十一年)
- 四、子大赦曰、禮上下之紀、天地之經緯也、民之所以生也、是以先王尙之。(同上二十五年)
- 五、禮記に曰く、中正無邪、禮之質也、莊敬恭順、禮之制也。
- 六、孟子曰、辭讓之心、禮之端也。(告子上)
- 七、荀子曰、禮以順人心爲本。(大略篇)
- 八、禮記に曰く、鸚鵡能言、不離飛鳥、狷々能言、不離禽獸、今人而無禮、雖能言、不亦禽獸之心乎。
- 九、孝經に曰く、禮者敬而已矣。



十、禮記に曰く、道徳仁義非禮不成、教訓正俗非禮不備、分争辨訟非禮不決、君臣上下父子兄弟非禮不定。

十一、孔子曰、君子義以爲質、禮以行之、孫以出之、信以成之、君子哉。(論語、衛靈公)

十二、モンテイグ夫人曰く、壹錢を費やさずして萬事を買ひ得べきものは禮讓なり(西國立忠篇)。 Civility costs nothing and buys everything. Lady Montague.

十三、チエスタ・フィールド曰く、他人の爲めに自己を犠牲にして其利己心を抑

制することは禮讓の簡單なる否寧ろ真正なる定義なり(オリポーン散文類纂)。

To sacrifice one's own self-love to other people's is a short, but I believe, a true definition of civility.

y. Chesterfield (Allibone, Prose Quotation.)

十四、歐州の皇族の妃某子一日其の愛姫の彈琴の師たる一婦人を召して内宴の席に侍せしめしが、此の婦人は當時既に母を失ひて老父と共に家にありしを以て、妃は老人をして獨り其の家に留めんことを憐み、因りて彼の婦人に命じて父を伴はしむ、この老人は退職武官にして嘗て軍功を建てしことありと云ひ、而して其の宴に侍するや禮に従ひて飲食し、次で席を移して客席に入り、珈

琲を喫し、數盞の「キリウ」を傾けたる後、主妃の命に従ひて煖爐に接したる大椅子に凭り、頗る愉快の狀なりしか、其の女の來賓の爲に圍繞せられて琴を彈ずるに臨み、漸く方に睡眠を催し、其の曲の已に佳境に入るに及びて終に鼾聲を作す、乃ち聽衆皆相觀て微笑せり、時に彼の婦人は之を見て怒顔色にあらはれ、突然起ちて父の傍に到り、痛く之を推し、搖り以て其の夢を攪亂し、而して彼の老人は之を恥ぢて頻りに其の女に謝せり、是に於て聽衆の微笑は變じて憤懣の情となり、主妃も亦此の婦人が父に對して不敬なるを怒り、此時以後終に之を寵愛するの念を絶つに至れり。(上田金城譯述、新式泰西禮法)。

十五、秀康公(徳川秀康は家康の第二子にして、越前六十七萬石に封ぜられ、慶長十二年没す)越前に封ぜられ給ひし後、阿閉掃部とて武功の譽ありし者を厚祿にて召抱へられけり、又狛伊勢とて是れも國に世祿の歴々なりしが、嫡子に鎧の着初させけるに、かの掃部を招待して子に鎧きする事を頼みけり。さて饗膳すみいはひの盃に及びしとき、伊勢、今日は愚息が鎧の着初にて此まゝ御身の御武功の事物語り候て、彼れに御さかせ候へといひしに、掃部いふ、某が身の上に御はなし申すべき程の武功



は覺え申さず候、されど御望も黙しがたく候まゝ、某一生の中に武者振の見事なる士を一人見申して候、其事をはなし申すべし。江州志津獄の戦に暮方に某一騎餘吾の湖のわたりを引き候へしに(阿閉掃部が父は阿閉淡路守とて明智に時掃部は柴田方にてあるべし)敵とおぼしくて、うしろより詞をかけし故馬をひき返し候へば、其の人申し候は、今朝よりかせぎ候へどもよき敵にあひ申さず候、御人體を見うけ幸とこそ存じ候へ、御不祥ながら御相手になり申すべしとすゝみより候故、それこそなたも望む所にて候へ、とてたがひに馬をのりはなしすでに鎗をあはせんとしけるに、其の人しばし御待ち候へ、今朝より雑兵をおほく突き崩し候故、鎗よごれて候まゝ、鎗をあらひ候て御相手になり候はんとて、余吾の湖に鎗を打ひたし、二三遍あらひて、さらばとて突きあひしが、久しく勝負なかりし程に日も暮れはてゝものあやめも見えずなりぬ、其の時あなたより又詞をかけ、もはや鎗先も見えず候、御殘多くは候へども是れまでにて候、御いとま申し候べし、御名こそ承りたく候へ、某は青木新兵衛と申す者にて候、とて某が名をも承り候て、此の後又陣頭にて出合ひ候は、たがひに人手にはかゝ

り申すまじく候、もし又味方にて候は、わりなく入魂いたし候べし、さらばとて立わかれしが、是れ程見事なる武士は、ついに見侍らず、いかゞなりはて候にや、と語りけるに、其頃伊勢かもとへ心安く出入する青木方齋といふ浪士あり、其の日も来て勝手に居たりしが、此の物語をきゝて、勝手よりにじりいで、掃部に向ひ、さても只今の御物語承り、今更昔を思ひ涙をおとしてこそ候へ、其の時御相手になり候、青木新兵衛は、はづかしながら我れ等にて候、かく申すばかりにては、うきたる事におぼすべく候はんとて、其時雙方のよろひのおどし馬の毛色を一々いひけるかひとつもちがはざりければ、掃部おどろきて、さてく久しくしてあひ候て、本望に候、とて手前でありし盃を方齊にさし、是をしるしにとて腰のわきざしを抜きてひきけり、それより方齊が名國にたかくなりし程に、秀康卿の耳へも達せしかば、掃部と同じ祿にてめし出されけりとぞ。

(駿臺雜話)

十六蘭偶(姓は伊藤、名は長堅、字は才藏、蘭偶は其號なり、仁齊の第五子)博學能文にして父兄に類す、而して舉止端正なり、其始めて君侯の前に講ぜし時、書に對して



講せず、滿座掌に汗して以爲らく、この人寒素に生長して未だ大人に説くに慣れざれば則ち其の巍々然たるを視て而して然るならんと、中使促せども應ぜず、侯も之を訝かる、既にして蘭僑徐ろに曰く、公褥に座せり、聖人の書を講ずべからずと、侯之を聞き遽かに褥を去る、是に於て方めて講説せりといふ。

(先哲叢談)

### 第十三課 親切

目的 親切は社會生活の幸福を増進する要道なるのみならず、實に道德の根本たるものなれば、その精神を鼓吹して修養に資せしめんとす。

#### 要項

- 一、親切は人たる道にして又社會生活を幸福ならしむるものなることを説く。
- 二、フリッツの例語に由て親切の如何なるものなるかを悟得せしむ。
- 三、親切は事の大小に由るものにあらず、之を受けたる人も之を行ひたる者も共に喜び得る道にして又之に由て仁愛の徳が養成せらるゝことを述べ。

四、親切は内に思ひ遣りの心あれば自ら行はれ、又思ひ遣りの心は我が心を以て人の心を推しはかれれば自然に湧き出づるものなる事を説く。

五、思ひ遣りの心は道德の根本にしてこれに由て他の諸徳が行はるゝものなれば、よく此の心を養ひ以て之を近きより漸次に遠きに及ぼすべき旨を論ず。

#### 参考

- 一、フリッツの話はニュー・チヨイスリー第五卷第三課に出づ。
- 二、我が心を以て人の心を推しはかるに云々、貝原益軒、大和俗訓、心術上にあり。
- 三、孟子曰、分人以財、謂之惠、教之以善、謂之忠。(孟子、滕文公上)
- 四、古語に曰く、仁者無敵。
- 五、子貢問曰、有一言而可以修身行之者乎。子曰、其恕乎、己所不欲、勿施於人。

(論語、衛靈公)

- 六、諺に曰く、我が身を抓りて人の痛さを知れ。
- 七、諺に曰く、情に向ふ刃なし。
- 八、西諺に曰く、情ある一語は珍味佳肴に優る。A word of kindness is better than a fat pie.



九西諺に曰く、人は親切の虜となる。 *Les hommes se prennent par la douceur.*

十、キリスト曰く、人より爲されまほしき事を人に施せ。 *Do as you would be done by.*

十一、スマイルズ曰く、親切丁寧は吾人が他人に對して懐く所の内心の愛敬心は外的動作によつて表白する所の一方法なりとは廣く世人の信ずる所なり。  
(品性論) *Politeness has been described as the art of showing, by external signs the internal regard we have for others. (Character)*

十二、ゼレミイ・ベンザム曰く、親切なる行爲は或は思の外の詰らぬ待遇、又は恩を仇にする如き返報に接することもあらん、然れども此の如き相手の無感謝なる振舞は親切を盡したる行爲者の心中に溢るゝ自己賞讃の感を破壊すると能はず、斯くの如くにして人は些かなる費用を以て吾人の周圍に親切丁寧の種子を蒔き得べし、而して此等種子の二三は必然に濕潤の地に落ちて其處に發芽し、生長し、遂に仁愛の美德となりて他人の心に繁り、斯くて程なく此等は總て幸福てふ美はしき果實を結ぶに至るべし。 *Good and friendly conduct may meet with an unworthy with an ungrateful return; but the absence of gratitude on the part of the*

*receiver can not destroy the self-approbation with recompenses the giver; and we may scatter the seeds of courtesy and kindness around us at so little expense! Some of them will inevitably fall on good ground and grow up into benevolence in the minds of others; and all of them will bear fruit of happiness in the bosom whence they spring. (Allibone; Prose Quotation)*

十三、セス曰く、吾人は他人に多少なりとも援助を與へて其人の善を到達せしめんとする時には、吾人は他人の善そのものに就きて合理的洞察をなすの知慧ある事を要す。而して總ての吾人の親切なる行爲は斯る洞察により指示せらるゝやう導かる可きなり。斯る合理的指導を有せずんば吾人は眞實に他人に親切なるものと云ふ事能はざる也。賢からざる親切は親切にあらず。例へば愛に溺れたる親教師、朋友の盲目的博愛又は無分別なる慈善は眞の親切にはならざるなり。斯る行爲の不徳たるはそが然かく盲目的に愛せられたる個人の自立心と自頼心とを傷くるにあるなり。眞の親切は他人をして自ら爲す所あるの人たらしむる底の行なりとす。(倫理學原理の研究、第二篇第二章二七七頁)



十四、蒲生君平(名は秀實、君平は其字なり、通稱伊三郎、下野宇都宮の人、山本北山に就く)山陵訪求の爲京都に赴き、蘆庵(小澤蘆庵名は玄中、通稱帶刀、蘆庵は其號なり、年四十六)が居を訪ひ、早くより思ひ起しし志願の趣遂一に語示し、山陵志著述の爲に古陵を訪求し、旅路を重ねし事々物語りければ、蘆庵ひたすら感嘆して、足下は得難き學士なり、さる志あらむには何時までなりとも吾が草庵に宿りて此邊の山陵を心靜かに訪求すべしとて他事なく持てなしたり、斯くて君平は日毎に古陵を尋ね巡り、或る時は日暮れて歸ることなどあれども、いつも蘆庵は自ら風爐を焚きて浴みさせぬ、君平は老人の心づかひを氣の毒に思ひて辭すれども、蘆庵從はずして曰く、是等の事は唯客を愛する故のみにあらず、足下の疲勞を慰め恙なかれと願ひ、國家の爲に力を盡す人の助けにならむとてなり、必ず辭し給ふなとて後々迄も爾かしてけり。(小澤成胤蘆庵僧)

十五、二宮翁(二宮尊徳は相模國足柄山に生れ、金次郎と稱す、經濟の道に長じ、民の困難を濟ひ、或は諸侯の急を助け、復名一世を掩ふ、安政三年十月歿す、年七十)初めて家を持ちし時一枚の鍬損じたれば、隣家に行きて貸與を求めしにその家の老爺は今しも菜を蒔きつゝあり、之を終らざれば貸し難しと言ふ、翁曰く

我家に歸るも鍬無ければ別に爲すべき仕事なし、されば今此の畑を耕し菜を蒔きて進すべしとて老爺の爲に耕し蒔き而して後に鍬を借りたることあり。

(二宮尊徳言行錄)

### 第十四課 自利と利他

目的 自利と利他との一致を説き、單なる利己心を抑制して、同時に自利且利他となるが如き行爲に出でしむることを目的とす。

#### 要項

- 一、攝生、勉強が本來は利己的行爲なれど同時に利他となる事を説く。
- 二、親切、慈善が本來利他的行爲なれど同時に自利となることを述べ。
- 三、以上の例の示す如く、單に物質上のみならず、廣く精神上の利害をも考ふれば自利と利他とは一致するものなる事を示す。
- 四、故に人たるものは眞の自利と共に眞の利他を圖るべきものなる事を説く。
- 五、行爲は其の影響する所大なるものなれば、各人皆自利、利他一致の理を悟りて



眞の自利眞の利他を圖らば、個人並に社會の幸福は期して待つべきのみなることを説く。

參考

- 一、曾子曰、戒之戒之、出乎爾者、反乎爾。(孟子梁惠王下)
- 二、孟子曰、人有恒言、皆曰天下國家、天下之本在國、國本在家、家本在身。(離婁章)
- 三、孟子曰、仁者愛人、有禮者敬人、愛人者人恒愛之、敬人者人恒敬之。
- 四、諺に曰く、情は人の爲ならず。
- 五、諺に曰く、人を呪はゞ穴二つ。
- 六、孟子に曰く、(孟子)曰、獨樂樂、與人樂樂、孰樂、(王)曰、不若與人、(曰)、與少樂樂、與衆樂樂、孰樂、(曰)、不若與衆。(梁惠王下)
- 七、さて慶長五年九月十五日關ヶ原の逆徒退治の後、石田三成(本名景成、近江の人、豊臣秀吉の臣なり、佐和山城主封せられ、十八萬六千石を食む、關ヶ原の戰に捕虜となりて斬に處せらる、時に慶長五年十月なり)生捕となりて、大津の濱に引するたり、御先陣の福島正則(性は源氏、尾張の人、豊太閤に仕へ、武勇を以て、開け寛永元年七月歿す、年六十四)其處へ行かゝり、馬上より高聲に三成を罵りていらざる事を仕出かして、其様を見るやと

云へり三成も汝等を如是にせざることは返す返すも遺恨なりと申したり。

其次に黒田長政、細川忠興(長政は吉兵衛と稱す、筑前國五十二萬石に封せられ、福阿輝經の養子にして征韓の役、長政等と共に渡韓す、豐前國四十萬石に封せらる、正保二年十二月卒す、年八十二)行きかゝりけるか、此體を見るより早く馬よりとび下り、さて傷ましき御事也、古より名將と稱せられし方々も如是こと少からず、されば御恥辱には候はず、さぞ寒氣に堪へがたかるべしとて着たる陣羽織を脱ぎて三成に打ち着せて通られけりとなり、然るに正則は關ヶ原の先手の功に誇り、伊奈圖書に腹切らせ、安藝備後二ヶ國を押し領してより、殘暴肆虐にして、臺徳院殿(秀忠御代に二ヶ國御改易、川中島に流罪せられて一生蟄居の身となれり、長政、忠興は大國を領して福祿を子孫に綿延す。(梧窓漫筆拾遺))

第十五課 守約

目的 約束を守ることは社會的生活に缺くべからざる條件なれば、こゝにその重んずべき所以を説きて之れが實行を期せしめんとす。



要項

- 一、約束を守り規律を重んずることは、世の信用を得る爲、並に社會國家を維持する爲に缺くべからざるものなることを述ぶ。
- 二、昔の武士は然諾を重ずるの風盛んなりしが、近時この風漸く衰へ、我が國民は個人として又全體として動もすれば世界の不信用を招かんとする傾あることを戒む。
- 三、季札の例話により守約の美德なることを示す。
- 四、約束は必ず履行せざるべからず、而して堅く守約を行はんとせば、約束に先ちて事の善惡を辨別し、正善は之を約し、邪惡は必ず拒絶せざるべからざることを諭す。

参考

- 一、西洋の諺に曰く、約束する人は負債に陥る。 *He who promises runs in debt.*
- 二、吳の季札は春秋時代の人にして、秦伯が十世の孫なり出でて、北方に使せしとき、徐君に過る徐の君季札の劍(使者として他國に赴く時は必ず一口の寶劍を佩ぶ)を愛づれど口敢て言

はず、季札心に之を知り居れど上國に使用するが爲め故に未だ献ぜず、還て徐に至れば徐の君已に死せり、乃ち其寶劍を解て徐の君の塚の樹上に繋ぎ、拜して去る、從者曰く、徐の君已に死せり、尙ほ誰が爲に用ゆるや、季子曰く、始め吾已に之を許せり、豈死の故を以て吾心に背かんやと。(日記故事)

三、吉田松蔭亡命詩曰、一諾不可忽、流落何足辭。

四、貝原益軒曰く、はじめうけ合はざるはしばらく人の心によるこはずと云へども、信に害なし。心よわく又氣かるかるしくして、たやすくうけあひ、後に其約たがひぬれば甚だ信に害あり。されど人の爲めには、はかつて忠あるは人に交る道なれば、なるべきことわりたにあらば、うけ合ひて心を盡すべし、是忠厚の道なり。(五常訓、卷の五)

五、第三卷二十章、軍人への勅諭の中信義の條を参照せらるべし。

六、吉田松陰初めの名は少次郎、後ち寅次郎と改む、又矩方と稱す、長門の藩士なり、本姓は素と永原氏、後ち出でて、吉田氏を冒す、其人となり、深沈にして、大志あり、名節を以て自ら勵む、夙に宇内の大勢に見る所あり、以て常に心を海外の事に



用ふ、嘉永二年九州に遊び以て多く奇傑の士を訪ひ、肥前平戸に到りて葉山燈軒を見る蓋し平常欽慕する所なり、同三年藩侯(毛利敬親)に従て江戸に往き、相房の海岸を巡視し慨然以て海防を説く、即ち曰く、江戸灣は浦賀の要衝を嚴にせば外寇以て禦ぐべし、唯だ東北の邊海殆んど開放の姿にて甚だ安からざるものあり、宜しく先づ地形を熟察し豫め以て此れが策を施さざるべからずと其炯眼今日に至り益々炬の如きものあるを見る。此時偶々肥後の土宮部鼎藏なる者あり、血精の男兒にして亦東遊北行の志あり、同氣相求むる所松陰之れと與に東北漫遊の旅程に就かんと約す、而して邸吏關符を給せず、幕府の公裁を得て之を給せんとす、時に藩侯は既に歸國して長門にあり、松陰曰く、男子既に人と約す、期に臨んで遅延す、何の面目か天下に見えん、且つ夫れ長人の信義に關するを如何せん、と終に允許を得ずして發し、江戸に到りて宮部に追及す、是れより二人俱に奥羽北越より佐渡に航し、歳を閲して還る、是に於て邸吏法を糺し、松陰を捕へて國に幽禁す。(日本偉人傳) (第一卷第十六課參照)

## 第十六課 公共心

目的 公共心は社會の維持發展の爲めに缺くべからざる精神なり。然るに我が國民にこの精神の普及せざることは最も遺憾とする所なれば、特にこの點に留意してその修養を鼓吹するを以て主眼とす。

### 要項

- 一、公共心とは我が身我が物を愛する如く、人を愛し、社會を善くし共有物を大切に取扱ふことなる事を説く。
- 二、世間普通の事例を舉げて公共心の何たるかを會得せしむ。
- 三、公共心は人を益し己を利するものにして社會全體の平和進歩の要道なることを説く。
- 四、公共心の缺乏は個人と社會とが密接不離の關係を有する事を悟らざるより起ることを述べ。
- 五、公共心は個人並に國家の體面に關するものなれば、我が國民にこの精神缺乏



せりなど批評せらるゝは國民の恥辱なることを説きてその矯正を激勵せんとす。

六、公共心の養成法を述べ、要するにこの精神は己を愛する心を擴充して團體を愛する心を喚起するにある事を教ふ。

参考

- 一、孔子曰、仲弓問仁……己所不欲、勿施於人。(論語顏淵)
- 二、孔子曰く、夫仁者己欲立而立人、己欲達而達人。(論語雍也)
- 三、孟子曰、老吾老以及人之老、幼吾幼以及人之幼、天下可運於掌、詩云、刑于寡妻、至于兄弟、以御于家邦、言舉斯心、加諸彼而已、故推恩足以保四海、不推恩無以保妻子、古之人所以大過人者無他焉、善推其所爲而已矣。(孟子、梁惠王上)
- 四、明治天皇御製、もろともになすけあひつゝ國民のむつびあふこそたのしかりける。
- 五、諺に、旅の恥はかきすと云へり。かゝる俚諺が行はるゝは抑も我が國民の弱點を暴露せるものなれば嚴に之を戒め、好事不出門、惡事傳千里、事文類聚、莫

見乎隱、莫顯乎微、中庸等の語を示されたし。

六、太公(徳川家康のこと) 安倍川を引て城中に入れ以て園池に注がんと欲し、吏に命じて之れを議せしむ、吏水道を經理し表すに小榜を以てす、太公放鷹より還り其道一小寺に當るを見て悦ばず、從臣或は説を獻じて曰く、宜しく地を他處に賜ひ以て其寺を移し、而る後役を起すべしと、太公曰く、否々假に此役をして國の爲め民の爲めにして相謀らしめしものならば、大寺巨刹と雖も亦之れを移さざるを得ず、今日の舉特に老夫一時の娛樂の計のみ娛樂の計にして而して古來置く所の佛寺を毀つは我が欲せざる所なりと、遂に命じて其役を止む。

(近古史談)

七、我が國の留學生某一日獨逸伯林の公園に遊びしに一陣の強風來つて餘念なく遊び居たりしあどけなき小童の帽子を奪ひてこれを芝生の上に落せり、其の芝生には一條の針金材の一本の圍ひだもなかりしに此の小童は何故か其の帽子を眺めつゝ足ずりして泣き居かり、怪みて之を問へば、あの帽子を風に取りられしに此の芝生には人入るべからずとて益泣き出だせり、某其の心の殊



勝なるに感じ、余は外國人なれば別に差支なかるべし」とて取つて與へしかば小童は大に喜びて去れりとぞ。(三木忠道氏の中學國語讀本)

**注意** 公德心の養成に就ては消極的方面より、他人に迷惑を掛け、社會國家に損害を及ぼすが如き行爲を避けしむると共に、積極的に他人及び社會を利することを圖らしむるやう日常の行爲に就て注意を與ふること肝要なり。

### 第十七課 公正

**目的** 公正が社會各人の幸福を維持する要道なる旨を教へ、以て平素朋友に對し一般世人に對して此の道を實踐せしむることを主眼とす。

#### 要項

- 一、公正とは自他の幸福利益を等しく尊重することにして、即ち各其の分を守りて他を犯さざるの謂なることを説く。
- 二、公正は社會の各員が利益幸福を享受し、且社會國家の進歩發展を促進する爲めに必要なる旨を述べ。

三、公正に就ては第一に身體・生命の尊重すべきことを教へ、他人の身體・生命を尊重すると同時に自己保全の必要を述べ、並せて現代に於て復讐の不可なることを説く。

四、次に財産の尊重を説き、金錢物品の貸借の場合に必ず契約を履行すべきことを述べ、併せて自己の権利の主張に於ては寛容なる態度を持すべきものなることを論ず。

五、最後に名譽・信用の重んずべきことを説き、他人の名譽・信用を傷くるが如き言動を慎むべき旨を述べ、自己の受けたる毀損は忍ぶべきは忍び、大事にありては適當の處置を執りて可なることを教ふ。

六、要するに公正に關しては他人に對する本務はよく之を嚴守し、自己に關する主張は務めて寛大なることを要する旨を論ず。

#### 参考

- 一、佐藤一齋曰、徳無陰陽公爲之而已。(言志錄)
- 二、ホルネー曰く、公正は基本的道德たるのみならず、又殆んど社會的生活の唯一



の美德なり。(オリボン 散文類纂)

Justice is the fundamental and almost only virtue of social life. Volney (Allibone; Prose Quotation.)

三、ソロン曰く、不義の財は益なし、正義は死より救ふ。(箴言)

Treasure of wickedness profits nothing; but righteousness delivereth from death. Holy Bible; Proverb.

四、バウルゼン曰く、道徳的習慣としての公正は自ら人の生命及び利益の侵害を制し、又他人の之を爲すを防ぐ意志の方面、行爲の習慣をいふ。斯徳の根源は他人の生命及び利益をば自己のそれと等しく自家目的として之を尊敬する所にあり。各人の利益の範圍を擧ぐれば身體及び生活、己が生活を擴充せるものとしての家族、行動の方法の總和としての資産、理想的存在としての名譽、生活を自家目的たらしむる可能性としての自由等なり。法律は是等の利益範圍を保護して之に適應する權利の範圍を生せしめ、權利の範圍は禁止によりて保護せらる。……他人の權利を侵し、利益の範圍を害するは不正なり。あらゆる不正は遂に他人の生活は己が生活と同一價値を有する自家目的な

ることを否定する行爲によりて他人に向ふものなり。正義の本務の一般なる公準に曰く、不正を爲すべからず。他人をして己に對して不正を爲さしむべからず。之を積極的に云へば權利を尊重して之を保護すべし。

(倫理學大系七四六頁)

五、パウロゼン曰く、人の公正の意向は其個人的若くは公衆的なる敵人又は反對者に對する態度に徴して之を知る事を得。吾人が自然の傾向は敵人に對しては如何なる行動も是を許容し得べしとなす。乃ち之を輕蔑すべく、凌辱すべく、憎惡すべく、虐待すべし。個人的敵人に對してよりも公衆的敵人乃至反對者に對して公正を守るは一層困難なりとす。……以上論ずる所は公正の一方面なり。己が行爲の結果が他人の利益と衝突せざる様己が行爲を制限するものは公正の人なり。之に反して這個の顧慮をなさずして意識的に之と反對する行爲をなすものは不正の人なり。公正の他の方面即ち能動的方面は他人の不正を甘受せずして之を防禦するにあり。こは分れて二となる。一は他に對する不正に關し一は自己に對する不正に關す。權利心の言語は



公正の此方面を示すものにして比較的容易なる徳なり。

(倫理學大系七五〇頁)

六、パウルゼン曰く、國家に於て公民の要求を實現する歴史的生活規則を現行法となす。自然的正即ち正當なることは道德的範圍内に成立し、現行法は其位地を國家に占め、形式上國家の意志に由つて行はる。國家は國民の組織あり統一ある權力に外ならずして自然的正に一定の形式を與へ之を其保護の下に置く。されば正しきものは一の權力となり、公正は此の權力に由つて實現せらる。(倫理學大系七五二頁)

七、パウルゼン曰く、大度は私人的害に報いず、却つて之を看過し、よし報復の機會生ずるも之を利用せざる徳を云ふ。……隣人の輕卒なる言語もて若くは不正なる行爲に由りて吾人を辱かしむることありとせんに、吾人は法廷に訴ふべきか若くは公けの沙汰となさずして満足すべきか、之れが機會は必らず彼我關係の親疎の度に應じて現はれん。若し之を法廷に訴へたりとせんか其の結果や果して如何。彼隣人は將來注意を怠らざるべきか、蓋し然らん。

然りと雖も他の結果の之に伴隨するものあらん。乃ち吾人の加へたる報復は長く其印象を彼が腦裏に刻し、這般の些事の爲めに僅かに言語の爲めに恨むらくは報復せられたりとの念彼が念頭を去らずして機會だにあらば、我も亦報復し同時に其吾人を恐れざりし事を證せんと決心せん云々。

(倫理學大系)

### 第十八課 公正のスコット

目的 スコットの公正なる態度を模範として公正の徳を悟得せしむることを目的とす。

参考 スコットは一七七一年に生れ一八三二年に歿せる英國の大小説家なり。彼の行爲特に其の負債整理についての態度は深く味ふべき所なり。今少しく之を叙述すべし。

一、彼は元來自己の爲せる借財にあらで單に自己の關係せる會社の破綻の責任を負へるものなり。



二、彼は全財産を此の爲めに提供したれども、尙巨額の不足あり。彼は從來金錢上の心配なき生活に馴れし人なり。然れども斷乎として此の悲境に自ら立てり。

三、彼は人の好意なればとて濫に他人の助力を受けず。千艱萬難の中に男らしく獨力を以て健闘せり。

四、彼は悲境に在りながら自殺する事もなく、助力を乞ふ事もなく、自己の勞働によりて此の間の全責任を果さんとせり。

五、彼の臨終の語の高潔壯烈なる誠に深く銘記せざるべからず。彼の良心の如何に麗はしく又健かなりしかを想見すれば自ら凜然として襟を正さしむるものあり。

### 第十九課 謙 讓

目的 謙讓の美德なる所以を説き、以て年少者が陥り易き慢心を戒めて温恭なる性格を陶冶せしむることを主眼とす。

#### 要項

- 一、謙讓の意義を説き我が身を謙下りて人に讓るが謙讓なることを述べ。
- 二、自慢の心は人の陥り易き短所なることを述べ、そが人の嫌惡を招くのみならず其の餘弊はひいて道念を弱め奮發心を鈍くして向上發展を妨ぐるものなること、又之に反して謙讓は人の品位を高め、自ら他の敬愛を招くことを説く。
- 三、慢心は虚榮心と理想の低きとより起ることを述べ。
- 四、されば慢心を絶つためには虚榮心を抑制し、又理想を高きに求むべきことを述べ。
- 五、眞に謙讓の徳を養はんが爲には、慢心を戒めたる上、進んで人を敬愛する念を養ふべきことを論ず。

#### 参考

- 一、書經に曰く、滿招損謙受益。(大禹謨)
- 二、易に曰く、天道虧盈而益謙。(彖傳謙卦)
- 三、易に曰く、謙尊而光、卑而不可踰。(彖傳謙卦)



四、教女道規に曰く、謙讓恭敬、先人後己、有善莫名、有惡不辭、忍辱含垢、常如畏懼、卑弱下人也。(曹大家女誡)

五、老子曰、自傲者不長、自伐者無功。(道德經)

六、平家物語に曰く、傲れる者は久しからず、只春の夜の夢の如し。

七、諺に曰く、能ある鷹は爪をかくす。

八、諺に曰く、實る稻穂は頭を垂れる。 The boughs that bear most hang lowest.

九、太平記に曰く、謙に居て仁恩を施し、己を責めて禮儀を糺す。是を以て高しと

雖も危からず、満てりと雖も溢れず。

十、フランクリンは謙遜を十三徳の一に數へ、キリスト及びソクラテスに倣へと云へり。キリストは神人の自覺に立ちながら碎けたる魂を救はんが爲に、如何なる罪人、惡人に接する事をも辭せざりき。ソクラテスは大智高德にありながら自ら無智を以て表榜し、余は何事をも知らず、故に諸君と共に眞理を探らんとするなり」と云ひて民衆の啓發に努めたり。

十一、貝原益軒名は篤信、字は不誠、通稱久兵衛、初め柔齊と稱し、益軒はその號なり。

世々福岡侯に仕ふ。明暦三年京都に遊學し、松下五山、山崎闇齋、木下順庵等に就きて學び、日夜刻苦業大に進む、中年京都に講筵す。常に著書に従事し、國學を以て之を草し、一に世益を主とす。又好みて名勝を歴訪し、紀行數多あり。足跡天下に遍し。藩の三侯に歴仕して禮遇厚く、元祿十三年致仕して京都に隱居す、享年八十五、性謙遜にして博識を以て自ら傲らず、平居深く自ら韜晦して令譽益々加はる。曾て京都より歸國せんとし、海路船に乗ず、同船中一青年頻りに經義を談ず、益軒沈黙して字を知らざるもの如し。既に上陸するに及びて、各其姓名を告ぐ、青年益軒なるを知て、慚ぢ、姓名を告げずして去る。著書多く、就中慎思錄、近思錄、大和本草、益軒十訓等著名なり。

## 第二十課 忠 孝

目的 國民道德の大本なる忠孝の精神を説明して、國民的修養の基礎を授け、以て本卷の總括となさんとす。

要項



- 一、忠孝が國と家との存立を全ふせしむる根本の徳なることを説く。
- 二、孝は徳の始め、百行の本なることを述べ。
- 三、孝とは服従と奉養とを貫くに敬と愛とを以てするものなることを説く。
- 四、奉養に養體と養志とあり。養體は主として、成業して獨立の生活を營むに至りて行ふべきも、養志は少年時代より之を行ふことを得るものなるを述べ、學生としてはよく其の本分を守りて父母の心を樂しましむべきことを説く。
- 五、青年少年の時代には動もすれば父母の愛になれて孝道を怠ることあるを戒め、父母在世の間によく孝道を盡して、父母の志を養ふことに心掛くべき旨を諭す。
- 六、忠孝が其の精神に於ては一なる事を述べ、父母に孝なるものは君に忠なるべきことを説き、父母に仕ふる心を以て君に仕へ奉り、君に赤誠を致すべきことを諭す。
- 七、平時にありては君を敬ひ奉り、又徳を修め業を勵みて國家に貢獻するを以て忠となすことを述べ。

八、戦時にありては忠勇義烈以て國家の防衛に當り、國威を宣揚して君恩に報ゆべきことを説く。

参考

- 一、楠公碑文は朱之瑜の作なり。
- 二、後漢書に曰く、孝百行之本、衆善之始也。
- 三、後漢書に曰く、求忠臣、必於孝子之門。
- 四、管家遺草に曰く、孝子之門、必有忠臣。
- 五、孝經に曰く、身體髮膚受之父母、不敢毀傷、孝之始也、立身行道、揚名於後世、以顯父母、孝之終也。(開宗明義章第一)
- 六、孝經に曰く、以孝事君、則忠。(士人章第五)
- 七、孔子曰、父母在、不遠遊、遊必有方。(論語、里仁)
- 八、曾子曰、孝子之養老也、樂其心、不違其志、樂其耳目、安其寢處、以其飲食忠養之。
- 九、孔子曰、父母唯其疾之憂。(論語、爲政)

(小學卷二第十七章)



十、禮記に曰く、居處不莊非孝也、事君不忠非孝也、莅官不敬非孝也、朋友不信非孝也、戰陣無勇非孝也。

十一、朱晦菴曰、君子父子之大倫、天之經、地之義、而所謂民彝也、故臣之於君子、子之於父、則敬養之、歿則哀送之、所以致其忠孝之誠者、無所不用其極、而非虛加之也、以爲不如是、則無以盡吾心云爾。

十二、貝原益軒曰、父母につかふるに愛敬の二の心法あり。此の二は孝子の心とする所なり。人の子たる者必之を知るべし。愛はいつくしむとよむ。親をいとをしむなり。敬はうやまふとよむ。つゝみて親を敬ひおそるゝを云ふ。愛なければ父母にうとくおろそかにして情うすし。敬なければ父母をあなどりかろしめてをこたる。(初學訓卷之一)

十三、益軒曰、父母を養ふに養志と養體との二あり。養志とは父母の心にしたがひてさからはず、つねに父母の心をよるこぼしめ、うれへ苦しみなからしむるをいふ。父母にまみゆるはまづ我が顔の色をやはらげ、言の聲をよるこぼしくし、父母の氣體の安否をうかゞひ其の時日の要用をいひのべ、尋ね問ひ、世

の中のありしことども、審に物がたりして、父母の心をなぐさめ、父母の教あらばつつしんでさくべし。父母われをよび給はゞ早く行く可し。父母われにをしへ命ずる事あらば謹んでさくつとめて早く行ふべし。いとけなき時、父母をしたへる心を失はず、年たけて後に父母を思ひ慕ひて忘れず、父母に對するになづ／＼しく愛敬二ながら心にありて顔色言葉しとやかにのどやかにして、うや／＼しく父母の心にたがはず、父母の前に久しく在りて其のをしへをさし物がたりして親を慰め樂しましめ、其の志にそむかず、わが心にも、父母に對して物がたりするを樂しみ父母の悦べるを悦ぶべし。(初學訓卷之二)

十四、益軒曰、養體とは父母の口腹體を養ふを云ふ。わが家の力になるべきほどは飲食をあんばいし、其の味のよしあしと、冷えたと暖かなることを試むべし。又夏冬をり／＼の身にかなへる衣服をこしらへて、これをすゝめ、居所寢所を安からしめ、冬は温に夏は涼しくし、風寒暑濕をふせぎ、身にしたがへる調度諸の器具、事かけざるやうに整へすゝむべし。(初學訓卷二)

十五、益軒曰く、君臣父子は大倫なり。故に忠孝の二は殊に力を盡すべし。萬の



こと學ばざれば誠の志ありても其の道を知らざれば忠が不忠になり、孝も不孝になる。故に殊更忠孝の道をよく季び其の法をしりて行ふべし。古人も學問は忠と孝とを行ふ所なりと云へり。萬善ありといへども忠孝の道うすくば君子とすべからず。(初學訓卷の二)

十六、山崎闇齋曰く、樹しづかならんとすれど風止まず。子やしなはんとすれど親またずと。丘吾子が云へるげにさる事なり。人の命百年の中わかき老ぬるさだまりもあらねばしばらくも孝を忘れむかは、父母之年不可不知也、一則以喜、一則以懼といへる本文ありがたく覺待る。(大和小學)

十七、宗尊親王の御歌に曰く、君のため人を尋ねば足乳根の親に仕ふる心をぞ見ん。(歌集大和心)

十八、吉田松陰の歌に曰く、親を思ふ心にまさる親心、今日のおとづれいかに聞くらん。(歌集大和心)

### 卷 三

#### 第一課 人生の春

目的 青年時代は人生の春にして希望に充てる時期なり。而してこの希望に到達せんが爲には將來の活動に向つて大に備ふる所なるべからず。故に青春の暮れ易くして然も貴重なる時代なることを思ひて、歡樂を追ふことなく、専ら心身の修養に全力を傾注すべきことを説くを以て主眼とす。

#### 要項

- 一、四季と人生とを比較し、幼年より老年に至る變化が四季の推移に類似せることを述べよ。
- 二、青年は人生の春にして、又春が準備の季節なるが如く、青年は將來の活動の爲めに大に準備する所なるべからず。而して他日の成否が今日の準備如何に由て分るゝ事を思ひ、能く心身の力を養成することに努力せざるべからざる旨を説く。



- 三、春の暮れ易きが如く、青春亦然り。されば貴重なる修養時代の歳月を徒費すること戒む。
- 四、春は歳々訪れ來るも、青春の時代は再び還る事なし。故に青年は須らく將來の光明に生き、刻々の修養を勵むべきことを諭す。
- 五、佐久間象山の例話に由り、青年時代に於ける學修の努力に就て自覺する所あらしむ。

参考

- 一、陶淵明の詩に曰く、盛年不重來、一日難再晨、及時當勉勵、歲月不待人。
- 二、朱子の詩に曰く、少年易老學難成、一寸光陰不可輕、未覺池塘春草夢、階前梧葉已秋聲。
- 三、西諺に曰く、小兒の通り人と成る。 *As the boy so the man,*
- 四、西哲曰く、絶えず進め、假令速力は遅くとも長距離の行程とならん。 *Marchons toujours ; si lentement que nous marchions, nous ferons beaucoup de chemin.*
- 五、シラー曰く、人生の五月は唯一度花を咲くのみ、再び開くことなし。 *Das Leben*

-s Mai blüht einmal und nicht wieder. Schiller.

六、西諺に曰く、後に嘆かんよりは先に注意せよ。 *Besser bewahrt als geklagt.*

七、シラー曰く、汝自身の運命は汝の胸中にあり。 *Dein Schicksal ruht in deiner eigenen*

*Brust.* Schiller.

八、西諺に曰く、人が眠てゐる間に不幸は腥めてゐる。 *Das Unglück wacht, während der Mensch schläft.*

九、西諺に曰く、少し後れたるは大に遅れたるなり。 *Ein wenig zu spät ist viel zu spät.*

十、西諺に曰く、幸福は人自ら之を作る。 *Jeder ist seines Glücks Schmied.*

十一、西諺に曰く、日のあるうちに枯草を作れ。 *Man muss Heu machen, weil die Sonne scheint.*

十二、句に曰く、今日になつて菊作らうと思ひけり。(俳諧古選「二水」)

十三、青春時代に於ける努力の範例として本文に佐久間象山の學修に就て述べたり。象山は我國が泰西文明を入るゝに至る先驅者なり、維新の志士にして彼の影響を蒙りたる者頗る多し。象山(名は啓字は子明、象山は其の號、通稱啓之助、後修理と改む、信濃の人、兵法家を以て



名あり、夙に開國主義をとりて大に世の爲めに盡す所ありしが、元治元年七月刺客の爲めに殺さる年五十四) 已に江戸に入りて林述齋及び佐藤一齊の二門に出入して學ぶ所あり、又當時俊傑の士梁川星巖渡邊華山坪井信道氏と交を結ぶ、象山は夙に泰西の文物燦然たるものあるを知り、嘗て人に謂て曰く、今の時は古の時にあらず、儒生學士唯だ漢文學のみに之れ耽り、他に讀むべきの書あるを知らず、是れ抑も果して何の心ぞや、方今外患頻りに至る、彼れを知り我を知るは兵道の祕訣、況んや泰西の文物既に燦然たるものあるに於てをや、今日の書生たる者宜しく進んで萬物の書籍を涉獵すべし、と、是れより銳意奮力泰西の書籍を研究し以て銃砲兵制及び築城造艦の諸技を講じ、専ら外患を制するの策を務む、後ち泰西銃砲書を參し、別に自ら一機軸を出して銃砲を製す、其の迅速なること泰西製に三倍す、其の意匠の精妙亦驚くべきものあり、後ち薩長土肥諸藩の洋銃を模造するもの皆象山の製に倣ふと云ふ。(日本偉人傳)

吾人が象山に就て學ぶべき事多し。今少しく之を指摘せん。

(一)象山の學事に精勵したること。象山は天性敏慧の人なりしが上に學事の

爲めには寢食を忘るゝに至れり。少年の頃より些も遊惰の風なく刻苦勉勵せり。

(二)各方面の學藝を修めたること。眞の完全なる人格陶冶には各方面より修養せざるべからず。象山は學和漢洋を兼ね數學も歴史も刀鎗も一として學ばざるはなく、特に砲術の造詣深かりき。

(三)天下國家の大局に眼を注ぎたること。彼は區々たる俗論に媚ぶることなく眞に國家を憂へて其の大局に着眼し、獨特の識見を以て世界列強の形勢を考へたり。彼の蘭學を修めたるが如き一に此の國家の大計を慮りてなりき。

(四)學問を實地に活用せり。象山は熱心に學術に身を委ねると同時に之を實地に活用することを怠らざりき。是れ維新當時の志士に通じて見る所の美風とす。

(五)心身の鍛鍊を重んじたり。象山はよく自己の心身を鍛鍊することに努め一朝事ある時に十分なる活動をなし得るやう心掛けたり。



## 第一課 快活

目的 青年たるものは須らく快活にして進んで活動するの元氣なかるべからず。故に快活の精神を鼓吹し以て其の氣象を養成せしめんとす。

### 要項

- 一、心朗かにして生氣に充てるは快活にして青年は快活なるを要する旨を説く。
- 二、快活の利、幽鬱の弊を述べて快活の精神を持せしめんとす。
- 三、快活も幽鬱も要するに心の持ちやうなれば何ものも快活の眼を以て観ることに努むべきことを説く。
- 四、之に反して不快不幸は煩悶より起り、煩悶は不當なる望みを遂げんとするとより起るものなれば之を戒め。
- 五、自己の天分を守るべきことを説き、かくて自己の最善を盡さば愧づる必要なことを論ず。
- 六、又幽鬱は疾病より來る事あり、かゝる場合には醫療の力に信頼すると共に精

神の慰安を求め、以て健康の回復を計り、決して自ら悲觀す可からざること説く。

- 七、快活が男子の本領にして又成功の基なることを例解す。
- 八、されど快活は輕薄と異り、沈着は幽鬱と同じからず、故に快活ならんとして輕薄に陥るべからず、又幽鬱を避けんが爲めに沈着を棄つべからざること戒む。

### 参考

- 一、大江千里の歌に曰く、月見れば千々に物こそ悲しけれ、我が身一つの秋にはあらねど。(古今集)
- 二、榎本其角の句に曰く、名月や疊の上に松の影。
- 三、中庸に曰く、君子無入而不自得焉。
- 四、佐藤一齊曰、人須要快樂、快樂在心不在事。(言志叢錄)
- 五、一齊曰、胸次清快、則人事百艱亦不阻。(言志叢錄)
- 六、ブルマン曰く、仕事は人生を愉快にす。Arbeit macht das Leben süß. Burmann.



七、西哲曰く、英雄の眞に偉大なる所以は斷じて失望せざるにあり。 What proves the hero truly great, is never never to despair.

八、スマイルズ曰く、人固より望をかけ事を務めて其の成就する事を忍耐して待つべし。然れども常に快樂の心を失ふべからず、蓋し快樂の心は事をなすに絶好の本資なり。

快樂の心を以て勸勉の功を積みばその事必ず成就して福運必ず至るべし。抑も人生の最高なる快樂は其心公正明白にして敏快に功程をなすの中にあり。しかしてその他自ら力を奮ひ自ら信任する等の好性質はこの快樂に従つて生ずる事なり。(西國立志編四ノ九)

九、孔子曰、君子坦蕩々、小人長戚々。(論語述而)

十、孔子曰、君子不憂不懼……内省不疚、夫何憂何懼。(論語顔淵)

十一、ハイド曰く、元氣旺盛なる好漢は衷心快活の氣自ら面に溢れ之に會ふ諸人を化して又同じく愉快の情を起すを禁ずる能はざらしむ。ハーバート・スペンサーは其著、倫理學資料中に於て此間の消息を善く發揮し居れば余は此處

に其語を引用せんとす。曰く、壯健にして勢力旺盛なる人は其熟睡より目覺ひるや逸早く臥床より跳起き或は歌ひ又は口笛など鳴らしつゝ身仕度を整へ一寸した事にも直ぐ笑ひ出さんばかりの晴れやかなる面もちにて出て來り、其日の業務に就きて聊かだも嫌忌の色なくたゞ嬉しそなり。此くて時々刻々満足して充分の仕事をしてやがて退けて家に歸り休養するに至るも猶ほ綽々として餘裕の存するを看る。斯く活氣に充てる人は他人に對して常に愛相善し。即ち其妻に對して機嫌よく諧謔を話し其小供等に對しては無邪氣なる遊戲の事を話し其友人に對しては面白く談ずる中にも其上機嫌より口を衝いて出づる警句極めて愉快なりと。(實踐倫理第三章、運動の德)

十二、ハイド曰く、規則正しく活動する習慣を有すること及び習慣的に愉快なることの報酬は總て世事に對して自ら之を支配し處理するを得るものと考へ終始堂々乎として之に臨むを得る能力と及び諸人に對して常に快活にして爲に一個の敵人を作らず總てを化して朋友と爲すに至る伎倆とを併せて獲



得する處に存す。(實踐倫理第三章、運動の徳)

### 第三課 興味

目的 物事に興味を有するとは上達を速かならしめ、成業を容易ならしむ。故にこゝに興味を説き、興味を以て事に當る習慣を養はしめ、以て智徳の修養に資せしめんとす。

#### 要項

- 一、興味は心の持ちやうによるものにして、何事も面白しと思ひて之を爲せば、自ら興味を生ずるものなる事を例解す。
- 二、物事に對して興味を惹起する法は、先づ何事も興味あるものと思ひ定めて熱心に持續するにあり。かくせば自然に味を感じ、興味を覺ゆるに至ることを述ぶ。
- 三、興味と學課との關係を述べ、學課の練習に對して興味を加はるに從つて解決し、理會する所益々多く、從て其の効果大なるものあるが故に、熱心に持續して

學課に對する興味を喚起すべきことを説く。

- 四、徳を修め道を行ふ事も初めは多少の困苦を伴ふことあるべしと雖も、忍耐克己して持續せば、興味次第に加はり、遂に善を樂むの境涯に進むものなれば、修徳の興味を養成すべき事を説く。
- 五、事業に於ても亦然り。興味は熟達を速かならしむるものなれば、興味を有することは成功の基なることを述ぶ。
- 六、ニュウトンの例話に由り、學課に對する興味を鼓吹せんとす。
- 七、樂其の中にあることを説き、何事に當りても面白しと思ひて、努め勵むべきことを諭す。

#### 参考

- 一、ニュウトンのことは第二卷第四課に出づ、同課の備考参照。
- 二、人若し或る事業に對して云々「はカボット女史著日常倫理學卷三にあり。
- 三、孔子曰、飯疏食、飲水、曲肱而枕之、樂亦在其中、不義而富且貴、於我如浮雲。

(論語、衛靈公篇)



四、貝原益軒曰く、人の樂は善を行ふより樂しきは無し。漢の東平王の善をするはいと樂しといへるうべなるかな。(樂訓)

五、諺に曰く、すきこそ物に上手なれ。

六、貝原益軒曰く、むかし二人同じ船にのりて行くに、一人は性急なり。日和あしく舟のおそきをくるしみて晝夜、心をなやまし、形かじけたり。一人は性おだやかなり。舟のおそきをくるしまず。よく食し、やすくいねて顔色うるはし。其の所につきしかば、二人一時に陸にあがる。此の間船おそきとて、心をくらしめし者、何の益ありや。只みづからくるしましむるのみ。是心みじかき人の戒しめとすべし。天下の事我が力になしがたき事は、只天にまかせ置くべし。心をくるしむるは愚なり。(大和脩訓卷三、心術五)

七、益軒曰く、人生此の日の再び得難き事を知りて時々其の事をつとめて怠らず。日々此の生を樂しみてうれへず、よくつとめよく樂しむ人は一日を以て一月とし、一年を以て十年とし、十年を以て百年とす。つとめとたのしみとを以て身を終る。(大和俗訓卷四、心術下)

八、カポット曰く、人は趣味によりて物を見、趣味によりて道德力を加ふる者にし。て趣味は實に人間自身なり。……著しき趣味を有する人は著しき性格を有する人なり。リンカーンをして偉大ならしめたるは國家正義、兒童に對する彼の激烈なる趣味なり。風にも堪へぬ蒲柳のナイチンゲール女史をして奮然身を千里異邦の地に苦しめ以て空前の偉業を成さしめたるは實に人道に對する彼女の熱烈なる趣味によるなり。(カポット日常倫理學、榎本氏譯一、一三頁より一一四頁)

九、カポット曰く、趣味は道德生活の中心なるが故に、趣味を起すは道德生活を起すものにして、生活保存者として趣味の如く有效なる者他にある莫し。此の世に於ける貧困者の過半数は眞實不朽なる趣味の缺乏に基づくものなり。自己の職務に怠惰なる者も或る動機に驅られて一旦其の職務に趣味を有するに至る時は頗る勤勉者となるものにして、敬虔なる崇高なる生活を營むものなり。從來放肆無能なりしグラント將軍は一旦自己の指導たる強烈の趣味を抱くに至るや、戰爭に際して國民の忘るゝ能はざる無前の武勇を顯はし



たりき。(カボット日常倫理學一一七頁より一一八頁)

十、カボット曰く、趣味は又成功の基なり。人真に一事業に甚深の趣味を有せば其の事業の完成に必要なあらゆる美德は期せずして其の身に備はらん。英雄豪傑聖人智者とは非凡なる熱烈の趣味を有せるものに外ならず。

(全上一二二頁)

#### 第四課 獨立

目的 獨立が個人の價値を發揮し其の體面を維持するものなることを説きて他日獨立の人たらんが爲めに其の準備を積まじむることを主眼とす。

#### 要項

- 一、獨立とは萬事我が力にて處理することにて自己の價値を發揮し且其の體面を保つが爲に缺くべからざるものなることを説く。
- 二、獨立の第一歩は衣食住の獨立にある事を述べ、日常生活に於て他人に依頼する心を絶つべき旨を論ず。

- 三、依頼心は又學問の進歩を妨げ意志の發育を害するものなれば學生たる者は平素勉強するに當り獨立的精神を發揮すべきことを説く。
- 四、事業を營むに當りても依頼心あるものは成功すること能はず。故に獨力を以て自己の運命を開拓せんとする氣象を養成すべきことを述べ。
- 五、新井白石の例によりて獨立の精神を鼓舞す。
- 六、次に意見を以て行動するに當りて妄りに他人の言動に附和雷同することなく、自ら是非を辨別して言動に出で以て、自己の品格を維持する事が獨立を全ふする爲に必要な事を説く。
- 七、お伽噺によりて自己の定見なくして行動する者が如何なる結果に了るべきかを示し以て戒となす。
- 八、自助的精神が我が國民に乏しきことを述べ、我が國民たる者は平素よくこの精神を體得し、以て個人的及び國民的獨立の基礎を修養すべきことを説く。

#### 參考

- 一、語に曰く、君子不隱其短、不知則問、不能則學。(春秋繁露)



二、諺に曰く、七轉び八起き。

三、西諺に曰く、天は自ら助くる者を助く。 *Help yourself and Heaven will help you.*

四、陸象山曰、自立自重、不可隨人脚跟、學人言語。

五、韓退之曰、士之特立獨行、適於義而已、不顧人之是非。(八家文、伯夷頌)

六、西諺に曰く、自ら爲せば功を收むること速なり。 *Self done is soon done.*

七、ラ・フォンテーヌ曰く、汝自身に頼れ。 *Rely on yourself. La Fontain.*

八、スコット曰く、凡そ人他人より教育を受くることなれども、その實は自らを教育すること大部分にして、且つ最善のものとする。(西國立志篇) *The best part of a-*

*very man's education is that which he gives to himself. Scot (Smiles, Self-Help.*

九、ギボン曰く、人は皆二種の教育を有す、一は他人より受くるものにして、他の一

層重要なるものは自ら與ふる教育なり。 *Every person has two educations, one which*

*he receives from others, and one more important which he gives himself. Gibbon.*

十、キンケル曰く、人は自ら自己の運命を作る。 *Sein Schicksal schafft sich selbst der Ma-*

*nn. Kinkel.*

注意 少年青年の時代は獨立の時期にあらずして他日獨立せんが爲に準備するの時なり。故に此の時期に於て心掛くべきは第一に他日生活上の獨立を得んが爲めに才能を練磨すると共に自立自營の精神を涵養することはなり、第二に意見行動の獨立を得んが爲めに附和雷同を戒め平素自ら正邪善惡を辨別して自己の行動意見を決定することに努めざるべからず。尙他方より之を見れば年齒少なる間は善惡の判斷を誤ることなきを保し難きが故に、多少なりとも疑あらば師長に就きて指導を仰ぐべく、又一般に師長の經驗に富める忠言を容れて己が短を補ひ、以て邪惡なる言動に陥ることを堅く自戒するを要す。然るに妄りに獨立獨行を唱へて他の忠言に耳を傾げざるが如きは所謂剛情にして、こは動もすれば青年の陥り易き弊風なれば、本課教授の際は特に此の點に留意せられん事を望む。

### 第五課 善惡の岐路

目的 人間の行爲には至る所善惡の岐路あり。而して一度方向を誤れば遂に終



世の禍根を醸すに至るべし。故にこゝにかゝる分岐に立てる際の心得を授け、以て善惡の岐路に迷ふことなからしむることを主眼とす。

要項

- 一、善惡の道は道路の分岐の如く、其の始めに於ては接近せるものなれば、心の持ち様如何によりてその何れにも向ひ得るものなることを述べ。
- 二、過失の場合を見るに、善惡に關して深き考慮を須ひざりし爲めに、不知不識の間に犯すこと多し。かくの如く不善に陥るも實に危機一髪の間にあるを以て、善惡の岐路に立つ毎に過去の經驗を回想して以て戒となすべきことを論ず。
- 三、惡行の原因には種々ありと雖も、多くは本と善惡に關する見解を誤り、最初の一步を輕卒にするに因るものなれば、行爲する初めに當りて慎重なる注意を拂ふべき旨を説く。
- 四、善惡の岐路に立たば宜しく冷靜なる良心の判斷に俟つか、又は師長の命令に従ふべく、然らずんば最初の一步を誤りたるが爲に益々邪路に迷入して生涯

正道を踏む能はざるに至るべきことを戒む。

参考

- 一、易曰、君子慎始、差若毫釐、謬以千里。(禮記)
- 二、左傳曰、人非聖人、誰無過、過而能改、善莫大焉。
- 三、貝原益軒曰、善も惡もかならず小をつみて大に至る。故に善は小なりとてすつべからず。惡は小なりとて行ふべからず。(大和俗訓、卷六躬行上)
- 四、益軒曰、人の善を見ては我も亦此の善あらん事を思ひ是をまなび行ふべし。人の不善を見ては、我も亦此の不善ありやと身をかへりみおそれ、もしあらば改むべし。如此すれば見き、する所の善惡皆わが物となる。(前同上)
- 五、益軒曰、善をするのはぼり坂をのぼるが如し。つとめざればなし難し。惡をするは下り坂をくだるが如し。つとめざれどもなしやすし。しかれば善をこのみて力を用ひ、つとめ行ふべし。惡はにくみてつゝしみおそるべし。

(大和俗訓躬行下)

六、王少湖曰、學者事無大小、纔覺心所不安、便斬絕勿爲、如此乃得遂其本心、不挫其浩



然之氣。

七、通鑑に曰く、遷善則其徳日新、遂非則其惡彌積。

八、西諺に曰く、快樂は短かく、悔は長し。 From short pleasure long repentance.

九、亞哲曰く、自ら省みて正しきを知れ、然る後勇進すべし。

Be sure you're right, then go ahead.

十、西諺に曰く、事を爲すに正邪二道あり。 There is a right and wrong way to do a thing.

### 第六課 習慣の養成

目的 善惡共に習慣によるものなれば、その重んずべきを知らしめ、以て善習の養成と惡習の芟除とに努力せしむることを目的とす。

#### 要項

一、習慣は同一の行爲の反復に由つて生じ、而して習慣はその行爲の實行を容易ならしむるものなることを述べ。

二、習慣は第二の天性にして、一度習慣となれば善行の實踐益々容易となるに反

し、惡行は彌々拔く能はざるに至ることを述べ、以て習慣の重んずべきことを説く。

三、習慣は積りて性質となり、これやがて品性を形成するものなれば、品性を修養せんが爲には、惡習を避けて善習を積まざるべからざることを説く。

四、習慣は又事業の成否の由つて分るゝ所以にして、勤勉正直等の良習あるものは即ち成功し、然らざるものは假令天資に富むも失敗を免るゝ能はざることを述べ。

五、善習を養成せんが爲には、先づ日常の行爲に就いて反省し、改むべきは直に改め、養ふべきは之を反復し、その間よく決斷と忍耐とを以て、之に當り又順序を追ひ卑近なるものより漸次に養成することに努むべき旨を諭す。

六、善習及び惡習の中主要なるものを列舉して習慣養成に資せしむ。

#### 参考

一、西諺に曰く、習慣は第二の天性なり。 Habit is a second nature.  
一、諺に曰く、無くて七癖。



三、フランクリン(Benjamin Franklin)は一七〇六年北米合衆國ボストンに生る。父は臘燭石鹼の製造を營みながら貧しき生計を立て、彼はその第十七子なりき。幼にして小學校に入學したれども貧困の爲に卒業まで修學を續けること能はず、十歳の折退學して家業を助くるに至れり。彼が十二歳の時兄の印刷業を始むるに當り、彼は兄と共に之に従事し、其の間費を省きて書籍を求め、寸暇をも利用して勉學せり。資本漸く潤澤となるに及び、フィラデルフィアに出て、業務を擴張せり。斯くて彼は餘財を得るに及びて、圖書館を設け、學校を建て、道路を改修する等公益事業に盡瘁し、又業務の餘暇物理学を研究して、雷電と電氣との同一なることを實驗して、避雷針を發明し、英米の學位を贈られたり。然もその間深く修養に留意し、時間割を定めて規則正しき生活を營み、主要なる徳目十三を擧げて、其の養成に努めたり。彼曰く、余は一小冊子を作り、十三徳の一個／＼に一頁を與へ、各頁に赤インキを以て罪を畫して、七行となし、各行を以て一週間の一日に充て、各行の日の名を記し、更に是等の行を十三の赤き横行を以て横ぎり、其の各行の始めに十三徳の一の首字を書し

縦横線を畫したる間に適當の場所に於て小黑點を以て余が反省の後の其の日其の徳に關して行へる各過失を記すことにせり。余は一週間づゝの全注意を順次十三徳の各個に與へんと決心したり。故に第一週に於ては余の大用心は節制に對する最小の違犯をも避くるにありき。而して他の諸徳は適當の有様に放棄して、唯毎夕其の日の過失を記し置けり。斯くして若し第一週に於て第一行即ち節制の行が黒點なくして經過したるときは此の徳の習慣は既に頗る鞏固となり、其の反對の惡習は微弱となり、余は余の注意を推擴して次の徳に及し、次週の間は二行を黒點なく經過せしむることを試み得べしと信じたり。斯くの如くに最後まで繼續して余は十三週に一回を卒業し、一年に四回を卒業することを得たりき。恰も庭園に草を除く者の滿園の雜草を一時に抜き去らんとするが如くに、及ばざることを企つることなく、一時に一壇を抜き、第一段に終りたれば、次回は第二に移り、漸を追ふて成功する如く、余は漸次に余の黒點ある諸行を潔白にし、以て日記上に余の徳の進歩を見る快樂を有し、遂には數回の功を積み、或る十三週間の點檢の後には一潔白



の手簿を見る幸福を望みたりき。フランクリンの十三徳とは次の如し。

- (一) 節制 情氣生ずるまで食ふ勿れ。心亂るゝまで飲むなかれ。
- (二) 沈黙 己を益し人を益することの外は語る勿れ。すべて無用の談話を避けよ。
- (三) 秩序 汝の有するものはすべて一定の所に置き、汝の爲すべきことは各々一定の時に處理せよ。
- (四) 決斷 汝の爲すべきことは必ず遂行すべし。而して決心せしことは必ず遂行して過る勿れ。
- (五) 儉約 他人を利し己を利する外には金錢を費す勿れ。要するに一物も浪費すべからず。
- (六) 勉勵 時間を失ふ勿れ、常に有用なる業務に従事してすべての無益なる行動を捨てよ。
- (七) 誠實 有害なる虚偽を用ふる勿れ、率直に正當に思慮し、言ふ所と行ふ所とを合せしめよ。

- (八) 公正 惡事を爲すことにより、或は汝の義務たるべきことを怠るによりて累を他人に及ぼす勿れ。
- (九) 中庸 極端を避けよ、假令怒るべきことも之を忍べ。
- (十) 清潔 身體衣服及び住居の不潔を等閑に附す勿れ。
- (十一) 平靜 總て些々たる事、平常の出來事、避くべし、もたらざる事故等の爲に惑亂する勿れ。

(十二) 仁愛

(十三) 謙遜 クリスト及びソクラテスに倣へ。

四、ウエリントン曰く、習慣は性質に十倍す。Habit is ten times nature. Wellington.

五、ウエリントン(Wellington 1769-1852)はナポレオンをウオターローに破りたる名高き英國の將軍なるが、甚だ性急の人なりき。然るに克己によりて此の弱點を矯正して沈着の氣風を養成するを得たり。かくてウオターロー其の他の戰場に於て彈丸雨飛の間に立ちて神色自若として號令するを得たりき。

(スマイルヌ品性論)



五、フシントンは天性多情多感の人なりき。彼の傳記によれば彼の氣質は猛烈なりき彼の感情は強烈なりきされど絶えず之を抑へて終に勝利を得たり。故に彼の温順、柔和、謙遜等の美德は幼時より熱心に努力せし克己修養の賜に外ならず。即ち彼の傳記によれば彼の感情は猛烈にして強烈に流れんとせしが彼は其の刹那に於て之を抑制する力を有したり。恐らく彼の品性中最も著しきは克己ならん。(スマイルス品性論)。

### 第七課 酒と煙草

目的 酒と煙草とが心身に及ぼす害毒を述べて少年時代より此の惡習に遠ざからしむることを主眼とす。

#### 要項

- 一、飲酒が衛生、風儀、經濟等の上より見て有害なること特に青年の飲酒の有害なることを述ぶ。
- 二、酒が心身を害し、子孫に害毒を及ぼし、遂に犯罪、兵方にまで影響することを説く。

- 三、されば各國何れも或は重税を課し、或は販賣を制限し、又は販賣を嚴禁して酒害の防止に努めつゝあり。然し乍ら各人自ら節制を重んじて之に遠からんとする決心なくんば酒害の防止は望むべからず。故に青年たるものは特に警戒して飲酒の惡習を避くることに努力すべき旨を説く。
- 四、喫煙が衛生上風儀上果た經濟上有害なることを述ぶ。
- 五、高杉晋作の例話により禁煙の可能を述べ、喫煙の惡習を遠からしめんとす。

#### 参考

- 一、釋迦の戒酒は長阿含經にあり。
- 二、釋迦曰く、酒は不善諸惡の根本なり。若し能く是を除斷せば則ち衆の罪を遠ざく。(涅槃經)
- 三、グラッドストーン曰く、酒害は饑饉、ペスト、戦争の三害を合せたるものよりも更に大なり。
- 四、西諺に曰く、海よりも盃に溺れたるもの多し。 More men are drowned in the bowl



than in the sea.

五、西諺に曰く、酒が来れば智慧が去る。 Where wine is in, wit is out.

六、酒は百薬の長、酒は天の美祿、下戸の建てたる倉はない等の諺は衛生思想の幼稚なりし舊時代の思想を現せるものにして、今月より見れば笑ふべきものなり。

七、酒の害は即ちアル、コールより来るものなるが、今數種の酒に就いて其のアル、コール含有量の百分數を示せば左の如し。

清酒 一四、一六四 麥酒 三、九五〇

佛國葡萄酒平均 八、四三五

尙我が國の酒精、外國のウィスキー、ブランデー等は多量のアル、コールも含有せり。

八、酒害の甚しきは、最も恐るべき疾病、即ち卒中、吐血、肺結核等が飲酒家又は其の子孫に多きこと、及び飲酒家が一般に短命なることによりても知らるべし。尙酒害の著しきものを擧ぐれば、

一夫婦の平均産兒數

四、一

非飲酒家……………

孰れか一方が飲酒家…………… 一、三

夫婦共に飲酒家…………… 一、〇

男子飲酒家の五分の一…………… 生殖力缺乏

女子飲酒家の三分の一…………… 不妊

生後二ヶ年内死亡の百分數

二四

母非飲酒家……………

母飲酒家…………… 五五

四七一…………… 父 飲酒家

八四…………… 母 飲酒家

六五…………… 双方飲酒家

双方非飲酒家

不明

一七一……………

二〇九……………

一〇〇〇…………… 全兒童數

六二〇…………… 親飲酒家

白痴、痴鈍、癩癩の兒童に關するブルタウイール氏の調査

ルグレン氏が二百十五の飲酒家族を三代に亘りて調査したる所左の如し。

三代間子孫の總數 八一四人

一九七…………… 大酒家

三二二…………… 白痴及精神病者

一七四…………… 早産、死産、或は生後即死

九三…………… 體質虚弱、結核質

二八…………… 健康者

三代目の生存者十七人中何れも白痴或は癩癩又は虚弱者なり。



三池監獄の調査に依れば、入監囚徒の百分の八十は飲酒に關係あるものなり。九、パウルゼン曰く、酩酊は吾人の合理的思慮を不可能ならしめ、不合理の行爲を阻止せず。故に人に對するや、不合理のなり。甚しきに至りては、則ち殘忍刻薄の行爲に出でしむ。實に酩酊と犯罪との間には因果的關係ありて、殊に人格に對する罪惡を犯すものなることは人の能く知る處なり。

(倫理學大系六三四頁)

十、パウルゼン曰く、此際先づ己が戸前を清うせよ、てふ古諺を忘るべからず。今日専ら我國に行はるゝ大學及び大學以外の俗物の有する飲酒の風と富者及び貴族の荒める口腹の欲とは人の墮落を進むる實に少しとせざるなり。日毎に麥酒舗に入り、朦朧たる煙草の煙に包まれ、愚話を反復するを聞き、兒戲を演ずるを見、范然として家に歸るもの、如何ぞ嚴肅に又熱心に業務を營むを得べき。日夕食卓に就く毎に只管口腹の奴隸たるもの、如何んぞ専ら一事に精神を委ねるを得可き。かゝる儕輩は胸中飽足の念に滿ち、爲めに大事を成さんとの希望は杜絶せらるゝものなり。(倫理學大系六三八頁—六三九頁)

十、パウルゼン曰く、統計を案ずるに、獨逸國民は毎年煙草の爲めに殆んど三億マルクの金額を消費す。吾人は固より喫煙者の快を取るを嫉むものにあらずと雖も、三億マルクの巨額の金を以てせば、彼有害なる煙草よりは他に何等か善きものを購ひ得るにあらずや。例へば此金額を以て居住を改善し、裝飾せば、單に所動的に喫煙に關係するものの四分の三以上は必ず大に益する所あるべく、恐らくは喫煙者其人も亦別に不利を招くことなかるべし。余は多年の經驗にも拘らず、全體に於て喫煙が苦痛よりも寧ろ快樂を生ずるものなるかは、尙ほ疑を存するものなることを自白せざるを得ず。人の父たるもの、其子女が喫煙を學ぶを見て果して快感を惹起すべきか。(倫理學大系六四二頁)

十一、パウルゼン曰く、近世に於て特徴の認むべきもの三あり。プランデー、煙草及び佛蘭西風是なり。近世は己が文明が遙に中世に優る事を誇れども、其の文明にして此三者に成るとせば、中世が文明を有せざりしは、敢て憂ふるに足らざりしなり。實にや、印度人の麻醉性植物の乾ける葉をば管にて又は之を卷きて其の煙を吸ひ、再び之を吐出し、若くは其葉の細末を鼻孔に填めたる野



蠻なる習慣が全世界の白人、黄人乃至黒人に傳播し其根抵牢乎として固く又抜く可からざるに至りしは不可思議なる事實なりとす。露國の文豪トルストイ亦之に關して思惟する所あり。其何を以て人は自ら昏迷するやと題する小冊子に於て答へて曰く「其良心を昏迷せしめんが爲なり。此目的を達せんには煙草とアルコールと殊に効あり」と。言ふ所固より修辭上の誇張ありと雖も又一部の眞理を道破せずとせず。世の學生たる者何が故に喫煙飲酒するや之を好むによるか抑も又其如何なる結果を生ずるやを知らずして自ら憐れむべき境遇に淪落するか。(倫理學大系六四二頁)

十二、煙草の中にはニコチンと稱する猛毒素あり。これが爲めに頭痛、眩暈を覺え嘔氣を催し、其の害の甚しきに至れば、胃腸の作用を薄弱ならしめ、腦病、脊髓病、心臟病及び眼病を發することあり、又舌癌、胃癌の誘因となり、其他呼吸器の障害を惹起することあり。故に本邦にても未成年者の喫煙は法律にて禁止せり。

## 第八課 娛樂

目的 娛樂の必要とそが人格に及ぼす影響とを説き以て高尚なる娛樂を求めて一方に於ては心身力の恢復を計り、他方にありては修養に裨益する所あらしめんとす。

### 要項

- 一、健康上及び作業の進捗上娛樂の必要なること即ち仕事に勉勵せんが爲にその必要なることを説く。
- 二、娛樂と云ふも仕事には興味なくして他の遊びに興味ありとの意にあらずして仕事の爲に疲勞せる心身を暫く他に轉じてその休養を計るの謂なり。
- 三、娛樂の種類を挙げ身體に關するものと精神に關するものとの區別あることを述べ。
- 四、娛樂の選擇は時と場合とに應じて異なる所ありと雖も、青年としては快活にして體育に益あるものか、若くは高尚にして修養を助くるものを選ぶべく、決して



て心身を害するが如きものを選ぶべからざることを説く。

五、偉人が快活なる運動或は高尚なる精神的娛樂に由て心身の修養に裨益したる例を擧げて學生の鑑とす。

六、娛樂は餘戯なれば之に由て本業を怠る如きことなからんことを戒しむ。

参考

一、源義家の歌にして人口に膾炙せるものには、吹く風をなこそその關と思へども道もせに散る山櫻花あり。上杉謙信には、霜滿陣營秋氣清、數行過雁月三更、越山併得能州景、莫遮家鄉懷遠征あり。

武田信玄には、詩歌數多あり例へば、おもひいる山のはもなしさとるまのころのうちにする月影、君を祈る加茂のやしろのゆうたすきかけて幾代か我もつかへむの如きあり。乃木大將も詩歌をよくし、就中有名なる詩には、皇師百萬征強虜、野戰攻城屍作山、愧我何顏看父老、凱歌今日幾人還、山川草木轉荒涼、十里風腥新戰場、征馬不前人不語、金州城外立斜陽等なり。廣瀬中佐には、旅順閉塞に出發するに當り朝日艦の士官に書して贈りたる詩に、死生有命不足論、

鞠躬唯應酬至尊、奮躍赴難不辭死、從容就義日本魂、一世義烈赤穂里、三代忠勇楠子門、憂憤沒身薩摩海、慷慨就刑小塚原、或爲芳野廟前壁、遺烈千年見鏃痕、或爲菅家筑紫月、詞存忠愛不知冤、可見正氣滿乾坤、一氣磅礴神州存、嗚呼正氣畢竟在誠字あり。

二、西諺に曰く、よく學びよく遊ぶ。 Learn while you learn, play while you play.

三、禮記に曰く、樂不可極、必約、歸於禮。

四、バウルゼン曰く、休息に二重の目的あり。消費せる勢力を回復する其一、職業に従事する間使用せざりし勢力を使用する其二。後者は鬱散に屬するものにして殊に精神を使用する職業にあるものは遊戯旅行機械的活動等もて適度に體力を使用して之をなし、之に反して平生殊に身體を勞する職業にある者は讀書杯の精神的活動もて之をなす。交際音樂遊戯等は何人にとりても鬱散の好手段なりとす。勞働と鬱散とが適度に平衡を保持するは健康、堪能及び幸福の要件にして之を過度に失するは兩者孰れも危険なり。

(倫理學大系六五七頁)



五、ハイド曰く、遊戯の人を快活ならしむるや良くもすれば之を促して興奮の域に迄突進せしむ。而して往々にして此興奮其物が遊戯の唯一目的なるが如く誤解せらるゝ事あり。是れ實に、あらゆる種類の鬱散及び娛樂に伴ふ誘惑なり、故に世の善良なる人士は此誘惑の危険を怖るゝが故に同じ休養を取るに際しても特に深入し易き恐ある娛樂は一般に之を選ぶことを嫌ふ。……此の點に於いて戶外の自然的遊戯例へば游泳の如き舟航の如きその他漁獵登山騎行の如きは弊害最も尠し、從ひて吾人は運動又は娛樂を試みんとする時は成るべく此種の遊戯を勵行することを心懸く可きなり。之に反して舞踏弄花、觀劇、玉突の如き室内の人爲的遊戯に至りては特に吾人をして興奮其物の爲に興奮を求むる如き如上の惡弊に陥らしめ易きものなれば吾人は之によりて眞の保養の下に善く我が鬱屈せし勢力を洗刷する能はざるのみならず、却りて之に耽るの餘り吾人の勢力は不識の裡に消耗し去らるゝものなるを忘るべからず。(實踐倫理、第三章運動上の誘惑)

六、ハイド曰く、元來娛樂は正當に之を利用すれば眞面目なる業務に要する吾人の

の勢力を増進せしむるものなり。若し誤て之を人生々活の重大要件なるが如く迷想し、只管之を追求するに於ては他の眞面目なる業務の一切は甚だ氣の抜けたる沒趣味のものと思はれ、而して遂には娛樂其物も同様に面白からざる平凡のものと思ひ做さるゝに至る。(實踐倫理、第三章運動その過ぎたる不徳)

## 第九課 讀書

目的 讀書の効果と讀書に關する注意とを與へて智徳の修養を圖らしむることを主眼とす。

### 要項

- 一、讀書は精神の食物なれば、特に修養に志したる者は之に親しまざるべからざることを説く。
- 二、世に良書と惡書とありて良書が修養を裨益するに反し、惡書は心を汚し身を誤らしむるものなればその選擇の極めて重要なることを述べ。



- 三、書籍の選擇に關して二三の注意を與ふ。
- 四、學生としては教科書を主として、聖賢の遺訓、偉人傳、その外參考書、一般修養書、高尚なる文學書等を読むべく、殊に文學書は高尚なるもののみを選び、然らざるものは修養を毒する力頗る大なるものがあるが故に、絶対に排斥すべきことを説く。
- 五、良書を精讀して高尚なる知識を吾がものとなすべきことを諭す。
- 六、讀書の趣味の高尚有益なる所以を述べ、此の趣味の養成に心懸くべき旨を教ふ。

參考

- 一、王陽明曰、三日不讀書、顏面生塵。
- 二、黃山谷曰、三日不讀書、語言無味。
- 三、西哲曰、朋友を選擇する如く、著者を選択せよ。 Choose an author as you choose a friend.
- 三、山鹿素行曰、讀書必以聖人之書爲大本、爲標準、其餘數千萬卷皆多涉利口、故詳料

作者之言行意志、讀之可也、至聖人之書、讀來讀去、裏面平易而教化、大本竟立、至其餘、太可悅、太如進、而專利口捷徑也、然祐其知識應愛、又不可釋之。

(山鹿語類卷三十四)

四、山鹿素行曰、書者載古今之事跡器也、人不通古今、則昧時宜、不知風俗、不察人情之過不及、故餘力閑暇之間、手不釋書、上師聖人、下學群賢、擇其著者、戒其不可者、日月如此、則物格知致、而成德全才、是免命所謂學于古訓、乃有獲之謂也。

(山鹿語類卷三十四)

五、貝原益軒曰、ちよその事友を得ざればなしうべからず。唯讀書の一事は友なくてひとり楽しむべし。一室の内に居て天下四海の内を見、天地萬物の理を知る、數千年の後にありて數千年の前を見る。今の世に在りて古の人に對す。我が身おろかにして聖賢にまじはる。是皆讀書の樂なり。

凡よろづのことわざの内、讀書の益にしく事なし。(樂訓卷下)

六、ペーコン曰く、或る書は味ふべく、他は嚙下すべく、少數のもののみ咀嚼し且消化すべし。 Some books are to be tasted, others to be swallowed, and some few to be chewed an



a digested Bacon.

七、伊藤仁齋曰く、書を讀むは當に沙を洵して金を拾ふが如くすべし。取ること  
は其の廣からんことを欲し、擇ぶことはその精しからんことを欲す。

八、グラッドストーンの讀書法は極めて規律正しきものなりき。彼は書を讀む  
時常に鉛筆を手にし記憶すべき箇所には一條の線を引き、疑問ある點には印  
を附し、自己の意見と一致せる所には十文字形の符號を附したり。又書籍の  
末尾に自ら索引を作り、何時にても重要な箇所を見るを得るやうに準備し  
置きたりとぞ。

九、アレキサンダーは讀書を好み、東方遠征の際陣中に在る間と雖も書を携へ、殊  
にホーマーのアキレス物語を愛讀し、毎夜就眠する間も劍とアキレス物語と  
は枕の下に置くを常としたりと云ふ。

十、孔子曰、學而不思則罔、思而不學則殆。(論語、爲政)

十一、諺に、言外の意といふことあり。

十二、本居宣長の歌に曰く、文よまで何につれ、慰まむ春雨のころ秋の長き夜。

十三、吉田松陰曰く、士不通古今、不師聖賢、則鄙夫耳、讀書尙友君子之事也。

(士規七則)

十四、福澤諭吉曰く、文藝の嗜は人の品性を高くし精神を娛ましめ之を大にすれ  
ば社會の平和を助け人生の幸福を増すものなれば亦是れ人間要務の一なり  
と知るべし。(修身要領、二十一)

### 第十課 偉人

目的 偉人を説き、其の修養の跡を示し、學生をして之に私淑して修養の資たらし  
めんとす。

#### 要項

- 一、偉人とは人類の儀表の謂なることを述べ。
- 二、偉人の資格として第一に偉人は高遠なる志望を懷抱せるものなることを例  
證し。
- 三、次に偉人は此の志望を貫徹するに必要な鞏固なる意志を有することを述



四、最後に偉人は高尚なる品性を有し萬人欽仰の標的たらざるべからざること  
を述べ。

五、偉人に私淑すべきことを説き先づ偉人の心を心とし、彼等が修養の跡を學び  
以て彼等の如く正しく清く、美しき生涯を送ることに努力すべきことを諭す。

参考

一、フランクリンの言。 There was never yet a truly great man, who was not at the same time a  
truly virtuous. Franklin.

二、パウロの言。 It is no longer I that live, but Christ that lives in me. Paul.

三、ヂズレリー曰く偉大なる思想を以て汝の心を養へ、英雄の言行を信ずるは自  
ら英雄となるの始なり。 Nature your mind with great thoughts, to believe in heroic-  
makes hero. Disraeli.

四、トムソン曰く、英雄の眞に偉大なる所以は斷じて失望することなきにあり。  
What proves the hero truly great, is never, never to despair. Thomson.

五、セネカ曰く、斷乎不拔の決心を以て正義に就きし者は最も偉大なる人なり。

The greatest man is he who chose right with most invincible resolution. Seneca.

六、北米の詩人ロングフェロー曰く、吾人は翼を有せず、以て蒼天に翔る能はず、吾  
人は雙脚を有す、宜しく歩一步を進み、徐々として行くべし、彼の大人豪傑が占  
め得たる高地位も決して一躍して達し得たるにあらず、彼等は、其傍輩が熟睡  
せる深夜に辛苦經營して攀ち上りたるなり。

七、孟子曰、居天下之廣居、立天下之正位、行天下之大道、得志與民由之、不得志獨行其  
道、富貴不能淫、貧賤不能移、威武不能屈、此之謂大丈夫。(孟子、滕文公章下)

八、孔子曰、君子去仁、惡乎成名、君子無終食之間違仁、造次必於是、顛沛必於是。

(論語、里仁)

九、孔子曰、君子不憂不懼、……内省不疚、夫何憂何懼。(論語、顔淵)

十、西郷南洲曰く、人を相手にせず、天を相手にせよ、天を相手にして、己れを盡し人  
を咎めず、我が誠の足らざる尋ねべし。(南洲遺訓)

十一、スコット曰く、眞に人たるの名に愧ぢざる者は一身を顧みずして能く人の



爲に盡し、人の爲に謀る者なり。 The man, whom I call deserving the name, is one whose thoughts and exertions are for others rather than himself. Scott.

十二、シラー曰く、偉大なる精神は靜かに耐忍す。 Gross Seelen dulden still. Schiller.

十三、偉人に私淑して自らも偉人となりし例は、キリストに私淑せしポーロ、ワシントンに私淑したるリンカーンの外、古英雄アキレスに私淑せしアレキサンダー、シーザーに私淑せしナポレオン、周公に私淑せし孔子、孔子に私淑せし孟子等數多の例あり。

孔子曰、甚矣吾衰也、久矣吾不復夢見周公。(論語述而)

孟子曰、予未得爲孔子之徒也、予私淑諸人。

十四、アレキサンダー (Alexander the great B.C. 356-323) はマケドニア王、フィリップの子にして弱冠にして王位に即き近傍を平定したる後世界平定の壮志を抱きて先づ東方遠征の途に就き遠く印度まで征服せしが歸途バビロンにて病を得て歿す。彼の志は世界を平定して東西文明の融合を計り、こゝに世界的王國を建設するにあり、されば遠征には多くの學者を伴ひ、又征服地よりも學者

を召し、或は人種の混合を計り、その劃策する所多かりしに、早世の爲め遺業瓦解するの止むなきに至りしが、彼の企圖が當時の文明に對して齎したる意義は決して輕視すべからざるものあり。

十五、ワシントンの事は第二卷第七課備考にあり。

十六、リンカーンに就ては第二卷第八課備考参照。

十七、カント (Kant, 1724-1804) はドイツのケーニヒスブルクに生れし大哲學者にして、生涯を哲學の研究に委ね、家庭を作らず旅行を爲さず、終世ケーニヒスブルクに居住し、同地大學の教授となり、著名なる述作をなして世を終れり。彼の著として名高きは「純粹理性批判」、「實踐理性批判」、「宗教論」等あり。哲學史上に一轉機を劃せし大家なり。

十八、ニコウトンの事は第一卷第十二課備考にあり。

十九、シェイクスピア (Shakespeare, 1564-1616) は英國エリザベス朝の文豪にして脚本に於てギリシアのソフォクレス以來の不朽の大作を公にし、今に至るも世界的名作として各地に實演せらる。



十九、ゲーテ(Goethe, 1749-1832)はドイツの大文豪にして、名門に生れ多藝多能にして文學の外或は政治家として、或は博物學者、理學者として卓抜なる識見を有し、就中その文學は脚本、小説、詩に於て何れも世界的なる不朽の文字と稱せらる。

### 第十一課 不撓不屈の精神

目的 鞏固なる意志が偉人たるに缺くべからざる資格なることを述べたる前章の意を承け、不撓不屈の精神が一切の成業の基礎なることを悟らしめ以て學生をして意力の鍛鍊を積ましめんが爲にこゝに偉人の範例を示して學生を激勵せんとす。

#### 要項

- 一、鞏固なる意志と如何なる困難にも堪へ得る忍耐力とは成業の原動力にして古來の英傑が皆この資格を具へたることを述べ。
- 二、ダーウインに就いて學者の例を示す。

- 三、アレキサンダーに就いて戰士の例を示す。
- 四、フランクリンに就いて事業家の例を示す。
- 五、エヂソンに就いて發明家の例を示す。
- 六、カーライルに就いて思想家の例を示す。
- 七、ナポレオンに就いて軍人政治家の例を示す。
- 八、ゴールドスマスに就いて文學者の例を示す。

#### 参考

- 一、諺に曰く、七轉び八起き。
- 二、子張曰、難忍難忍、非人不忍、不忍非人。(明心寶鑑)
- 三、吉田於陰曰、死而後已四字、言簡而義廣、堅忍果決、確乎不可拔者、含是無術也。

(子規七則)

四、荀子曰、積土成山、風雨興焉、積水成淵、蛟龍潛焉、積善成德、而神明自得、聖心循焉。

(勸學篇)

五、白樂天續座右銘曰、千里始足下、高山起微塵。(白氏長慶集)



六、孟子曰、舜發於畎畝之中、傅說舉於版築之間、膠鬲舉於魚鹽之中、管夷舉於土、孫叔  
學於海、百里奚舉於市、故天將降大任於是人也、必先苦其心志、勞其筋骨、餓其體膚、  
空乏其身、行拂亂其所爲、所以動心忍性、曾益其所不能。(告子下)

七、西哲曰く、天才は忍耐なり。 Genius is patience.

八、頼山陽曰く、我を才子といふ者は未だ我を知らざるなり、我をよく刻苦すと云  
ふもの眞に我を知れるなり。(山陽先生行狀)

九、ジョンソン曰く、吾人が常に嘆賞して措かざる所の人間の技術の有らゆる成  
功は全く忍耐不撓の抵抗すべからざる力の例證なり。 All the performances of hu-  
man art, at which we look with praise and wonder, are instances of the resistless force of persever-  
ance. Johnson.

十、東方の諺に曰く、時間と忍耐とは桑葉を變じて紬緞となす。 Time and patience c-  
hange the mulberry leaf to satin.

十一、西哲曰く、撓まず働けば惡魔近寄らず。 Constant occupation prevents temptation.

十二、古人の句に曰く、精出せば氷る間もなし水車。

十三、熊澤蕃山の歌に曰く、憂きことの尙この上に積もれかしかぎりある身の力  
ためさじ。

十四、熊澤蕃山(名は伯繼、字は了介、蕃山は其號、通稱次郎八、平安の人、備前國岡山の芳列公  
姫路侯に仕へ、元祿四年七月歿す、年七十三)年二十二始めて書を讀み、朱注に由りて四書を研究す、尋  
て中江藤樹に學ぶ、初め蕃山の篋を負て遊學するや、良師を得ず、偶々中江氏の  
學徳一世に高きを聞き、此人を捨て、誰にか適從せんとて、直に東裝往て、謁し  
業を門に受けんと請ふ、藤樹時に篤學修行を以て一國を風化し、人賢不肖とな  
く、皆其徳に服し、善に興起せざるは無し、蕃山の來るに及びて、辭するに人の師  
と爲るに足らざることを以てす、蕃山益々請て置かず、二晝夜其廡下に立ち、敢  
て去らざるなり、藤樹之母之を見、蕃山の志篤に感じ、藤樹に謂て曰く、人遠方よ  
り來り懇請此の如し、之に其習ふ所を傳ふ共、誰か好みて人の師と爲ると謂ん  
や、是に於て始めて接見し、道を教ふ、蕃山時に年二十四、藤樹を師として孝經  
大學中庸を學び、刻苦砥礪、良知の淵源に悟る所ありと云ふ。(日本百傑傳)

十五、チチアン(一五四七七年イタリーのピエツ、デ、カドレに生れ)はイタリ有名の畫



家又勉強して倦まざる人なり、其の世に著稱せらるゝ、「ピードロ、マルチレ」の畫は八年にして成り、「ラスト、サツバー」の畫は七年にして成れるものなり、白耳曼皇帝チャールス五世に畫を贈りて、「我今陛下にラスト、サツバーの圖を送る、實に七年の間毎日工夫を用ひたるものなり」と云へり。(西國立志篇)

十六、河村瑞軒は新井白石と善かりき、嘗て白石に謂て曰く、「子は今日に至るまで死を決せしこと幾度ありや、白石の曰く、「吾れ人と諍ひ、死を決すること再三に及べり、瑞軒の曰く、「今子の死せざるを見れば、さきに死を決せしは皆死せざるべきのみなり、夫れ死せざるべきことに猶ほ斯く死を決す、請ふ今より後、死を學問に決して一意に奮勵すべし、必ず能く大業を成さんと、白石大に悟り、此より志を立て、心を學事に專にし、竟に其家を興し、名を後世に垂る。白石常に語りて曰く、「吾業の此に至ることは實に瑞軒翁の一言に由れりと。

十七、明石に一土人あり、射を好むこと甚し。而して左臂彎曲して滿引する事能はず。師に就きて學ぶこと三月進む所なし。師曰く、「止めよ、人各能くする所あり。獨り弓のみならんやと。土人退きて深く憾み、意を決して妻を出し、獨

り一室に臥し、晝は則ち弓を手にし、夜は則ち肱の上に石臼を載せ、戶外に出で、遊ばざること三年餘なり。其の先師弦聲を聽きて曰く、「此れ名手なり、吾れ、是が業を受けんと入りて之を問へば、則ち舊の弟子なり。大に驚きて以て神と爲せり。(鹽谷岩陰の「記興小」川三平話に出づ)

十八、ダーウイン(Darwin 1809-1882)は英國シェリョーペリーに生れ、家は相當の名家なり。幼より博物學に興味を有し、長じてエヂンバラ大學にて醫學を修めしが、彼の之を好まざるを見て父は僧侶たらしめんとしてケムブリッジ大學に轉學せしめたり。されど彼が興味は博物學に趨り、遂に彼はその種々の動物及びその化石等を採集してひたすら研究に餘念なく、種の變遷に就て深く研究考察を重ねたる末、茲に進化論を唱道し、一八五九年研究の結果たる種の起原を出版して、生物學に一新生面を開拓し、歐洲の學界に絶大の刺激を與へ、今日の生物學その他一般の思想に偉大なる影響を及ぼすに至れり。

十九、アレキサンダーに就ては前課備考参照。

二十、フランクリンのことは本卷第六課の備考にあり。



二十一、エヂソンは一八四七年に米國オハイヨ州に生れ、貧困の間に生長せしが、讀書と實驗とを好み、十一歳の時列車内の新聞賣子となり、後自ら新聞を發行し、時恰も南北戦争の頃なれば之に由りて利益を收め、讀書と實驗の自由を得たり。後電信技手となり、この間に速記法及び自動機を發明し、之を端緒として種々の發明をなし、後自ら工場を設け専ら發明に従事し、特許を得たる數一千を越え、就中著名なるは電話、白熱電燈、蓄音機、真空ポンプ、活動寫眞、電動機、蓄電池、セメント製法等なりとす。性堅忍不拔にして、十五年の間毎日平均二十時作用に従事し、時としては六十時間連続して勞作せしことありと云ふ。彼曰く、人生は短く、余の爲さんと欲することは多し、之を思へば一日と雖も安逸すること能はずと。

二十二、カーライル (Carlyle 1795-1881) は英國の大思想家にして、評論に長じ、世事を顧みずして専心思索と述作とに従事し、「英雄崇拜論」「サーター、レザータス」「佛國革命史」等の名作を出せり。深くソクラテス及びケレーテに私淑せり。

二十三、ナポレオンのことは第一卷六課にあり。

二十四、ゴールドスミス (Goldsmith 1728-1774) は英國の小説家にして、自然に復歸せんとする思想の代表者にして、普通の生活の中に人生の意義を探らんとせり。ヱイカー、オブ、ウエー、ク、フイールドは彼の代表的傑作なり。

## 第十二課 勇氣の滋養

目的 元氣は青年の特質なり。さればこれを善導して眞の勇氣を涵養せしめ、併せて暴勇を戒むることを主眼とす。

### 要項

- 一、勇氣に大勇と小勇とあり、大勇は正善の上に立つものにして、偉人の有する不撓不屈の精神は即ちこの大勇なることを述べ、青年たるものは正善を行ひ成業に達するにこの勇氣なかる可からざる旨を説く。
- 二、勇氣は第一に知より生ず。何となれば事理に明かなれば恐怖の念根絶するを以てなり。故に智を磨くが勇氣涵養の一法たることを述べ。
- 三、されど智は徳を伴はずんば眞の大勇を發揮する能はず、蓋し徳あるものは内



に省みて疾しきことなきを以て天下に恐るゝ所なければなり。ソクラテス孔子尊徳の例に由つてこの理を説く。

四、徳ある者は死さへ恐るゝことなし、故に徳を修むることは勇氣涵養の要道にして、聖賢が大勇を具へたるは非凡なる知識を有する上に崇高なる徳を具へたるが爲なることを述べ。

五、かくの如く智徳の修養は即ち勇氣涵養の要道なれば、吾等は知を磨き徳を修め以て眞の勇氣を養ふべきことを説く。

参考

一、孟子に曰く、自反而不縮、雖褐寬博、吾不憚焉、自反而縮、雖千萬人、吾往矣。(褐、寬博は鄙人の着る衣、即ちこは鄙人の謂なり)(孟子公孫丑章句上)

二、孔子曰、見義不爲無勇也。(論語、爲政)

三、左傳に曰く、勇不作亂。(成王十七年)

四、孔子曰く、勇而無禮則亂。(勇語、秦伯)

五、禮記に曰く、有義之謂之勇敢、故所貴於勇敢者、貴其能以立義也。(聘義)

六、孔子曰、暴虎馮河死而無悔者、吾不與也、必也臨事而懼、好謀而成者也。(論語)

七、孔子曰、志士仁人、無求生以害仁、有殺身以成仁。(論語、衛靈公)

八、孔子曰、勇者不懼。(論語、子罕)

九、アレキサンダー曰く、勇者は懼れず、剛者は沮まず。

Nothing is invincible to the brave nor impregnable to the bold. Alexander.

十、ケローリー曰く、人は彼が善事と信ずる所のものは總て之を爲すの勇なかるべからず、而して又惡と信ずる所のもの外は何事に對しても狐疑躊躇すると勿れ。

Man should dare all things that he knows is right, and fear to do nothing save which is wrong. Phebe Cary.

十一、西哲曰く、勇者は武器を要せず。

A courageous man never wants weapons.

十二、ソクラテス(Socrates, 469-399 B.C.)はギリシアなるアゼンスの大哲學者なり。

當時ギリシアは舊時代の思想、信仰全く破壊せられ、民心を統一支配すべき新



文明未だ成らざるに乗じてソフィストの一派徒に詭辯を弄して道德の頹廢を馴致せし時に當り、獨りソクラテス起り、諄々として道を説き、得意の辨證法を以て確實なる道德的信念の啓發に努めたり。されど彼の所説は舊思想と一致せざる所より、且つは彼が青年の間に漸次勢力を占め來りし所より守舊派の忌憚を受け、彼は國家の認むる所の神を信ぜず、異端を説きて青年を迷はす者なりとの理由の下に法廷に訴へられ、遂に死刑を宣告せらる。この間に弟子等は師の正しきを以て死刑を受くるの不可を論じて難を國外に免れんことを請ひしに、彼は斷乎として弟子の同情を斥け、ギリシアの市民として飽くまで國法に遵はざるべからざる所以を説きて弟子等を慰め、從容として毒盃を仰ぎぬ。臨終にありて恩師との永別に堪へずして涕泣せる弟子に向ひ死の恐るべからざる所以を説き、泰然とし瞑目せり。又彼は四三二、四三四、四二二年の三回に互りギリシアの軍に従ひて戰場に臨みけるときも、剛毅勇敢を以て衆の模範たりしと云ふ。

十三、二宮尊徳大久保忠真侯の委囑を受け野州櫻町の復興に従事したる時、天保

四年初夏時氣不順にして霖雨止まず、先生或る時茄子を食するに其味常に異り、恰も季秋の茄子の如し。箸を投じて歎じて曰く、今時初夏に當れり。然して此物既に季秋の味を發する事豈唯ならんや。是を以て考ふるに陽發の氣薄くして陰氣既に盛なり。何を以てか米穀豐熟することを得ん、豫め非常に備へずんば百姓飢渴の憂に罹らんか。是に於て三邑の民に令して曰く、今年五穀熟作を得ず、豫め凶荒の備へを爲すべし、一戸毎に畠一段歩其の貢税を免ずべし、速に稗を蒔き飢渴を免るゝの種とせよ、忽にすべからずと。諸民之を聞き笑つて曰く、先生明智ありと雖も何ぞ豫め年の豊凶を知らんや。戸毎に一段歩の稗を作らば三邑夥多の稗なるべし。何れの處に之を貯へん。且つ稗なるもの舊來貧若に迫れりといへども未だ之を食はず。今之を作りたりとも食ふことを得ず、然らば無用のものと云ふべし、假令人に與ふるといへども誰か之を受けん。詮なきことを令するものかなと嘲りたり。然れども貢を免るし作らしむ、之を背かば必ず命を用ひざるの咎めあらんと、止むを得ずして俄に稗を作り、無益の事を爲せりと怨望する者あるに至る。然るに盛夏



といへども降雨多くして冷氣行はれ終に凶歳となり、關東奥州の飢民枚擧すべからず。此の時に至り三邑の民稗を以て食の不足を補ひ一民飢に及ぶものなし。始めて先生の明鑒豫め凶荒を計り、下民を安ずるの深意を知り、我が智の淺々たるを悟り、曾て無益の事となし活命の令を嘲りたるを悔ひ大に其の徳を稱す。(報徳記)

十四、孔子五十六歳の頃、衛の靈公の許を辭し、陳に行かんとして匡を過ぐ。曾て陽虎といへる者匡人を苦しめたることありしが、孔子の容貌酷だ陽虎に似たりしかば、匡人孔子を捕へ拘留すること數日、從ふ所の弟子皆怖る。孔子曰く、文王既没、文不在茲乎、天之將喪斯文也、後死者不得與於斯文也、天之未喪斯文也、匡人其如予何、論語子罕と超えて數年まさに六十、曹の國を去つて宋に往き、大樹の下にて弟子と共に禮を習ふ。時に宋の司馬桓魋といへる者其の樹を抜きて孔子を壓殺せんとしければ、弟子等は速かに去らんことを勸ひ、孔子曰く、天生德於予、桓魋其如予何、論語述而と。

十五、ガリレオ(Galileo, 1564-1642)はイタリアの天文學者なり。多年研鑽を重ね、工

夫を積みて望遠鏡を作りて天體を觀測し、天文學上の多くの新發見をなし、又コペルニクスの地動説を承繼して之が普及に努めたりしが、此新説はキリスト教の信仰基礎を破壊するものなりとて教會の忌憚する所となり、七十歳の時その學説は異端と認められ、ローマに召喚せられ、牢獄に投ぜられたり。その間彼は飽くまで自己の所信を曲げず、遂に獄中に歿す。死後法王はその墓を營むことさへ禁じたり。

十六、ブルノー(Bruno, 1548-1600)はイタリアの哲學者なり。哲學上にては汎神論を主張し、天文學上にては地動説を唱へたり。ローマ教會の忌む所となり、法王廳に換問せられ獄に投ぜられ、入獄九ヶ年に亘りその間説を改めんことを強制せられしかと頑として應ぜず、遂に火刑に處せらる。判決の時に當り判官に向ひ死刑を宣告せらるゝ予は何等の恐怖する所なけれども、宣告する卿等の不安を見ずやと云ひけりとぞ。

十七、ハーヴェー(Harvey, 1578-1657)は英國の醫學者にして血脈循環の説を唱へたる時、家業は衰へ、同業者を始め世人は馬鹿者として嘲笑せり。されど彼は